
チェック・メイト

神門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チエック・メイト

【Nコード】

N0920T

【作者名】

神門

【あらすじ】

世界には一般人、魔法使い、能力者の三種類が存在していた。

普通の人間が普通に高校に通うなか、とある高校に入学することになった何の変哲もない一般人の少年の物語。しかし、その高校は特殊な学校で、何やら秘密が隠されているようだ。

波乱万丈な日々のなかで、主人公が仲間との友情を深めていく学園バトル！

序局く新たなる舞台（ステージ）く（前書き）

基本主人公は本人視点です。初投稿&駄文ですが、どうぞよろしく
お願いします。

序局く新たなる舞台（ステージ）く

「第九百九十九条、上記にある校則を破りし者、これを罰する……
つと。これで全部……はあつ……しっかし、やたらと長いなこれ。
見てるだけで首が痛いぜ」

分厚い本を閉じながらそんなことを呟く。

読んでいたのは俺がこれから入ることになる学校の案内書^{バイブル}。校則
やら校則やら校則やらが書いてある。他の事は一切書かれてはおら
ず、まるで何かにとりつかれた様に校則ばかりを記載した本。まさ
に校則のオンパレードである。いやエレクトリカルパレードか。

全く、世の中のお偉方はそんなに決まりが大切なのかねえ？俺、
決まりとか守るタイプではないのだが……。

えゝ、先ほども話したように、この案内書^{バイブル}がやたらと分厚い。そ
れはもう広辞苑に匹敵する程で、読み終わる頃には、もう朝の八時
をまわっていた。

……え？八時？俺、起きたの五時だぜ？珍しく。三時間もこんな
本に読み入ってたのか。本って凄いですね。

しかし、考えてもみよう。たった三時間で広辞苑程もある厚さの
本を読み終えたのだ。これは驚嘆すべき記録なのではないのか？人
間はやれば出来るものだ、と初めて思えた瞬間だった。

つと、そんなことはどうでもいい。

「確か、登校時間は八時三十五分までだったよな。今から着替えた
らギリギリだ。急ごう」

自室のクローゼットから白い制服を取り出して羽織る。ワイシャ
ツはもとから着ていたため、多少は着替えに要する時間を短縮出来

るだろう。

あ、間違えた！先に下から着替えた方が良かったかも知れない。
こういう時に限ってあいつが……。

「神夜ー！」

「おわっー！」

ほら、やっぱり来やがった。部屋のドアを勢いよく開けて入り込んできた不貞な輩。こいつは俺の幼馴染、咲群緋狩さきむらひかり。俺より一つ年上で、小さい頃はよく一緒に遊んだっけ……。家も隣だったし。いやいやいやいや！思い出に浸っている場合ではない。何故なら今の俺は制服にパンツ一丁という奇怪な格好をしているからだ。早くこいつを追い出さねえと！年頃の男女が部屋で二人きり。しかも俺はこんな格好。こんなもの、誰が見てもしたら完全に誤解を招いてしまう！

「もう、遅い！神夜、早くしなさい！」

「うつさい！大体、お前は何で昔からタイミングが悪いんだ！」

「え？どこが？最高に良いタイミングだと思うけど？」

デリカシーの無い女め……。

「生憎、デリカシーなんて持ち合わせてないの」

「て、てめー！勝手に心を読むな！」

この咲群緋狩の驚くべき能力、それは“人の心を読むことが出来

る”というものだった。この能力は生まれつきらしく、さらに発動と持続時間は自由ときた。なんだそれ、人間なのか？

ただし弱点はあるらしく、心が高ぶっている時の相手の心と、心を開いた人間の心しか読むことが出来ないらしい。これは、緋狩が聞きもしないのに、俺に教えてくれたことだ。つまり、リラックスしている相手の心は読めないということになる。戦いで役に立つ能力だな。

「とにかく、早く下着てよ。時間、あんまり無いんだからね」

誰のせいでこうなったと思ってやがる！おとなしく外で待ってりや良いものをわざわざ中まで入ってくるから、余計に時間くっちゃまっただろうが！

「そうつれないこと言わないの。二年生、クラス＜騎士^{ナイト}＞であるこの緋狩様が直々に来てあげてるんだから」

くっ！また心を……。しかも自分のことを“様”付けて、どんだけ自意識過剰よ？いつかギャフンといわせてやるからな。

「努力してみなさい」

「覚えてろよ……」

……………しまった！勢いで啖呵きつたけど、俺の心は緋狩に筒抜けだった！どんなことを考えていてもその裏をかかれてしまっただけだ。どうしようもない。俺のささやかな抵抗は、簡単に打ち砕かれた。

「さあ早く！」

「はあ……分かった、分かりましたよ」

強引に俺の手を引いて家を後にする緋狩。俺は抵抗すること無く、手を引かれて学校へと向かうのだった。この時は、あんな面倒なことが起こるとは、予想もしていなかった。

……今更ながら、自己紹介をしたいと思います。俺の名前は明星みょうせい神夜よしかみ。一応この作品の主人公となっており、今日から高校生になる。好きなことは寝ること。嫌いなことは……面倒なこと。親は二人とも海外にいるために、今は一人暮らしを満喫中。

俺が通うことになる学校は、国立捨て駒すてこま学園。

……とても、とても悲しい名前なのは、スルーして下さい。

と、いうわけでこれから波乱の学園生活が始まるわけである。学園の詳細な説明はまた後ほどしたいと思いますと思うんで、これからよろしく！

序局く新たななる舞台（ステージ）く（後書き）

どうでしたでしょうか？出来るだけ早くあげていききたいと思います。
どうか感想よろしくおねがいします。

第一局 壇上（ステージ・オン）～（前書き）

投稿二回目です。あまり自信はありませんが、よろしく願います。

第一局く壇上（ステージ・オン）

初めに言っておこう。俺、明星神夜は学校が大嫌いだ。どれくらい嫌いかというと、『学校があるから』という理由だけで世界を滅ぼすための口実を作れるほど。

毎日、何かとつけて授業、授業、授業。ほんの少しの休み時間の後に、五月蠅い教師どもの顔を何度も見なければならぬ。

そんなことが毎日継続されていくと、もう本当に嫌になる。他の連中は何故耐えられるのだろう？と、いつも不思議で仕方なかった。教師との間で何度いざこざを起こしたか、もう数えられない。それくらい、俺は学校を憎んでいる。いや、“いた”か……。

そんな俺が、日本の中でもトップクラスの捨て駒学園に何故入れたのだろう？その疑問が俺の頭の中を駆け巡っていた。先ほども話したように、名前こそ悲しいものの捨て駒学園は日本の中でも優等生が集まる高校として有名だ。

俺みたいな落第生を入れていたら、学校の名に泥を塗るのではないのだろうか。

ましてやその俺がこんなことを……。

「わ、私達は、この学校に入学できたことに誇りを持ち……」

今俺がやっているのは、新入生代表挨拶。入学式の席でぼーっとして座っていたら、突然俺の名前が呼ばれた。誰の策略だまったく！もちろん代表挨拶など考えているはずもなく、全てアドリブだ。何を話せばいいのか全く分からないので、とりあえず皆が並べそうな建前だけを適当に言ってやり過ごすことにしたわけで。

「これから、よろしく願いします」

目の前に居る校長と後ろからの視線を一点に浴びながら、俺は挨拶を終えた。

拍手が起こり、俺は一礼してから壇上を後にする。

（……勝った！やったぞ！俺はやりきったのだ！もう怖いものなどない！神にでもなった気分だ！わはははは！最高だ！ファンタスティック！……はっ！マズイマズイ。俺は何を興奮しているんだ。イカンイカン、冷静になるんだ。冷静に）

ふと二年生の席を見ると、緋狩と目が合った。そう、まるでそこに緋狩がいるのを分かっていたかのように、ピシヤリと目が合ったのだ。緋狩は右手の親指を上げて“よくやった”と言わんばかりの笑顔を向けている。俺は頭を抱えなくなったが、そこは耐えるところ。何せ、皆が見ているのだから。

高校では良い子ちゃんて通そうと決めた俺の決心は、固かった。

さうと、お次は教室でのSHRショートホームルームだったよな。

幸いなことに、担任は……女性だ！しかもかなり若いらしい。この地獄のような生活の中に差し伸べられた、まさに救いの手。

おっと、噂をすればだ。

教室の引き戸を開けて入ってきたのは、黒髪に藍色の瞳をした女性。スーツの着こなし方からみるに、かなり清潔な印象イメージだ。

見渡すと、もうクラスの男子ほとんどが目をハートにしており、女子も半分くらいはそうになっていた。だがしかし、俺は決して目をハートになんてしない！してなるものか！あの美貌をこの目に焼き付けなくては！

「皆さん初めまして。このクラスの担任になりました、咲群沈黙さきむらしずかです。よろしくお願いします」

おお！声まで美しいではないか！まるで鈴の鳴るような……ん？
ちよつと待て……今あの人、咲群って言わなかったか？確かに言った。はつきりと。

「あ、あの……」

恐る恐る手を挙げた俺に先生が笑顔で振り向いてくれた。

「はい、何かな？え」と、明星神夜君？」

「先生って緋狩の関係者、ですか？」

「あら、緋狩を知ってるの？……あ、もしかしてあなた、明星さんとこの神夜君！？」

「は、はい」

「やっぱり！大きくなったわね」神夜君！私、緋狩の姉の沈黙よ。覚えてない？」

ビンゴ、やはり沈黙先生は緋狩の親族であつた。しかし、まったく覚えていない。本当だ。

くそっ！俺としたことが、こんな美人のことを忘れてしまつているというのか。不覚、一生の不覚。しかし、覚えていないものはしょうがない。正直に答えよう。

「すみません。全く」

「まあ、仕方ないか。私、あなたが二歳の時にアメリカに留学したから、当然といえば当然なのよね。ごめんね、変な質問しちゃって」

な、ん、だと……！俺はこの美人ひでの手のひらで踊ひらされていたというのか……。

「と、いうわけで、今から私がこの学校について説明します。みんなよく聞いてね？」

どういうわけだ！

「この捨て駒学園には六つのクラスがあり、まず一年生は全て>歩ボ兵シくから。そして二年生へ上がるときに、成績や能力に応じて>僧ベシヨッフく、>城ルックく、>騎士ナイトく、>女王クイーンく、>王キングくの五つに分けられるんです。一番能力の高いものは、当然ながら>王キングくに配属、ということになりますね。皆さん>王キングくになれるようになって下さいね」

はい！と皆の元気一杯な返事をよそに、俺は机に顔を預けていた。何だかどつと疲れたような気がする。流石に緋狩の姉さんなだけのことはあるようで、掴みどころのない人だ。

「では、これでSHRショートホームルームを終わります。神夜君、号令お願いね」

ここでも俺なのか……まあ良い。

「きりーつ、きをつけー、れーい」

「なあ、ちよつと良いか？」

「ん？」

先生が出て行き、騒がしくなった教室で俺が小さくなって眠っている、一人の男が声をかけてきた。

誰だこいつ？身長は俺とあまり変わらないようだが、決定的な違い、それは明らかに俺より愛想が良さそう、というところだ。

「俺は城ヶ崎悠聖。じょうがさきゆうせい 仲良くしようぜ神夜？」

妙に馴れ馴れしい口調に少しばかり不快感を覚えるが、友達が出るのは悪い気分ではないので従うことにした。机から立ち上がり、悠聖の差し出した手をつしりと握る。

「……ああ、よろしくな、悠聖」

かくして、なんだかよく分からないかたちで高校初の友を得たのだった。

さあ、これから忙しくなるな……。

第一局く壇上（ステージ・オン）く（後書き）

進展がありませんね。次、少しは進展出来ると思います。
ではまた会いましょう。

第二局く運を味方にく（前書き）

タイトル名は気にしないでください。良いのが浮かばなかったなので。

第二局　運を味方に

「ふふふ、さあ神夜、この状況をどう覆す？」

「これで勝つたら奇跡だぜ？」

「神夜っちの負け決定かな？」

「……………」

登校初日の休み時間。

俺は今、今日出来た友達もとい、仲間の城ヶ崎悠聖を加えた四人で……大貧民をやいる。今チエスしてたと思つた方、すみません。大人数でやるなら大富豪が良いと、悠聖からたつての希望があつたものでして。

ここらで、後の二人を紹介しようではないか。

一人は悠聖の友達、水床終^{みなとこしゆつこ}。悠聖に負けず劣らず愛想の良い奴だが、悠聖のように馴れ馴れしいわけではなかった。こいつとは、仲良くなれそうだ。

そしてもう一人、白^{はく}状^{じやう}科^{しな}世^よ。こいつは女子だが、俺らのやり取りを見ていて面白いと思つたらしく、『私も混ぜてー』的なので自然と打ち解けあつた。そして、魔法が使えるらしい。属性は水だとか。まあ、読心術を操る幼馴染を持つ俺にしてみれば、別に珍しいことではないが。

この女が俺のことを“神夜っち”なんて呼びやがるから、俺はクラスでも浮いてしまっている。

一応アイドルらしく、ファンもたくさんいるとのこと。もちろん、このクラスにもファンはいるわけで、“神夜っち”と呼ばれたとき

に、俺に刺さる視線が痛いなんのつて。

さて、話に戻るぞ？

俺の手札は五枚。八、四、三、Jack、そしてJoker。悠聖、終牙、科世はそれぞれ二枚ずつ。恐らく、あれはかなりデカイ数字のはず。だがしかし、どんなにデカイ数字でもJokerには勝てないことを教えてやる！スペードの三はもう無い。というより、俺が持っている。

さあ、逆転劇の始まりだ！奇跡を起こしてやろうではないか！

「くつくくくつ……お前らが、大富豪で俺に勝てると、本気で思っているのか？」

「な、何！？」

「見せてやる！まずはJoker！」

全員が“しまった”というような顔でJokerを見つめるがもう遅い。俺の勝利の方程式は既に完成しているのだから。

「続けてJack！……下だ」

三が三枚出た今、三は俺の一枚のみ。八も、俺の持つ八が唯一。下の序列において、三の存在は最強だ。当たり前のように三を出す。ターンが流れて俺の番。

「喰らえ！八切り！これでお終いだあああああ！四！」

短くも激しい戦いに終止符を打ったのは、俺の放った四だった。啞然としているのは三人だけではなく、馬鹿騒ぎを聞きつけ、集ま

ってきた他の連中の口もあんぐり状態。

「約束通り、ジュース一本奢りな」

俺はそれだけ言うと、教室を後にした。向かう先は、自販機。

話していなかったが、あの大貧民はジュース一本を誰に奢るかを決めるものだったのだ。昔から賭け事には強く、負けたことは無い。仕組んだだろ、とその度にいわれ続けてきたが、何度やっても俺が勝つのだから仕方あるまい。

そうこうしている間に、自販機へと到着。今回奢ってくれるのは科世だ。アイドルだし、結構稼いでいるだろうという俺の勝手な予想で連れて来てしまった。

「いやゝ、神夜っちは強いねゝ。私なんか、もう手札Kingと六しかなかったよ」

「まあ、な。俺、賭け事で負けたことないから」

「何か必勝法とか在るの？」

「別に無いさ……ああ、しいて言うなら、『運を味方につける』かな」

「へえゝ……分かった。私も運を味方につけられるように頑張るよ！」

「応援してるぜ」

科世に奢ってもらったジュースを飲み干した俺は、科世と並んで教室へと帰る。途中、周りの生徒からの視線が嫌というほど突き刺

さったが、何とか無事に教室へと戻り、静かに寝息を立てる。隣では、悠聖、終冴、科世の三人が何やら話しているが、俺の耳は封鎖状態にあり、ほとんど聞こえない。

……そういえば、次の授業『実践演習』だったっけ。演習ったって何をするのだろう？ 全く映像が沸かないのは俺だけだろうか。ちよつと聞いてみよう。

「悠聖、『実践演習』って何をすんのか、知ってつか？」

「いや、何も。これから、咲群先生から説明があるみたいだ」

悠聖がそう言うタイミングを待っていたように、沈黙先生が何やら資料を大事そうに抱えながら教室へ入ってきた。余程重かったのだろう、息が上がっている沈黙先生。

「えー、これからみんなに『実践演習』のやり方を説明します。席に着いて下さい」

皆が席に着いたのを確認した沈黙先生は、手に持っている資料を………配らないだど！？ じゃあ資料は何の為に持ってきたんだ！ 労力の無駄ではないか！

天然なのかわざとなのか、やはり掴みどころの無い人だ。

「演習は、クラスから十六人を選出し、>歩兵<八人、>僧<二人、>城<二人、>騎士<二人、>女王<、>王<をそれぞれ一人ずつ決めてもらい、その人達で布陣を作って、戦ってもらいます。ただし、魔法を使える人に限り、>僧<に就いてもらいます」

ほう、面白そうだな。十六人とは、まさにチェスではないか。これだ！ 俺はこういうのを待っていたんだ！ というより、魔法使える

奴なんて科世以外に誰が居るんだ？

「では先ず、全ての指揮を執る>王^{キング}くを決めてもらいたいと思うんですが、誰か良い人は居ませんか？」

ん！？何故みんな一斉に俺を見る！他に居るだろ！？悠聖とか！

「うん！みんな、神夜君が良いみたいなので、無条件で神夜君に決定します」

もう、好きにしてください。

「じゃあ、私は……」

「>女王^{クイーン}く！！！！」

教室内の全ての声が重なり、科世が女王に決定。そこはお決まりのユニゾンだ。実際、魔法が使えるので>僧^{ビショップ}くかとも思ったが、皆が言うならそれで良いのだろう。

そして、悠聖は>騎士^{ナイト}く、終牙は>城^{ルーク}くになった。駒としては最高に良い材料が揃ったが、さてどうやって戦略を組み立てようか……。

長い廊下を上品な足取りで歩く一人の女性。その腕には一冊の本。立ち止まったのは、校長室だ。

「校長、私です」

「霜月君か…… 入りたまえ」

霜月と呼ばれたその女性は校長室のソファに腰掛けると、おもむろに腕に抱えていた本を広げる。どうやら今年度の新入生^{リスト}一覧のようだ。その一覧^{リスト}には、神夜や悠聖、終冴に科世の名前や顔写真が記載されている。

「ほう、これはこれは……」

「中々生きの良い子たちが集まっています。この時点でも、即戦力^{レベル}として起用できる水準ですが……」

「そうですか…… では、この調子でお願いしますよ？」

「はい。この霜月叶恵^{しもつきかなえ}、あなたのお心のままに」

二人の目線の先には、校長室の窓から見える演習場。丁度、神夜達^{ポーン}と歩兵く一組が入って行くところだった。

第二局〱運を味方に〱（後書き）

少しは進展できたと思います。感想あればよろしくお願いします。

第三局〜第一実践演習〜

国立捨て駒学園第一演習場。この捨て駒学園に六つある演習場の一つ。今日、俺達はこので>歩兵^{ポーン}く四組と演習を行うことになった。とりあえず、布陣は普通のチェスと同じように>歩兵^{ポーン}くを前に八人置き、他の駒もチェスにおいて基本とされる位置に配置させている。

>王^{キング}くである俺は、当然ながら>女王^{クイーン}く、つまりは科世の横で指示を出すわけだ。

それぞれの駒には装備があるらしく、装備の耐久力が切れた時点でその駒は戦闘不能とみなされ、演習場から強制転送される、と演習の教本に書いてあった。

え？教本なんていつ見たのかって？……ついさっき。

沈黙先生が持ってた資料がそうだよ。持ってくるだけ持ってきて配らないと思ったら、演習場に着いてから配りやがったんだ。その上言い訳が『忘れてた。てへっ！』だと！？これが沈黙先生じゃなかったら殴り飛ばしてたところだまったく。

演習の際、>王^{キング}くには自軍と敵軍の配置図がモニタリングでき、無線で自軍の駒へと指示を飛ばすことで動かせるらしい。その通信は敵軍には聞こえないので心配は無いとのこと。

「初期設定の耐久力は……>歩兵^{ポーン}く三〇〇、>僧^{ビショップ}く四二〇、>城^{ルーク}く七六〇、>騎士^{ナイト}く六三〇、>女王^{クイーン}く八九〇、そして>王^{キング}く一〇〇〇か……」

目の前のモニタに、高速で装備の情報が流れていく。
分かる。何だか知らんが、俺の頭の中には勝つための戦術、いや

戦略が浮かんでいた。

そして本番。演習を行う一組と四組の生徒が互いに向かい合い、握手。まあ、勝負は礼に始まり礼に終わる、とも言うしな。相手には敬意を払おうではないか。それなりに、な。

「俺は四組の>王^{キング}く、志野原鐘騎^{しのはりしやうき}だ」

「一組>王^{キング}く、明星神夜。よろしく」

「ああ、でも手加減しないぜ？」

何が『でも』なのかまったく分からないが、突っ込むと色々面倒な事になりそうなのでやめておこう。

「ありがたいね」

それだけ言うと、俺は鐘騎に背を向けて歩き出す。向かう先は、玉座。>王^{キング}くの君臨するに最も相応しい場所だ。

全員が配置に就き、辺りが静まり返る。すると、沈黙先生の声が演習場備え付けの巨大モニタから聞こえてきた。いよいよ始まるようだ。

「なあ神夜、大丈夫なのか？お前に戦術なんて……」

「大丈夫だ。それに戦況を左右するのは戦術ではなく戦略だって、誰かが言ってた気がする。さあ早く配置に就け」

俺を心配して声をかけてきた悠聖を一蹴し、配置に戻す。不思議と緊張はしていない。むしろ高ぶっている感じだ。演習とはいっても、戦いには違いないのだから。

「それでは、第一回実践演習……開始!!」

その合図で敵陣が一気に自軍への突進を仕掛けてきた。何と愚かな戦術。的にしてくれと言っているようなものではないか。俺は焦ることなく指示を出す。

「相手両翼の伸びる先を抑えろ!悠聖、終冴、二手に分かれて相手を囲むように展開。>歩兵<を三人ほど連れて行け。俺への道は開けても構わない!好きなだけ攻めさせてやれ!」

「しかし、それじゃあお前が……」

「俺を信じろ、悠聖」

「……分かった。しっかり指示頼むぜ?>王<さんよ?」

何せ>王<^{キング}の耐久力は一〇〇〇。そうそう簡単に落ちるものではない。>歩兵<^{ポーン}から袋叩きにされても持ち堪えるだけの耐久力だ。

モニタを見ると、俺の指示で左右に大きく展開した悠聖と終冴が徐々に敵陣後方に回り込みつつあった。敵陣はこれに全く気付いていないのか、目の前の>歩兵<^{ポーン}を倒すことに必死になっている様子。悠聖の耐久力は残り五六二。終冴は七〇三。こちら駒はほぼ無傷。>歩兵<^{ポーン}が二騎程落とされたが、想定内。と、そこへ

「ボウン！」

「くっ！」

「神夜つち！大丈夫！？」

「ああ、大丈夫だ」

どうやら敵陣の>僧シヨシビからの魔法攻撃のようだ。装備で守られているため、肉体に直接のダメージは無いが、衝撃は伝わる。案外痛い。

（属性は炎か……耐久力は残り九六四。まだまだ大丈夫。あれを排除するには……）

「前線の部隊は後退し、距離を保て！科世、あの>僧シヨシビに、格の違いを思い知らせてやれ！」

「はい！高圧の水球よ、仇為す者を撃ち伏せろ！六式連水砲！ろくしきれんすいほう」

>女王クイーンとこと白状科世の詠唱により水の二丁銃が生まれ、それを手に取った科世はお構い無しに乱射、乱射、乱射。その銃口からは、六発の水弾。

放たれた水弾は、全て>僧シヨシビへと向かい命中する。そして、水弾を喰らった>僧シヨシビが一瞬にして消えてしまった。戦闘不能になって演習場から強制転送されたのだろうか。

俺は横目で科世をチラリと見る。『やり過ぎちゃった』と自分の頭を叩く科世。

自軍への被害が出ないよう、前線を下げたのは正解だったようだ。

撃たれた敵陣の>僧くを哀れに思うと同時に、“科世が同じクラスで良かった”と安心感を胸の内に抱いていた。

科世曰く、魔法を使っても耐久力は減るらしく無限に使うことは出来ないという。威力の大きな術なら尚更だそうだ。

「よし、時間は稼いだ……悠聖、終牙、準備は良いか？」

「良いぞ！」

「こつちもOKだ！」

俺の問いに、無邪気な子どもみたいに答える悠聖と終牙。まるで俺のやろうとしている事が分かっているかのようで、他の駒の配置も完璧。

（さて、やるか！）

タクティカル・フォーメーショントラス
「必殺布陣、脱出不能牢！」

回り込んだ悠聖と終牙の部隊が敵軍を丸く取り囲み、逃げる隙を与えないように他の駒がその間を埋める。これが、この布陣を作ることこそが、俺のやろうとしていたこと。

俺を狙って前に出すぎたのが仇となったようで、もう敵軍はこの牢から逃れることは出来ない。俺への道を開けさせて、相手が攻め込んでくるようにしたのはこのため。

誰でも敵の大将を目の前になると、気持ちが高ぶって我先にと前へ出ようとする、心理を利用したわけだ。

「科世、可哀想だが、みんなまとめて終わりにしてあげなさい」

「じゃあ、あれを使おうかな。ちょっとエネルギー消費激しいけど

ね……………激流の真髓よ、全てを浄化し洗い流せ！四式大水牢！よんしきだいすいろう」

特大の水球が出現し、逃げられなくなった敵軍を丸ごとすっぱり包み込んで空中で静止する。中の駒たちは苦しそうに悶えているが、そんなの知ったことではない。敵に情けをかけて攻撃の手を緩めるほど、俺は優しくもなければ、お人好しでもないのだから。

プライドの高い相手は情けをかけられるくらいなら死を選ぶだろうが、学校で死んでもらっても困る。まあ、鐘騎がそんな高いプライドを持ち合わせていたらの話だが。

「科世、残りの耐久力は？」

「後、六三二。この術で一〇〇はエネルギー使うから」

渦巻く激流の中で次々に消えていく敵軍の駒達。それを無言で見つめている俺は、あの日のことを思い出していた。

そう、俺が学校を嫌いになった“あの日”のことを。

「……………夜うち！神夜うち！」

「！どうした？」

科世の声で俺は現実へと引き戻された。

目の前には、他の駒が消えてただ一人残った^{キング}王く、志野原鐘騎。地面に片膝をつき、肩で息をしている。

「勝負はついたも同然だな」

「へへっ……………参ったな……………分かった。俺の負けだよ」

鐘騎がそう口にした瞬間、ブザーが演習場いっぱいに鳴り響く。どうやら俺たちは勝ったようで、沈黙先生が手を振りながらこちらへ走ってきているところだった。

「みんな〜！やったね〜！」

相変わらずマイペースな人だな。あ、こけた。

「あいたたたあああ〜」

顔をしかめて腰をさする沈黙先生を見ると、自然と笑みがこぼれてくる。

第一回実践演習、俺たち＜歩兵＜^{ポーン}一組は鐘騎率いる＜歩兵＜^{ポーン}四組に対し、勝利を収めた。

演習場の観客席から、神夜達を見つめる一人の人物。

「ほう……あいつ、明星神夜だっけか。中々面白そうじゃねえか…
…今度手合わせしてもらうとするか。俺達三年＜王＜^{キング}相手に、どこまでやれるかな？」

静かに演習場から立ち去るその人物の口元には、楽しげな笑みが浮かべられていた。

第四局〈祝いの席 in 明星家〉

「はああああ……」

公園のベンチに座る少年の口から長い溜め息。これは俺、明星神夜のものだ。

学校から帰宅する途中、自販機を見つけたのでコーラ一本を購入し美味しく頂いている真つ最中。なのに溜め息が後を絶たない。コーラを味わえないではないか！

付け加えるなら、俺はジュースが大好きだ。特にコーラ。ああ、カロリーゼロのやつも中々好きだぞ？

週に五本はコーラを飲む。通常イマルコーラ一本、カロリーゼロ四本、といったかんじ。この組み合わせじゃないと、糖分を摂取し過ぎるからだ。カロリーゼロで糖分の取り過ぎを抑えている。え？それにしても飲み過ぎじゃないかって？目を瞑ってください。お願いします。今日は週に一度の通常イマルコーラの日なんですよ。

この日が待ち遠しくて、昨日は眠れなかった………というのは嘘だ。

眠れないとまではいかないが、やはり通常イマルコーラが飲める日は待ち遠しい。だが、溜め息のせいで味をかみ締められない。

（修行不足だったか……もつと舌を磨こう）

現在の時刻は午後七時半。かなり遅くなってしまった。季節は春のためそこまで暗くは無いが、飯も作らないといけない。そろそろ帰るとするかな。

俺はベンチから立ち上がり、公園を後にする。薄暗い道を街灯の淡い光が照らし、俺の目にはとても神秘的に見えた。

今日はまだ登校一日目だというのに、疲れがピークに達している。実践演習で頭を使いすぎた、というわけではない。

ただ単純に疲れたのだ。

あの後、放課後に鐘騎の野郎が再戦させろって一組に乗り込んできたのが主な原因だろう。鐘騎だけならまだよかったものを、他のクラスの奴らに『一組の明星神夜は強い』なんて広めやがるから二組から五組までが押しかけてくる始末。強いのは俺じゃないのだが、それを見てニヤリとする悠聖の顔を見ていたら叩き潰してやりたくなっただけの言うまでもない。

おかげで学校全体を使って逃走劇を繰り広げる破目になってしまった。何とか全ての追っ手を撒いて学校を出たときの感動は、今でも忘れられない思い出です！……って小学生か俺は！

「今日の飯は何にすっかな」

献立を考えながら歩いていると、家に辿り着いた。白がベースのシックな造りとなっております。

「ただいまー」

挨拶を試みるものの、現在一人暮らしのため返事が帰ってくるはずも無い。と思っただけだが、

「おかえりー」

な！返事が返ってきただ！？よく見たら靴が増えていて、リビングに明かりも点いている。

俺は慌ててリビングへと走った。そこに居たのは……

「よう、神夜」

「遅いぜ神夜、もう始めちまうところだったんだからな？」

「神夜っちゅー！こんばんは」

「お邪魔してるよ」

悠聖、終牙、科世に緋狩を加えたメンバーだった。緋狩が居るのはまだ分かる。だが、

「何で悠聖達がここに居るんだよ」

「私が教えたの」

テメーか緋狩この野郎！

「怒らない怒らない。せつかく私が招待してあげたんだから」

招待も何も、ここは俺の家なんだが……。確かに幼い頃はお客も一杯来てたけど、中学卒業してから俺に客なんて緋狩くらいしかいなかった。他は中学の友達が来て遊ぶくらいだったしな。

「で、お前ら何しに来たんだ？」

「実践演習勝利の記念パーティーだよ。記念すべき第一勝をあげたわけだからね」

記念パーティー。なるほど、そういうことか。今日の実践演習の勝利を大げさにとらえている、というわけだな。だが、まあ良いか。

たまにはこういうのも悪くは無い。そうと決まれば飯だ飯。俺の作れる最高のメニューでもてなそうではないか。

「お前ら何が食べたい？」

「ざ〜んね〜ん、実はもう買ってきてあるのよね。だから神夜は無理じゃなくて良いの。ゆっくりしてて」

そう言っつて緋狩が持ち上げた買い物袋にはたくさんの食材が詰め込まれていた。今回、俺の出番は無しのようだ。

楽できるのは良いのだが、みんなに俺の料理の腕を魅せてやりたかったという悔しさが残った。

「おお！美味しいな、この河豚！どこのだ？」

「下関からの直送。とれたてだから味わって食べなさいよ？あんた、直ぐに自分の食べて人の分まで食べようとするんだから」

「だまらっしゃい。ノロノロ食ってるから横取りされんだろ？」

ギヤアギヤアと言い合う神夜と緋狩を見つめる科世は、悔しそうに頬を膨らませていた。

実際に見つめているのは神夜のほうで、膨らんだ頬が若干赤くなっているのを見ると、何か特別な感情を抱いているようにもみえる。

（私だっつて……私だっつて……負けないんだから！）

密かに闘志を燃やす科世。だが、密かに燃やしたはずの闘志はあ

ろうとか緋狩に伝わってしまったらしく、緋狩がゆっくりと科世を振り返る。その顔には、笑み。

女同士で伝わるものがあるのだろう。二人の間には火花がバチバチと音を立てているが、神夜達男性陣は全く気付いていない。

「「神夜！」」

「お、おう？」

科世と緋狩の両方に呼ばれて振り返った俺は、目の前に広がる光景の意味が理解できなかった。科世が俺のことを呼び捨てにしたが、気にもならないほど。

二人が刺身を俺に向けていた。どういうことだ？ 食べるというのか？

悠聖と終冴は、笑顔で親指を立てている。何なんだ一体。

「「はい、あーん」」

同時に刺身を差し出された。どちらを先に食べようか……うーん。やはり、ここは幼馴染である緋狩のからかな。俺は先に、緋狩の差し出した刺身に口を運んだ。うん、美味い。醤油の加減も絶妙。

「やったあ！ 勝った勝った！」

「そ、そんな……………」

勝った？ 何に？ そして何故科世は崩れ去ってるんだ？ しかも真っ白になって。俺、科世に何か悪いことしたかな？ うーん、分かん。

「どうした？科世？」

「な、なんでもない……よ！？」

おゝい、何で声が裏返ってるんだ？

「顔赤いぞ？熱でもあるのか？」

と言って俺が科世の額に自分の額をつけた瞬間、科世は顔が瞬時に紅潮して爆発してしまった。俺は地雷でも踏んだのだろうか。ええい！探索班、何をしている！

「は、はひい……」

いまだに顔から湯気を出している科世の隣で、はあ、と緋狩が頭を抱えている。悠聖と終冴も同じように頭を抱えているが、この二人に限っては笑いを堪えているようにも見えた。体が小刻みに震えているのが分かる。

ふと時計を見ると、もう八時半を回っていることに気がついた。

「じゃあ俺ら帰るわ。ほら、終冴、科世、行くぞ」

「また学校でな」

「は、はひい……お、おひゃわひわひか」

とうとう再起不能に陥ってしまったらしい科世を抱えた悠聖と終冴は、俺の家から急ぎ足で退散していった。何だか慌ただしい連中だったな。いや、いつものことか。

「さてと、風呂にでも入るか」

俺は食器を流しに浸けた後、リビングから風呂場へと直行する。そういえば、緋狩が居ない。あいつらと一緒に帰ったのだろう。

「！」

俺の家の風呂場にはありえないものが置かれていた。それは……女性用の下着だった。それも、かなりスタイルの良い人が着ける様な……って違う違う！何を考えているんだ俺は！とにかく風呂に入ろう。

「あ、神夜。先に入ってるよ？」

「……………何で、居るんですか」

そこには、緋狩が居た。体は浴槽に浸かっているために見えることはないが、これは刺激が少々強すぎるのではないのか？子どもが見るようなシーンではないぞ！？

「神夜も入ろう？昔は一緒にお風呂入った仲じゃない」

いつの話だよ！？幼稚園から小四までの間じゃないか！ほんつとに、デリカシーの無いことこの上ない。

「神夜は年上の人には目が無いのに、同年の子とか幼馴染の気持ちには疎いんだから」

「ん？何か言ったか？」

「何でもない！」

プイツとそっぽを向いてしまふ緋狩。一体何なんだ？全く分からん。

「お前って」

「？」

「結構大胆なやつ着けてるんだな」

ドカツ！と鈍い音がして、緋狩の拳が俺の頬をとらえた。痛い。ものすごく。流石は緋狩の突き。中学校の空手全国大会で優勝しただけのことはある。それにしても……痛い。

「神夜の変態！」

「ち、ちがつ！」

ピシヤリとドアを閉められ、問答無用で風呂場から追い出された。殴られた頬がまだ痛む。ってゆつか……

「服を着せろー！」

俺の悲痛な叫びが家中に木霊する夜であつた。

第五局〜VS学園最強〜（前書き）

一番出したかったキャラが出せました。

第五局〜VS学園最強〜

「ちと邪魔するぜ？お前が明星神夜だな？」

教室に入ってからそんなことをぬかすのは、一人の男子生徒。ネクタイの色的に二年生だろう。

cmで表現するのが難しいくらい大きな体をしていて、腕を組みながら俺の机の前に佇んでいた。しかも、かなりのイケメンときたほら、みんなが見てる。しかも結構引いてるよ？どうすんの？この状況。覆せる者がいるなら是非やってもらいたい。

ここで本音を言おう。誰か助けてくれー！

「……………」

うーん、しかしこの男、本当に邪魔だ。

何せ俺は食堂での昼食を終え、昼寝という、全人類にとってなくてはならない行動―（と俺は思っている。いやマジで）の真っ最中だったからだ。せつかく気持ち良く寝ていたというのに、寝首をかかれた俺は相当に苛立っている。教室の物全てを武器にして戦えるほどだ。

「あなた、どちら様？俺、眠いんすけど？」

「おっと、すまなかった。誰だって昼寝を邪魔されるのは良い気分じゃないからな」

当たり前だろうが！睡眠を邪魔されて嬉しいやつなんて居るわけがない。そんなやつがもし居たら、俺が天誅を下してやる！足腰立たないくらいに悪口言い続けてやる！三次元から追放してやる！

しかし、てつきりキレると思っていたがこの男、中々広い心の持ち主のようだ。一応確認しておくのも良いだろう。ちょっと怖いけど。

「……キレないんですか？」

「あん？何にだ？」

「いや、俺が生意気な口を利いてるから、てつきり怒ってるんじゃないかと……」

そこまで言いかけた時、男は笑った。俺何か面白いこと言ったかな？

「このくらいでキレるかっての。それに、悪いのは俺の方だしな」

おお！何と物分かりの良い人！世の中にはこんな良い人も居るわけだ。

「そついや、自己紹介が未だだったな。俺は二年<王^{キング}く、疑心暗鬼^{ぎしんあんき}だ。よろしくな」

何だそのあからさまに人を疑いそうな名前は！この人の親はどれだけこの人を人間不信にさせたかったんだ？というか、どういう由来で付けられた名前なのだろう。

そんなことを考えていると、ガタツガタツ！という耳障りな音と共に教室中の生徒が立ち上がった。どうしたというんだ？悠聖や終冴まで立ち上がっている。顔に驚愕の二文字が浮かんでいるぞ？

科世だけは『どしたの？』くらいの顔でパンを頬張っていた。食堂から持ち逃げして来やがったな？

「ぎ、疑心暗鬼って………二年でありながら、歴代>王<最強と言われ、^{アンチルール}『掟破り』の二つ名を持つ、あの疑心暗鬼……か？」

「俺のこと知ってるのか？そりゃ光栄だな。ん？待てよ？俺は本当に疑心暗鬼って名前なのか？」

何！？自分の名前まで疑うだ！？そこまで疑り深いのか！これだとそろそろ自分が誰なのか、いや人間なのかどうかまで疑いだしそうだな。そうならないことを祈ろう。

「この学園に居て^{アンチルール}『掟破り』、疑心暗鬼を知らないほうが可笑しいですから」

ええ！そうなの？俺全然知らなかった。廊下歩いてたって一言もそんな事言ってなかったのに。

ああいや、寝ぼけて歩いてたから聞こえなかっただけか。俺の特技その一。半睡眠で歩くことが出来る！……すみません。どうしても良かったです。

^{アンチルール}『掟破り』、疑心暗鬼か。一体どんな反則^{チート}野郎なのだろうか。それはさておき、そんなに凄い人がどうしてうちの教室なんかに？

「で、本題だが……お前達、俺らと勝負しようぜ？」

名前はもう良いのか………って、はあ！？いきなり何を言い出すんだこの学園最強さんは！今はそんな気分じゃないってのに。今日は午後の授業全部寝て過ごす予定だった。

まあ確かに、予定は未定であって確定ではないからそのとおりに物事が進むとは限らないのは分かる。分かるよ！？でも、ここまで狂わされるとは……。予想していなかったなあ。

「時間は今日の五、六時限目。第二演習場だ。じゃあ、待ってるぜ？」

「ちょ、待つ……」

……行ってしまった。何だか嵐の様な人だったな。言いたいことだけ言って去っていった。仕方ない。戦うとしますか。どうせ五、六時限目は沈黙先生の授業だし、頼めば何とかなるだろう。

「行くぞ、みんな」

「そう言うと思ったよ」

一致団結とはこのことを言うのだろう。

俺が立ち上がると同時に悠聖が、終牙が、科世が、皆が立ち上がり、第二演習場を目指してその歩を進めた。

だがその前に、掃除の時間だ。科世、パンを早く食べなさいパンを。沈黙先生が後ろに居るって。

バシーン！ほら、沈黙先生の制裁が飛んできた。うん、良い音だ。

「よく逃げずに来たな。褒めてやるよ」

「どうも。疑心先輩」

「暗鬼で良いって。堅う苦しいのは無しにしようぜ？な？」

「はあ。分かりました。暗鬼……さん？」

「それで良い。俺もそっちの方が親近感が持てるってもんだ」

戦いの前でも、この口調は変わらないのか？この人。

俺達>歩兵^{ポーン}<一組は、二年>王^{キング}<と試合を行うことになり、第二演習場に来ていた。正直なところ、勝てる気がしなくもない。根拠は無いが。

この試合、沈黙先生には猛反対を喰らったが、何とか説き伏せて許可を貰うことに成功した。

『これも経験です。先生は、生徒の経験の場を奪う気ですか！』
この一言が決定打になったらしく、沈黙先生は何も言えなくなってしまうお目付け役として同行してくれたわけだ。

「早速始めようぜ？>王^{キング}<は俺だ」

「俺も一組>王^{キング}<です」

それぞれ所定の位置に就く。俺は最後尾で待機。これが>王^{キング}<の本来あるべき姿。そう思っていた。しかし、その思い込みは暗鬼さんのおかげで粉々に打ち碎かれることとなる。

「それでは、>歩兵^{ポーン}<一組対二年>王^{キング}<……試合、開始！」

どちらも動かない。まずは相手の出方を見る。考えていることは同じのようだ。

演習場は静まり返って、風の音が良く聞こえる。ふと、二年>王^{キング}<の方を見た俺は言葉を失う。

「な！……暗鬼さんが……最前線！？」

そう、暗鬼さんが居たのは>歩兵^{ポーン}くよりも前。敵と真正面からぶつかることとなる最前線だった。それでは狙い撃ちにしてくれと言っているようなもの。それなら、望みどおり狙い撃ちにしてやろう！

「科世、六式だ！他の部隊は悠聖と終冴を中心に脱出^{アルカ・トラス}不能牢の体勢を作れ！」

科世が六式連水砲を乱射し、その隙に悠聖と終冴が敵陣後方に回り込む。

「へえ、水流^{アクエリアス・マジシャン}魔術師。上級の魔法使いか。だが、俺にはそんな魔法^{モン}効かねえよ」

「え！？」

暗鬼さんが腕を一振りすると、バシャン！

水が弾ける音がして、連水砲の水弾が一瞬にして消し去られた。科世は何が起こったか分からないような顔をしている。事実俺も、何が起こったのか分からない。

俺と科世が啞然としていると、悠聖からの通信が入る。

「神夜！脱出^{アルカ・トラス}不能牢、いつでも行けるぞ！」

はっとなってディスプレイを確認すると、悠聖と終冴はもう敵陣の後方に回り込んでいた。敵陣は未だに動こうとはしない。誘っているのだろうか？普通なら乗ることはないが、状況が状況なだけにここは攻めさせて、いや決めさせてもらおうか。

「よし！必殺布陣、脱出^{タクティカル・フォーメーション}不能牢！」

焦っていたこともあったのかもしれない。アルカ・トラス 脱出不能牢の指示を出して俺は、自分の愚かさを思い知ることとなるのだった。

第五局〜VS学園最強〜（後書き）

後半へ続きます。

第六局〱VS学園最強 後編〱（前書き）

後編です。いや〱相手の強いなの。ではどうぞ。

第六局〈VS学園最強 後編〉

焦りとは、己の心の余裕の無さから生まれるものだ。

追い込まれ精神状態が不安定になると、それが徐々に表面に現れる。故に、正しい判断を下せなくなることが多い。焦りを隠していても、必ず行動に現れる。

俺は今正に、その状態に陥っていた。

「お前ら！戦線離脱しろ！後は俺一人で良い！」

「何！？」

その合図で、暗鬼さんを除く全ての駒が演習場から消えてしまった。俺はもう何が何だか分からなくなってしまう。何をもってこの場に一人残った？

まさか一人で俺達全員と戦うと言うのか？いくらなんでもそれは無いだろうと思ったが、そのまさかだった。

「ここからは俺一人が相手だ」

「暗鬼さん、ふざけてるんですか？」

「大丈夫だ。お前らの負けは決定してるからな」

そうか。そこまで言うのなら試してみよう。

「科世、四式を使え。悠聖、暗鬼さんに脱出不能牢だ」

アルカ・トラス

暗鬼さん一人を悠聖達が囲み、科世の四式大水牢が暗鬼さんを捕

らえる。これでは、暗鬼さんの耐久力が潰えるのを待つだけ、か。しかし、水牢の中の暗鬼さんが一度フツと笑ったかと思うと、科世が詠唱した水牢は先ほどの水弾と同じように弾けて消え去ってしまった。

「そ、そんな……馬鹿な！」

「嘘！？四式まで！？」

「だから効かないって言うてんのによ。耐久力は残り二三〇〇、か」
ゆっくりと地に降り立って微笑む暗鬼さんの姿は、俺には神に等しくも見えた。それくらい神々しく、圧倒的な存在感。さらには耐久力二三〇〇と桁違いの数字を誇る。

俺の自信は完全に砕かれた。戦術も戦略も、何の意味も持たない。暗鬼さんの前では、全てが無意味。

（か、勝てない……）

俺は悟っていた。どうしようもない。強すぎる。規格外の化物。これが『掟破り（アンチルール）』と呼ばれている所以なのだろうか。

口の中が枯渇してカラカラになり、息をするのが難しい。威圧されるとは正にこの事。このまま暗鬼さんと戦っても、勝ち目が無いことは火を見るより明らかだ。

（せめて悠聖達だけでも……）

俺が悠聖達に指示をしようと通信をオープンにした時、先に悠聖から通信が入った。

「神夜お前、まさか俺達だけでも逃がそうとか思ってるんじゃないだろうな？」

「！」

あれ？何故俺の考えてることが分かったんだ？一言も喋っていないのに。

「図星のようだな……馬鹿が。そんな事して俺達が喜ぶとも思ってるのか？もしそう思ってるのなら、とんでもない勘違いだ」

「し、しかし……このままじゃ、お前達は」

「神夜！」

いきなり大声を上げる悠聖。俺はビクツと体を震わせて縮こまってしまう。凄い剣幕だ。だが、次の瞬間にはその剣幕が消え失せ、笑顔に変わる。

「信じろよ神夜。俺達、仲間だろ？もし負けるときがあっても、お前一人で負けさせたりなんかさせない。＞歩兵＜^{ポーン}一組はみんな一緒だ」

ふと見渡すと、クラスの皆が俺に笑顔を向けているのに気付く。

はあ……何を考えていたんだ俺は。仲間を信じることを忘れていた。部下を信じれないで、何が＞王＜^{キング}か。全く……俺はなんて大馬鹿者なんだろう。穴があつたら入りたいぜ。え？使い方が間違ってる？あら、それは失礼。

「暗鬼さん」

「ん？どうした？」

「部下を、民を守ってこそこの>王^{キング}だとは思いませんか？」

「俺もその意見には賛成だな！」

暗鬼さんが加速し、距離を一気に詰めて来る。俺は考えるよりも先に体が動いており、自分の武装で暗鬼さんの攻撃を受け止めた。動いた。絶対に動くことはないと思っていた玉座から、俺は動いたのだ。

「ぐうつ！」

とてつもない衝撃。流石に学園最強と言われるだけのことはある。今の攻撃で耐久力を三〇〇は削られた。残り六〇〇とちょっと。>王^{キング}の装甲にこれだけのダメージを与えるなんて、一体どんな装備を使っているのやら。

確かに一般の駒の装備とは少し形状が違う。何かデッカイ剣持ってるし。

「漸く、>王^{キング}の成すべきことに気が付いたみてえだな。神夜」

「ええ、おかげさまで目が覚めましたよ。ご教示感謝します」

そう、暗鬼さんが俺に伝えたかったこと。それはクラスの>王^{キング}として成すべきことだった。

“王は部下を守る者”。たいていの人は部下の方が王を守っているかもしれない。実質そうであるが、国とは人なのだ。王が

一人居たところで国は成立しない。

他の駒を犠牲にするくらいなら、王^{キング}が自らが出向いて戦う。というのが暗鬼さんの考え方で、その考え方は俺にも伝染した。とにかく、前で戦いたくてもしょうがない。

「悠聖！他のやつらはその場で待機！俺と暗鬼さんの一騎打ちだ」

「分かった。派手に負けて来い」

「ああ！」

負けるという単語が大嫌いな俺も、この『負ける』ばかりは好きになれた。これも暗鬼さんのおかげであろう。

暗鬼さんと向かう合うように剣を構える。王^{キング}の初期装備は剣が一本。何と乏しいことだ。暗鬼さんはあんなにデッカイ剣持っているのに。まあ、言ってしまったからにはやるしかない。

「行きますよ？暗鬼さん」

「来い。全力で相手になってやる」

暗鬼さんが振り下ろした剣を横にずれてかわした俺は、そのままのスピードで懷に踏み込み、暗鬼さんの肩に向けて突きを放つ。

だが、それを身を捻って避けると同時に暗鬼さんは、更に剣を振り下ろしてくる。俺は避けきれずに剣で受け止めた。

「ギーン」

「ほう、この王嵐^{おうらん}の剣、炎月^{えんげつ}を受け止めるとはな。見直したぜ」

「…………ど、どうも」

王嵐。それが暗鬼さんの装備の名前だろう。全体的に赤をベースにした武神を思わせる鎧。そして剣の名前は炎月。

それにしても、暗鬼さんは装備に名前なんて付けてるのか？

とにもかくにも、その王嵐の攻撃を何とか受け止めることに成功した。が、あまりの衝撃と威力に腕が麻痺して震えている。痺れで握力も一時的に無くなっているため、剣を握ることが出来ずに腕から剣が零れ落ちてしまった。この攻撃力、相当に厄介だ。

「おいおい、一発で手首アウトかよ。まあ、俺の剣を受け止めて無事だった奴は居ないけどな」

それは残念。俺が記念すべき一人目になってしまった様だ。

「！ 神夜、お前……」

「すみません。俺、両利きなんですよ」

動かなくなつた右腕の変わりに剣を握っているのは、俺の左腕。これで何とか戦えるが、もう暗鬼さんの攻撃を一撃も喰らうことは許されない。

後一度でも暗鬼さんの攻撃を受け止めでもすれば、両腕が使えなくなってしまうことは目に見えているからだ。

「すみません。応援呼んでも良いですか？」

「良いぜ。何人でも呼びな」

「では……悠聖！」

「はいよ！」

待つてましたと言わんばかりに悠聖が飛び出してきた。いつもいつも気が利きすぎてるよ全く。一騎打ちと言っておいて格好が悪いが、少しでも長く暗鬼さんと戦い、あの強さの秘密を暴きたかった俺にはどうしても良く感じられる。

悠聖と俺は二手に分かれ、暗鬼さんを挟み撃ちにする。両腕が使用可能な>騎士^{ナイト}く、悠聖が先に攻撃を仕掛けるが、鬼さんはいとも簡単にそれを受け止めると、俺に向き直った。
その瞬間、

「科世！六式！」

「はいはい！六式連水砲！」

科世の作り出した二丁銃から、暗鬼さんを目指して一直線に水弾が発射される。その位置取りが丁度暗鬼さんの真横だったため、暗鬼さんは空いた片腕を払って水弾を弾き飛ばす。弾かれることは分かっていた。だが、それで良い。隙の出来た暗鬼さんに俺は、無防備な正面から剣を振り下ろした。

「これで！」

「ガッ」

「！」

「これはまだ魅せるわけにはいかなかったんだが……やむを得ねえ」

俺の攻撃は暗鬼さんの額に当たる寸前で、何か見えない壁のような物質に阻まれ、空中で静止していた。どれだけ力を加えようと、ピクリとも動かない。いやいや！わざとやってるわけじゃないぞ！
？本当に動かないんだよ！

「これは……！」

「何！？」

驚いたのは俺だけではない。悠聖や科世はもちろん、この場に居た全員が暗鬼さんの、わけの分からない能力に息を呑んだ。

「教えてやりたいところだが、まだその時期じゃねえな。あばよ」

「神夜あー！！じゅうにしきやうりゅうへき十二式蒼流壁！」

科世の詠唱で水の壁が俺を守るように出現する。しかし、暗鬼さんの振るった炎月は、容易く蒼流壁を切り裂き俺の装甲へと到達した。

「がつ！」

たった一撃。それだけで俺の耐久力は一気に〇になり、力無く地面に倒れ伏した。薄れゆく意識の中、俺が見たもの。

それは圧倒的な強さで、俺達が傷一つ付けることも出来なかった二年生の姿だった。

「試合終了！二年＜王^{キング}の勝利です！」

沈黙先生の声が演習場に響き渡る。観客席には四組の志野原鐘騎がただ一人、楽しそうな笑みを浮かべていた。

「神夜のやつ、『掟破り（アンチルール）』こと疑心暗鬼にあそこまでやるとは。また差が広がったか」

「楽しそうだな」

第三者の声。容姿的には外国人だろうか。金髪に翡翠の瞳をしており、背も高い青年だ。瞬間、鐘騎の目が鋭くなり、青年を睨み付けるが、青年は物怖じ一つしない。

「トーマ……余計なことは言わなくて良い、行くぞ」

「分かった」

トーマと呼ばれた青年と鐘騎は、静かに演習場を後にした。

第七局〜手負いの&1t・主（キング）>t・}（前書き）

なんかシリアスになってしまいました。ではどうぞ。

第七局〜手負いの&1t・主（キング）>〜

「う……ここは……？」

俺の目に映ったのは、知らない天井だ。……………じゃなくて天井だ。意識は覚醒しているようだが、目の焦点が合わない。視界はぼやけているし、めまいもする。しかし、何故か俺の見える物は天井、ではなく天井だとはつきり分かった。

目の悪い人の裸眼ってこんな見え方してるのか。不便なものだ。

しばらくして、ようやく目の焦点が合ってきた。周りを見渡すと俺はベッドに寝かされていて、他にもいくつか空きのベッドが置かれている。どうやらここは保健室のようだ。

時間帯はもう夕方、俺は暗鬼さんに負けた後気を失い、六時限目が終わった後も眠っていたらしい。

窓からは夕日が差し込み、保健室全体を茜色に染め上げていた。部屋には俺以外の人影は見えない。

「保健室か……いつて！」

俺は起き上がろうとしたが、暗鬼さんの炎月にやられた胸の辺りにはまだ痛みが残っており、無理に動かそうとすれば傷口が開いてしまいそうな程だ。

（それにしても、綺麗だな。ここから見える夕日）

俺は傷口が広がらないようゆっくりと起き上がり、夕日に見とれていた。すると、

「かーみや！」

「うおっ！？」

俺の寝ていたベッドの下から、科世がぬうつと顔を出した。

おい、お前はどこの妖怪だ！京都の陰陽師に引き渡してやるうか！？黄泉の国へ誘ってやるぜ！

「って痛たたたたたたた！」

ヤバイ！興奮して傷口が悲鳴を上げている！鎮静化を急げ！俺の体よ！

「だ、大丈夫！？誰にやられたの！？」

お前のせいだよ。お前の。なーんでお前も緋狩と同じような行動しかないんだ。

「ごほっ！ごほっ！……んっ！で、お前はどうしてここに居るんだよ……今日仕事あるって言ってなかったか？」

忘れていた人も多いだろう。科世はアイドルなのだ。でも、実際にテレビに出てるの見たことないんだよなあ。

仕事で昨日は学校を休んでいたが、そこは公欠扱いになるらしく、安心して仕事に打ち込めるとのこと。

しかし、しかしだよ！？その日に俺の家に来てノートを書するのはやめて欲しい。せっかく気持ちよく寝ていると言っのに『ノート見せてー！』って家に無断で上がりこんでくる。

別に次の日も良いんじゃないか？それに俺でなくても、女友達が居るだろうに。

もしかしたらこいつ、俺ら以外に友達居ないんじゃないのか？と思ってしまった。

「ああ！友達が事故にあつたので休みますって言ったら休ませてくれたよ！」

こ、こいつ！俺をサボリの口実に使いやがったのか！？

「それにしても、暗鬼さん強かったよねえ」

そして何だその唐突な話題のすり替え方………はあ、もう突っ込むのも面倒だ。話に付き合ってやるか。無視すると後が怖そうだし、キレた科世を相手にしたくはない。連水砲で穴だらけになって自宅に郵送されるのはごめんだ！断固拒否する！

「強いなんてもんじゃなかったさ。あれは化物だ。直に一人で戦争でも起こすんじゃないのか？」

「神夜の装甲を切り裂いて肉体に直接ダメージを与えられるくらいの馬鹿力とあの炎月があれば可能かもね……それに」

「ああ、あのわけの分からない能力だな」

俺の>王^{キング}の装甲は、暗鬼さんの炎月によって粉々にされていた。その証拠に俺のベッドの横にはその残骸と思しき物体がたくさん置いてある。何でここに置いてあるのか不明だ。

教本には『装甲があるため、肉体に直接のダメージは無い』と書かれていたが、『^{アンチル}掟破り』、疑心暗鬼にはそんなもの通用しないらしく、俺は炎月の刃によって浅くではあるが胸を裂かれていた。全く、規格外も良いところだ。こっちの攻撃も効かないとくれば、も

うお手上げである。

加えて暗鬼さんは力の加減も知らないようで、もし俺の装備が>
キング
王くじゃなかつたら、今頃俺の体は真つ二つに……ひええええ……！！

「お前いつからベッドの下に居たわけ？」

「神夜が運ばれてからずっと。沈黙先生から報告があつたから、起きるまで待つてたの」

ならベッドの横に椅子でも持つてきて座りながら待つていればよかっただろうに。どうしてわざわざ下に潜んでいたんだ？ぬうつと出て来られたら心臓に悪いだろ。

うゝん、この事については聞かない方が良いのかもしれないな。

「うん、聞かないで」

俺の考える事つて何故か筒抜けになる。そういう病気なのか？『心の声筒抜け病』みたいな。それは無いか。おい、何でお前は涙目になっているんだ？

つと、そろそろ本題に戻るとしよう。

「で、報告つて何なんだよ？何か悪い知らせか？」

「あ！それぞれ！神夜の家、壊れてるみたい」

……は？……は？……は？……は？……はあ？

よし、5わけわからんポイントゲットだ……ではなくて！

「俺の家が壊れた！？う、嘘ならもつとマシな」

「本当」

即答。嘘であってほしいという俺の願いはあっさりと打ち砕かれ、家が壊れたという真実が突きつけられた。科世の目の輝きが何よりも確実な証拠となる。

「正確に言つと、“壊された”が正解。倒壊した家の残骸に、バイロ・クルナー火炎奏者の魔法と思しき焼け跡が残つてたつて、沈黙先生が言つてたから」

バイロ・クルナー火炎奏者とは、炎を使う魔法使いの中でも最高クラスの使い手。アクエリアス・マジシャン水流魔術師の科世に匹敵するほどの魔力を秘めている、と授業で言つていた。

何？俺が普段から真面目に授業を受けてるようには見えないって？失礼な。俺はこう見えて（どう見えているのかはよく分からないが）勤勉なのだよ諸君。はっはっはっ。

「被害は俺の家だけなのか？」

「うん。周辺の住宅とか人的な被害は皆無だったみたい」

それを聞いて安心したのか、俺は無意識に胸を撫で下ろしていた。自分がどれだけ被害を受けようと構わない。だが、そのせいで他の人に被害が及ぶことは我慢出来ない。昔からそうだった。友達が傷つく度にその間に割つて入り、友達より多くの生傷を作つて歸つていた過去が有る。

「とにかく、見に行く。科世、ついてきてくれるか？」

「え！？う、うん……良いよ？」

何故か顔を赤くする科世。どうしたんだろう？まあいいか。

「はあ、はあ」

傷が開きそうなのを何とか抑え、俺と科世は俺の家を目指して日が落ちつつある街道をひた走っていた。俺の家から学校までは徒歩十五分といったところだ。早期到着はそう難しいことではない。でも、体が揺れるたびに傷が疼く。そんなにひどかったのだろうか。俺は未だに信じられない。信じたくなかった。自分の家が壊されたなんて。

（一体誰が……）

そんなことを考えていると、もう俺の家の前だった。そして……

「こりゃあ、ひどいな」

予想以上にひどい有様に、俺は文字通り息を呑んだ。焼けて真っ黒になった壁。熱せられて溶けてしまったガラス。正体不明な形をした何か。何だこれ。

それはさておき、この情景、さながら映画のワンシーンを見ているようだ。火は消化されているらしく、所々から煙が上がっている。ここに来てようやく、家が壊されたもとい、無くなったという現実を受け入れた。いや、受け入れさせられた、の方が適切かもしれない。

この目を何度擦ってもその現実が覆ることは無く、焼けた一軒家

が、ただただ虚しく佇むのみ。

「起こったのは五時限目から六時限目の間。君達が暗鬼君達と一戦交えてる時よ」

「うわっ、沈黙先生！」

いつから後に居たのか、そこには沈黙先生が。人はこれを神出鬼没と……言っわけあるか……！！

でも気配を消すのは上手いよなこの先生。どこかの里の忍のよう、見事な気配の消し方だ。今度俺も教わるとするか。

「災難だったわね、神夜君」

「いえ、別に……」

この家が無くなったことに、俺はそこまでの悲しみを覚えはしなかった。住んでいるのは俺一人だし、壊されて困るような物は何も置いてはいない、筈。

それに、他の住宅や住民に被害が及ばなかったのは幸いだ。いやそうではなく、犯人がそうしただけか。自分の魔法、つまり炎をその一点だけに集中させ、ピンポイントで俺の家だけを焼き払う正確性の持ち主が。

しかし、家族（ほとんど帰ってきたことは無いが）との思い出が欠片ほどでも詰まっている家が無くなるという事は、いくら悲しみを覚えてないとはいえやはり心に傷を残していくわけであって、俺は何だかよく分からない感情の渦の中に居た。

「ははっ……家……無くなっちまった……」

あれ？何だか頬が熱い。それに……濡れている。指で頬を擦るとその指には、涙が。

「……………可笑しいな……………悲しくなんて……………ないのに……………どうして涙が」

次から次へと溢れ出る涙。その涙が止まらない。止めようとしても無駄。

そうか……………そうだったのか。俺は、自分の家を愛していた。やっと分かったことだ。何でもない日常、いつも通りの目覚め、この家で行われた悠聖達との記念パーティ、押しかけてきた科世。全てこの家が見守る中で起きた事。安心出来た。心地良かった。

いつの間にか、俺はこの家の暖かさが当たり前になって忘れていたのかもしれない。きつとそうだ。

学校が嫌いな俺の唯一の心の拠り所。それが無くなった。

「こんな重要な場所が……………無くなったのに、悲しみなんて覚えない……………だってえ？勘違いも……………甚だしいじゃないか！俺は……………俺は……………」

「神夜！」

瞬間、科世が俺を抱きしめる。俺はわけが分からず、されるがままになっていた。

だが、暖かい。とても。全てを委ねられるような暖かさが、そこには、科世の腕には確かに在った。

「しな……………よ？」

「なきたい時は……………泣いて良いんだよ？だって、人間でしょ？」

「ああ……ああ……ありがとう、科世……」

その後、科世は俺が泣き続ける限り、傍で抱きしめてくれていた。

（ありがとう、科世……）

第七局く手負いの&1t・主(キング)>t・く(後書き)

家の話だけでこんなにシリアスな話が出来上がってしまつとは……
自分でもビックリです。

第八局　く神夜の優しさ（前書き）

急展開になりました。何かISみたいです。ではどうぞ。

第八局　神夜の優しさ

今日は日曜日。世間一般では全てが休みの日だ。まあ、日曜でも仕事がある人は居る。

買い物、映画、旅行。どこで何をするかは人によって様々だ。他人のやる事に口出しをするほど俺は暇ではない。

え？俺はどうするのかって？ふっ、愚問だな。俺はもちろん寝る！！！！！というか、それ以外にやることが見つからない。

悲しい奴だって？ほっとけ！俺の好きなことは寝ることだからそれでもいい。

因みに、ここは俺の部屋ではない。昨日家を無くした俺はひとまず寮の空き部屋の一つを借りて、そこに住むこととなった。

「そういえば、今日悠聖が申請書届けにくるはずだったよな」

申請書。平たく言えば、寮に住まわせてもらうために必要な紙切れだ。

『第六百六十六条、寮に入る者は申請書を提出し、学校側の承認を得ること』って書いてある以上、提出は必須だろう。

「それにしても……………」

（六百六十六…………何か不吉だ）

そんなことを考えながら、入り口までやって来た。扉は開きっぱなし。何故かという、悠聖が入る時に俺が寝ていたら起きれる自信が無いから。ふと顔を上げると、数メートル先に人影が。

「かーみーやー！」

「さよなら」

ボタン！

開いていた扉を全力で閉めた。何も見てはいないぞ！？

でも、さっきのは多分科世だ。手を振りながら、俺目掛けて疾走中だったに違いない。入れない理由……それは、俺の睡眠を邪魔されたくないからだ。ただそれだけ。

欠伸あくびをしながらベッドに戻り、腰掛ける。何か無駄に疲れた。

「かゝみゝやゝ」

「なあ！？」

ベッドの下から顔を出したのは他ならぬ科世。何で！？何で！？何で！？部屋には入れてないぞ？扉も閉めたのに。何でえ！？

「ちよつ、お前！どこから入った！扉閉めたんだぞ！」

「ん？あそこ」

科世が指差す先には、開いた窓。こいつは窓から入ってきたらしい。いやいや！そんな事はどうでもいい。重要なのは……

「さっき、扉の前に居たよな？いつの間に窓側に回り込んだんだよ」

「瞬間移動」

な、何と……科世にはそんな特技があったのか。魔法も使える上に瞬間移動とは、天は異物を与えたわけだ。

「と言つのは嘘だよ」

ガン！！

……思いっきりこけた。もう新喜劇もビックリするくらい。後頭部がものすごく痛いのですが、どうしましょう？

「まあ、私の移動手段とか神夜がこけた理由は置いていて」

置いてくよ。

「ねえ神夜、これが欲しくない？」

そう言つて科世が差し出した物、それは寮に入る為に必要な申請書だった。何故に科世が？悠聖が持つて来てくれる筈だったというのに。科世の奴、悠聖に何をした！？

「悠聖が持つてきてくれる筈だが、どういふことかな？科世」

「その悠聖が『面倒だから代わりに頼む』って私に」

あの野郎おおおおお！それでも友達、いや仲間か！？とんでもないことをしてくれたな悠聖。こういう時の科世は何かと面倒事を持つてくる。しかも、俺にとつて面倒な事だ。

「これは渡すけど、条件があります」

何という事だ！！俺の（物になる予定）申請書が人質に！くつ、仕方が無い。ここはひとまず、その条件とやらを聞こう。話はそれからだ。

「何だよ？その条件って」

「じゃ、じゃあ……その……」

「嫌だ」

「ま、まだ何も言っていないよぉ〜！」

だって嫌な予感がしたんだもの。俺の至極の一時を、休日を潰されてしまう様な何かが待っている気がした。科世が次に何を言うのかは大体分かっている。

「どーせ買物に付き合っで、とか言うんだろ？」

「な、何で分かったの！？」

やはりそうだった。科世は無類の買物好きらしく、平日だろうが休日だろうが誰かを誘って買物に出かけているのを見たことがある。

俺が科世と同じく買物好きだったら、迷わず付き合っただろう。だがしかし、俺は買物物が嫌いだ。何かと付けて荷物持ちをやらされてきたから。

故に、俺は行かない！寝て過ごすのだ！誰にも干渉せず、誰からも干渉されずにこの一日という時間を満喫するのだ。それを邪魔させはしない！

「とにかく！俺は行かないからな！」

「そうかぁ〜、なら仕方が無い………強硬手段だ」

……何か今『強硬手段』って聞こえたような気がする。その瞬間、俺の背筋に寒気が走った。

ん？科世が鋏を持ってきて？その刃を申請書に当てて？

「**チヨキツ**」

！！！！何て事をするんだ！それは大事な申請書だぞ！？

っておいしいおいしいおいしいおいしいおいしいおいしいおいしい！！！！

「やめろおおおおお！」

俺は無我夢中で、科世の手から申請書を取り返そうと科世に手を伸ばす。おお！風を感じる！室内なのに！

この時の俺のスピードは、豹と並んで走っても引けをとらないくらい速かったに違いない。だが、

「蒼き水脈、我を守護する障壁と成らん！十二式蒼流壁！」

ガン！

無念。科世の作り出した蒼流壁に顔から突っ込んでしまった。痛い。痛いよすぐ。主に鼻が。顔面と後頭部に大打撃を受け、俺は床でのたうちまわることになる。

「のわあああああ！」

きつと俺の叫びは、周りから見れば何と言っているのか分かったものではないだろう。それ位痛い。

うわ〜ん！反則だそんなの！『第二百六十七条、校舎内及び寮内での魔法の使用を禁止する』って書いてあったでしょうが。ちゃん

と読みなさい。って良く覚えてたな俺。

自分の記憶力に拍手を送りたくなっただが、それを我慢しつつゆっくりと立ち上がり、科世に向き直った。科世は得意げに鼻を鳴らしている。

「どうするう？付いて来れば、この申請書は返してあげるよ？」

くっ！卑怯な！

どうする……状況はこちらが圧倒的に不利だ。無理矢理に行こうとすると蒼流壁で阻まれる上に、俺は一般人。魔法使いに勝てるわけが………待てよ？魔法？そうか！その手が有ったじゃないか！

「科世、俺は今からお前に申請書を取り返そうと突っ込む。魔法を使うのは自由だ。好きにしろ……魔法使用禁止の校則を破った事を、俺が報告しても良いというのならな」

「うっ！」

よし、動揺している。人の感情を揺さぶる材料などそこらにいくらでも散りばめられているということだ。こんなにも容易い。

ここで俺はさらに追い討ちをかける。

「お前は既に魔法を使った。魔力の痕跡という証拠も在る。理事会側に頼んで調査してもらうことも出来るんだが、そっちの方が望みかな？白状科世様？」

「あ、あううううう……」

（ちょっとやり過ぎたか……）

半べそになっている科世を見ると、少し可哀想になってきた。申請書も床に落としてしまっているし、このくらいで許してやろう。しかし、もう眠気も覚めてしまった。今から寝るのは……とても無理だ。

「じゃあこの申請書は返してもらってからな。さてと……科世、行くぞ」

「え？」

「だから、買い物。行くんだろ？一緒に行ってやるよ」

「ほ、本当！？ありがとう！神夜大好き！」

瞬時に表情を明るくした科世は俺に抱き付いてきた。そこまで嬉しかったのか？まあ、仲間が喜ぶのを見るのは嫌いじゃない。でもそんなに思い切り抱き付かれたら苦しいんだなこれが。

はあ、どうしていつもこうなるのだろう。振り回されるはめになると分かっているのに、何故か最後の最後で俺が自分から折れてしまう。

以前この事を悠聖に話したら、『それはきつとお前の優しさだって言われたっけ。振り回されてやるのも優しさの内、ということなのか。』

ああ……何て厄介な優しさを持って生まれてきたんだろう。

「ここだよ！新しくオープンしたところ」

「ふうん……『セラフィム・ヘヴン』ねえ……大層な名前だな。精霊の天国ってか」

俺と科世がやって来たのは、最近出来た学生に人気の雑貨屋。寮から徒歩五分と最寄。その上中々デカイ。そこらの店と比べてもその大きさの違いは一目瞭然だ。まさか科世と二人で来ることになるとは思わなかったなあ。

「入ろう、神夜！」

「あ、ああ」

とりあえず、中に入ってみる。おお！店内も相当な大きさだな。本からステイションナリー、食品に至るまで結構な品揃えだ。主婦にとっては正に天国なのだろう。

今度からここで日用品を揃えるかな。寮からも近いし。

「ねえ？手……繋ごう？」

「ん？ああ、別に構わないが」

科世が俺の腕に自分の腕を絡ませてくる。何だか変な感じだ。今までこんなことなかったし、初めてだからということもあるのだろう。

ん？何やら視線を感じる。見渡すと、そこら中の人々が俺を敵視の眼差しで見つめていた。

あ！そういえば……忘れていた。科世がアイドルだったということ。この敵視はそのせいだ。皆が知る科世が、どこの馬の骨とも分らん奴と手なんか組んでたら、そう思っるのは自然な反応だろう。で、科世は何故誇らしげな顔をしているのだろうか？

「さ、買い物も終わったし、帰ろうよ、神夜」

「そうだな。コーラもたくさんゲット出来たし、今日はこれで引き上げだな」

両手一杯にコーラを抱えた俺は上機嫌だった。かつてこんなにもコーラを手にしたことがあっただろうか。いやなかっただろう。コーラ天国だなこりゃ。

はっ！まさか……これがヘヴンの真の意味だとしても言うのか！？俺は大層な名前などと、この店を愚弄してしまった……くうー！あの時の自分をこの世から排除してしまいたい！店長の前に引きずりだして土下座させてやる！

「今日はありがとうな、科世」

「あ、う、うん。私の方こそ。手伝ってもらってありがとう」

うーん、全く手伝ってない気がする。まあ科世が満足ならそれで良いか。実質俺も科世のおかげでここを知ることが出来たわけだからな。

俺は帰り道を科世と二人で並んで歩いていた。時間はもう七時を回っている。

（ちょっと遅くまで居過ぎたかな）

天気は晴れだったため、そこまで暗くはない。
俺は科世と話していたが、前方から黒いスーツを着た男がこちら

に近づいて来ているのが見えたため、会話を一旦切る。俺と科世は、気にも留めずに通り過ぎようとしたが、男は俺と科世の前まで来ると立ち止まった。

「明星神夜だな」

「そうですが……何か？」

「死ね」

そう言う男の手には、鈍く光る拳銃。おい！嘘だろ！？ここは日本だぞ！？銃刀法違反だ！

タァン！！！！

響くのは、乾いた銃声だった。

第八局く神夜の優しさく（後書き）

この後どうなるか、お楽しみに。
ではまた会いましょう

第九局『掟破り（アンチルール）』（前書き）

いや、疑心暗鬼さん強し。
ではどうぞ。

第九局『掟破り（アンチルール）』

「おいおい、学生相手に拳銃とは、穏やかじゃねえな」

恐る恐る目を開けた俺の前には、二メートル越えの巨大な人影。こんなに大きな人を俺は一人しか知らない。二年^{キング}王^{キング}にして『掟破り（アンチルール）』の異名をとる化物、疑心暗鬼さんだ。

その暗鬼さんの額の前で弾丸は静止し、地面にカランと乾いた金属音を立てて勢い無く墜落した。

「お前は……『掟破り（アンチルール）』、疑心暗鬼……何故弾丸が効かない！？確かに頭を……！」

「銃じゃ、いや……この世の物じゃ俺は殺せねえよ」

男は何が起きたのか分からないようだった。それも当然だろう。俺も最初はわけが分からなかった。まあ、今もわけが分からないがとにかく、暗鬼さんには攻撃が当たらない。それが剣であろうが銃であろうが同じことらしく、その能力のせいで俺達は暗鬼さんに敗北した。

「というか科世は！？……………おお！見事に気絶しているではないか！」

「神夜、久しぶりだな。そいつを連れて早いとこ寮に戻れ。ここは俺が引き受ける」

「でもっ……………分かりました。任せます、暗鬼さん」

ひっくり返った科世を背負った俺は、暗鬼さんを残してその場か

ら全力で走り去る。振り返ると、暗鬼さんの後ろ姿。その姿がとも頼もしく見えた。

（暗鬼さん……どうか無事に帰ってきてください！別に心配してはいませんけど……）

「さて、ここからは俺が相手だ。この『掟破り（アンチルール）』、疑心暗鬼がな」

そう言う暗鬼の顔はこれまでにないくらいの笑顔だった。

その笑顔に恐怖を覚えた男は拳銃を再び構え、お構い無しに暗鬼へ向けて発砲する。が、やはり弾丸は暗鬼に到達する前に空中で止められ、地面に落ちていく。

男も学習能力が無いわけではないので、もう銃を撃つことはしなかった。

「まさかお前……能力者、か？」

「勘の良い奴は好きだぜ？でもお前は嫌いだ」

「……結構だ」

暗鬼はそれなりに広い心の持ち主ではあるが、知り合いに銃を向けるだけでなくいきなり発砲する輩を好きになれというのはいくら暗鬼でも無理な話だ。

そんな人類大好き人間など、この世に数える程しか居ない。いや、居るかどうかも分からない。もし居るとすればどこかの学園の生徒会長くらいなものか。

「ここらで種明かしをしてやる。俺の能力は『設定変更者』^{ルール・カスタマイザー}。俺の好きなように設定^{ルール}を一つ決め、それを世界に固定する。今俺の決めた設定^{ルール}は“自分の体に物体が当たらない”だ。つまり、剣も弾丸も拳も魔法も俺には届かないってわけよ」

随分遅い気がするが、ここでこの世界について説明しよう。この世界には三種類の人間が存在する。一般人、魔法使い、そして能力者。比率は六：三：一の割合で能力者は一割とかなり少ない。能力者は希少な存在であり、それを日本中から集めたのがこの捨て駒学園である。

疑心暗鬼はその能力者の中でも群を抜いての別格。いや別次元だ。何せ能力は『設定変更者』^{ルール・カスタマイザー}。全てを自分中心に変えてしまうことが出来る。

いわば世界の理^リを操ることが出来るわけで、それ故に付けられた二つ名が『掟破り（アンチルール）』。世界の掟を破ってしまうのと、余りに強すぎるという二つの意味が在るらしい。

仮にもしその能力が無かったとしても、別段困りはしなかった。元々の腕っ節の強さとタフさを兼ね備えていたからだ。

この世界において疑心暗鬼という存在は絶対であり、同時に必然でもあった。しかし、他に追撃を許さない生まれ持ったこの絶対能力のせいで、絶対であるにも関わらず暗鬼は昔から一人だった。いや絶対故の一人だったのかもしれない。

そんな暗鬼には親が居ない。いや正確に言うなら殺された、が正解だろう。

まだ生まれて間もない暗鬼を、戦争のために育てようという組織が狙った事があり、両親は暗鬼を守って亡くなってしまった。

暗鬼は三歳から施設で暮らす事になる。

それなりの歳に成り、学校に通い出すと、大人がやたらと暗鬼に突っかってきたが、負けたことはない。

全て返り討ち。誰一人として暗鬼に触れることなく闇へと消え失せていった。

自分に寄ってくる者は皆無。友達すら居なかった。暗鬼の能力を知った瞬間、周りの者は全て遠ざかった。

最強故の孤独。

教室であろうが寮であろうが何時も孤独。それが当たり前。

「『ルール・カスタマイザー設定変更者』……化け物か……お前」

「ああそうだ、俺は化け物だよ。だがな、こんな俺でもあいつ等は受け入れてくれたんだ。俺の考えを認めて真似までしてくれやがったんだよ」

そう、神夜は暗鬼の考え方を認め、受け入れてくれた。やっと出来た繋がりを断ち切られるわけにはいかない。今

までこんな事は、人を守ろうと思ったことはなかった。

心境の変化とはこの事を言うのだろう。

「さあ、どっからでもかかって来な。返り討ちにしてやる」

「今、お前の相手をしている暇はない！」

男が手を宙に翳すと、いくつもの魔法陣サークルが空中に出現しその魔法陣から火炎弾が放たれ、暗鬼へと一直線に向かってゆく。

が、その火炎弾もやはり暗鬼に当たる直前で弾け飛び、原型を無くして拡散する。

「パイロ・クルーナ火炎奏者か。てめえが神夜の家燃やした犯人ってわけだ」

「……どこでそれを……」

「俺が何の情報も持ち合わせてないと思ったら大間違いだぜ？ 神夜はその時、保健室で寝んねしてたんだ。家ごと燃やそうとしたのに残念だったな。捨て駒学園学園自治団オーディン・ストライク『主神の一撃』、くろがねじょうえんと鉄城炎斗さんよ？」

「そこまで知っているとはな。まあ別に知られて困る事ではないが……不愉快だ」

炎斗は唇を噛み締めた。

暗い中でも、暗鬼の目にはそれがはつきりと目視できる程に。一度殺し損ねた相手を、今度は疑心暗鬼という予想外のイレギュラーによってまたしても殺し損ねてしまった。

加えて相手が自分の情報を、いずれ分かっってしまうとはいえ、明かしもしない内から握っているとあっては、不愉快な事この上ないに違いない。

「いいからそこをどけえ！！」

「嫌だねっ」と！

炎斗は炎を刀の形に形成し、暗鬼に斬りかかる。

暗鬼も同じように剣を出現させてその一撃を受け止めた。その剣の名前は『キング炎月』。

>王くの装甲をも切り裂く破壊力を秘めた大剣だ。炎月と炎の剣

がぶつかり合い、鈍い音を立てる。

「何故お前らは、いや“お前は”神夜を殺そうとするんだ？あいつは魔法使いでもなければ能力者でもない、一般人だせ？殺すなら科世の方だと思っただがな」

「あいつは……明星神夜は危険だ……消さねばならい！」

炎斗の口調に応える様に、炎の剣の刃にあたる部分から炎の触手がいくつにも枝分かれして四方から暗鬼を襲う。

夜の住宅街で炎が踊った。

それを見た人が居たなら、何とも美しい光景だったに違いない。

「へえ、そんな事も出来んのな。便利な能力だ……料理には困らないんじゃないの？」

「！」

平然と立って話す暗鬼の前にその言葉など一語も耳に入らないくらい、炎斗の頭の中はパニックに陥っていた。

暗鬼は最初に言っていた。

『自分の体に物体が当たらない』という設定を定めた、と。炎斗はまだ理解出来ていなかったというわけだ。

暗鬼の『設定変更者』の能力の意味を。

暗鬼が絶の存在であるということ。

暗鬼が世界に定めた設定は覆らないということ。

「世界の設定は俺に決定権があるんだよ。まだ分かんないかな？お前はどう足掻こうと、俺という絶対の存在の前では小さすぎる存在なんだよ。俺には勝てないんだ」

「……それ以上は、これを受けきってから言え！」

両手を宙に掲げた炎斗の頭上には、空を覆い尽くさんばかりに広がる巨大な炎球が一つ。

「宇宙^{かなた}より出でし灼熱の申し子……総てを焦がし、焼き尽くさん！
ザ・プロミネンス
太陽の紅炎！」

炎球が暗鬼に向かって落とされ、轟音と共に辺りは炎に包まれた。これほどの騒音が鳴り響いているにも関わらず、起きて窓の外を見ているような住民は一人として居ない。ただ無神経なだけなのか、それとも恐怖で外を見る事が出来ないのか。それは本人にしか分からない事だ。

「だからあ、効かねえって」

「！……馬鹿……な」

自分の最大攻撃を浮けても、やはり立っているその男。疑心暗鬼。炎斗は全身が脱力感に襲われるのを、如実に感じる事が出来た。自分の意思とは関係無く、体がもう諦めてしまっている。

目の前の最強にただただ圧倒されるのみ。指もまともに動かない。何とか口は動くが、口が動いてもどうしようもないことくらい、炎斗にも分かっていた。

「な、何故！」

「あ？」

「何故お前はあいつを、何の価値も無い一般人の一年を守ろうとする！そんな事をしてお前に何の得が……」

「おい……少し黙れ」

怒りを露わにした暗鬼の形相に、炎斗は思わず黙り込んでしまった。炎斗の額には汗が滝のように流れ、今にも倒れそうな虚ろな目になっている。

「損得感情の問題じゃねえんだよ。仲間を助けるのに理由なんて要らねえだろ！」

“仲間を助けるのに理由は要らない”

暗鬼からしてみれば、一生使うことは無いだろうと思っていた言葉。

生まれた時から一人で親の愛も知らず、施設でも避けられていた暗鬼に初めて出来た繋がり。この繋がり^{もの}は暗鬼にとってそれ程大きな繋がりなのだ。

「次からも神夜を狙う様なら、俺が『主神の一撃』^{オーディン・ストライク}を潰してやるかな」

言い捨てて暗鬼は夜の路地へと消えていった。残ったのは、全てを打ち碎かれた炎斗だけ。

だが次の瞬間、

「炎斗カツコ悪うう……何故一人で明星神夜を殺そうとしたの？私も混ぜて欲しかったなあ」

「この声は……時雨^{しぐれ}か」

背後から聞こえてきた無邪気な声に炎斗は振り返らずに答える。
平静を装ってはいるが、炎斗は全てを砕かれたのだ。顔を上げる
事はしなかった。

「これはあの方の命令じゃなく、俺の独断からな。一人で動いた方
が無難だと思っただけだ」

「あんまり悪いことしちゃだめだよ？」

「分かっているさ」

そう言っで漸く立ち上がった炎斗は時雨と呼ばれた女性と共に、
暗鬼の後を追うように、夜の闇に紛れていくのだった。

その日、炎斗の顔が上がる事はなかった。

第九局『掟破り（アンチルール）』～（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想などお待ちします。では、また会いましょう

第十局　冷たい親友（前書き）

神夜の過去が一部明かされます
ではどうぞ

第十局　冷たい親友

昔、俺には親友が居た。金髪に翡翠の瞳が美しいフランス人。

そいつと最初に会ったのは、小学校に入って二ヶ月くらいの時だ。急遽転入ということであのクラスのに入ってきたのは良いのだが、特異な容姿と、外国人という事もあるのだろう。

仲間の輪に入らず、一人教室の隅に座っていて、それを不思議に思った俺は無意識に声をかけていた。

「ねえ……君……」

「！」

俺を映したその瞳は怯えていた。体も小刻みに震えているのが分かる。知人が一人も居らず、右も左も分からない土地へ放り込まれたとなれば怯えもする。俺だって同じ境遇下だったらそうになっていただろう。

「……名前は？」

「……………」

答えなかった。いや答えられなかった。ただ首を傾げるだけ。それも当然。何せ当時、そいつはまだ日本語が使えなかったのだから。しかし、先生も先生だ。せめて一言言ってくれば良かったものを、何も言わないから接し方が分からない。

自分の持つ母国語が通じない相手とコミュニケーションをとるといふ課題は、小学校一年生にはきつすぎるといふ事を考慮していなかったのか。それとも忘れていただけなのか。

何にせよ、小学校一年生で英語が使える日本生まれの日本育ちなど居るはずもなく、沈黙が流れた。

「ぼ、僕、明星神夜。よろしく」

「！」

先程も言ったとおり、接し方が分からない俺は、沈黙を破ってとりあえずそいつの手を無理矢理握ってみる。普通なら驚いて手を引っ込めるところだが、そいつは引っ込めるところか急に笑顔になり、俺よりも強い力で俺の手を握り返してきた。

その瞳には、涙。これは嬉し涙に分類されると思う。

そいつは恐らく、繋がりが欲しかったのだらう。年の端もいかな子どもが味わう孤独は相当なものだというからな。

ましてや何も分からない場所に居て、孤独を味わってきたそいつにとっては、俺の差し出した手が何よりの救いに思えたのだらう。

その日を境に俺とそいつはいつも一緒だった。登下校の時、昼食、昼休みに至るまで、二人一緒に行動していた。先生がその光景を見かける度に、寂しそうな顔をしていたことには気付かなかった。

家が近所だと知ったのは、一緒に帰るようになってしばらくの頃。家の場所を知った俺は、毎日といって良いほどそいつの家に足を運んだ。

その度に二人で騒ぎを起こしては近所の人たちに追いかけられたものだ。

相変わらず名前は明らかにしないものの、そんな事はどうでも良いと思える程の仲になった俺とそいつ。

何気ない会話。

綺麗に整った、小学生とは思えない顔。
安心感のある手の温かさ。

その全てがかけがえの無いものと成っていった。俺はそれがずっと続くと思っていた。だが、別れというものは突然やってくる。

小学四年生になった年のある日、そいつは学校に来なかった。

一度も学校を休まなかった奴が休むと、何とも言えない違和感があるものだ。少なくとも俺はそう感じていたが、他の連中はいつも通りというか、気にもしていない様だった。

会うのが楽しみで学校に来ていた俺はうなだれて席に着く。
すると、先生が何やら険しい表情で俺の机の前にやってきた。

「神夜君」

「何ですか？先生」

そして、先生がその口から絞り出した言葉は……。

「先生……今、何て……」

「あの子は今日限りでフランスに帰ることになってたの。他のみんなは知ってるわ。あなたには言わないで欲しいって、本人たっての希望だったから言わなかったけど……」

俺は先生が何を言っているのか理解出来なかった。いや、しょう

としなかっただけかもしれない。

理解してしまうと、あいつと別れるという現実を受け止めなければならいからだ。

しかし、現実残酷で、残忍で、無慈悲だった。

「あの子がフランスへ帰ることになったのは知っていたから、仲良くなってしまうと別れが辛くなる。だから、何も言わなかったのだけど、あなた達を見てたらどうしても言い出せなくて……ね」

俺はこの時、自分の愚かさを自覚した。

別れを俺自らが辛いものにしていたのだ。その辛さを塵ほども顔に出さず、今まで俺と接してくれていたなんて思いもしない事。先生が何も言わなかったのはこの時に備えてだったのだ。

余計な事をして、知らなくても良い現実を知ってしまった。俺がもし、他のクラスメイトみたいに、あいつとそこまで仲良くなっていなければこんなに悲しむ事はなかっただろう。

「でもあの子、あなたにメッセージ、残して行っただけ……」今までありがとう。たった一人の親友、明星神夜君”って」

「！」

俺は気付いた時にはもう学校を飛び出していた。

先生が何か言っていたが、全く耳に入らなかった。それ程、当時の俺は無我夢中で空港を目指して走っていたのだろう。

そいつが何時の便でフランスへ発つか、小学四年生に分かるはずもなく俺は空港中を走り回った。

そして見つけた、金髪の少年。

もう飛行機に乗ってしまうかというところだった。

「神夜……君……どうして……」

俺を見るそいつの目は動揺に震え、涙が後から後から溢れている。

「待つてるから」

「……え？」

「君にまた会えるまで……僕はこの日本で待つてるから！必ず……帰って……き……て」

俺ももう涙を抑えられなくなり、感情の為すままに泣いた。今思い返しても、何故あんな事を言えたのか自分でも不思議に思ってるんだがね。

「うん……必ず帰って来るよ！恥ずかしくて言えなかった僕の名前、今なら言える。覚えててくれるかな？」

「……勿論！」

「分かったよ。じゃあ言うね？僕の名前は……」

「今日からこの>歩兵<^{ポーン}一組になったトーマ・オーフェン^{ルイッ}リルだ。種類は魔法使い。属性は氷。よろしく頼む」

俺は目の前に立つ青年を凝視した。月日が経っていることもあり、少し変わったところもあるが、やっぱり俺の親友だ。

「トーマ……本当にトーマなんだな？」

「ああ、久しぶりだな……帰ってきたぞ。神夜」

覚えていてくれた。俺があの時言った“待っている”を、トーマはちゃんと覚えていてくれた。俺は嬉しくて泣き出しそうになるのを堪えた。

よし、良くぞ耐えたな俺の涙腺。今度賞状を贈ってやろう。『耐えましたで賞』ってな。

「じゃあトーマ君、席は神夜君の隣で良いわね？」

「ええ、構いません」

トーマが俺の机の前にやってくる。

実に六年振りに見る親友の顔は懐かしくもあり、新鮮でもあった。

「また、一緒だな」

「ああ、馬鹿やって頃が懐かしい。神夜が何時もしくじっていたかな。おかげで俺もとばっちりを喰らったものだ」

「フッ……なら学校（い）でも一丁（い）やらかしてみるか？親友さんよ？」

「悪くないな」

俺もトーマも笑顔で固い握手をかわす。何故か氷の魔法使いであるトーマの手は温かく、安心感がある。

（そうか……手はあの頃のままなんだな）

俺が思い出に浸っていると、沈黙先生の声が俺の意識の中へと飛び込んできた。そのせいで俺の中に蘇っていた思い出が瞬く間に弾け飛んでいく。

それにしても沈黙先生、何やら真剣な表情だな。

「神夜君、突然で悪いんだけど、今からみんなを連れて第一演習場に集合をお願い」

「相手はどこのクラスです？」

演習場集合といったら、演習しかあるまい。

「二年＞騎士^{ナイト}くよ」

二年＞騎士^{ナイト}くか……ん？誰が重要な人が居たような気がするんだが……誰だっけ？全然思い出せない。

「どうした神夜、変な顔しやがって」

これは地顔だ、バカ終冴。喉まで出かかったその言葉を飲み込んだ俺は、再び二年＞騎士^{ナイト}くの重要人物を記憶の中から掘り出そうとする。が、

「ささ、早く行こう神夜」

「お、おい！そんなに引つ張るな科世！自分で歩けるから！」

科世によって俺の記憶探索は打ち切られた。どうもこっぴどい時に

見せる押しの強さには敵わないんだよな。はい、探索部隊撤収撤収！。

俺はどこかのギャグマンガの様に襟を掴まれてズルズルと引き摺られて演習場へと連れて行かれる事になる。後ろを付いて来る悠聖、終冴、トーマの笑顔が無性に腹立たしい。

第一演習場の西側。そこに俺、明星神夜は居た。目線の先には二年>騎士^{ナイト}く^の先輩方。相手にとって不足は無い。

「待ってたわよ神夜。今日はあんたを、いやあんたのクラスを潰してあげる」

「げっ！緋狩！？」

思い出した。二年>騎士^{ナイト}くには俺の幼馴染こと咲群緋狩が居るんだ。

……えゝ、科世？何だか真っ黒いオーラが体を取り巻いているんだが、それはスルーってことで良いのかしら？

よし、スルーしようか。

「科世、今日はお前に……」

「緋狩さん……！」

おおっ……いきなり大声を出すもんじゃありません。心臓に悪いでしょうが。

「今日は負けませんか！」

「……かかってらっしゃい」

互いに微笑み合う緋狩と科世。

女の争いはドロドロしてて気分が悪くなるって聞いたことがあるけど、この二人を見るとそういうイメージが沸いて来ないのは何故だろう。

まあ良いか。今はそんな事気にしている場合ではない。そろそろ演習が始まる。

結構久し振りだな、演習。だが、そんな事を言い訳にして緋狩に負けるわけにはいかないもんな。

「それでは、一年＜歩兵＜^{ポーン}一組対二年＜騎士＜^{ナイト}の実践演習……開始
！」

かくして、俺達と緋狩の戦いが始まった。

第十局　冷たい親友（後書き）

どうだったでしょうか？

出来れば評価お願いします。

第十一局　守護者の住まう城（ガーディアン・パレス）（前書き）

更新遅くなりました。どうもすみません。
楽しんでいただけると幸いです。

第十一局　守護者の住まう城（ガーディアン・パレス）

「悠聖、終牙は部隊を率いて敵軍後方へと回り込み、脱出不能牢アルカ・トラスの体勢を作れ。俺も前に出る」

「神夜、間違っているぞ。アルカ・トラスではなくアルカ・トラズだ」

指示を飛ばしていた俺にトーマからの訂正が入った。

そうなのか。それは知らなかったな。これからは間違わないようにしなければ。でも、濁点があるのと無いのでこうも響きが違ってくるのか？

トーマは何故その間違いに気付いたのだろう。そして、周りの連中は何故俺の間違いに気付かなかったのだろう。

うーん……疑問は尽きないが、そろそろ現実に戻るとしようかな。

> 僧ベシヨツくへと就任したトーマに間違いを正して貰い、気分を新たに
した俺は> 王背筋キングに悪寒が走り、不安が込み上げてくるが、俺はその不安を取り払うかの様に首を何度も振ると、次の指示を飛ばした。

「悠聖、終牙、そのままの陣形を保ちつつ、敵を二十メートル南に先導してくれ。そこが大水牢の威力が最大限に発揮できるポイントだ」

「分かった」

「任せな」

俺の指示通り、悠聖と終牙率いる小隊の先導で緋狩の軍は一メートル、また一メートルと南に動かされつつあったが、後もう少しというところで緋狩の軍はビクともしなくなってしまった。

まるで、“今までわざと乗せられてあげていましたよ”とあざ笑われているかのような感覚が俺を襲う。

（こちらの意図を理解しているような動きだ……何故だ？何故読まれている！？）

「何故って……神夜、あんたまさか忘れたの？私の能力」

能力？……………あ！そうだった！

緋狩は読心術を使う能力者という事を忘れていた。何故もつと早くに思い出す事が出来なかったのだろうか。

希少な能力者が、俺の近くには二人も居たんだな。一人は言うまでもなく、目の前でふんぞり返っている、俺の幼なじみこと咲群緋狩。

そしてもう一人は世界が滅んでも自分だけ生き残っていそうな規格外の最強二年生、疑心暗鬼。そういえば暗鬼さん、あの後どうなったのだろう。何も聞いてないから大丈夫だとは思うが、後で二年^{キング}>王^{キング}の教室に行ってみるとするか。

しかし、よくよく考えてみれば俺はそんな恐ろしい人を相手に足掻いていたんだな。自分の無謀さに感心するよ。

「私の能力は『^{ダイレクト・リーダー}声を聴く者』。相手の心の声を^{ダイレクト}直接に聴く事が出来る。心を読むとは少し意味合いが違つかしらね」

どう違うと言うんだ。

“心を読む”と“心の声を聴く”。この二つに目立った相違点が

無い様に思うのは、もしかして俺だけなのか？

相違点が有ったとしたら、入学式の日“相手の心を読む”能力と説明した俺の間違い、ということになってしまいが、別に構いやしない。

自分の能力の事は、能力者本人が一番良く解っているのだから、そこに俺が口を挟む理由も無いしな。

「心を読む」は自分から意識を相手の心に入れて心を読むのも、“心の声を聴く”は勝手にその人の思いが頭の中に流れ込んで来る。結構便利なんだから」

つまり、自分の意志とは関係なく相手の心の声を受信してしまう能力ということらしい。

便利か？それ。

俺にしてみれば、四六時中周りの奴の声が聞こえるっただけの、厄介能力にしか聞こえないんだがね。それでは五月蠅すぎておちおち学校で居眠りも出来ないではないか。

つと、緋狩はそんな不真面目野郎じゃなかったな。しかし、緋狩の能力は相当厄介だ。どれくらい厄介かというと、大剣『炎月』を振るう暗鬼さん。とまではいかないがとにかく厄介なのだ。何せ、戦略を全て覗き見られてしまうのだから。

「声が聞こえるのは能力の発動中だけよ。OFFにすれば聞こえなくなるわ」

あいつ今、俺の心の声を聞いてやがったな。

アルカ・トラス

お礼に脱出不能牢で綺麗に囲ってあげよう。包装してあげよう！丸く収めてあげよう！

大水牢の威力が最大ではなくとも、一度囲ってしまえば後はリンチし放題だから問題無い。俺の、いや俺達の勝利は約束されたも同

然だ。

「いくぞ！必殺布陣！脱出不能……」
タクティカルフォーメーション

相手の布陣の動きが急に変わったのは、そこまで言いかけた時だった。脱出不能牢アルカ・トラスの形成中に、敵駒が緋狩から遠ざかる。

まるで、水面に落ちた物体が立てる波の様に規則正しく広がっていき、脱出不能牢アルカ・トラスの完成を阻止した。囲いを押し広げた、と言う方が適切かもしれない。

「脱出不能牢アルカ・トラスは、相手を身動きがとれなくなる様に囲む必殺布陣。タクティカルフォーメーションその弱点は“完成させない”事。私の能力ならそういう弱点も分かるのよねえ」

「な、何！？この布陣は……」

俺は驚きを隠せなかった。それもそのはず。脱出不能牢アルカ・トラスを形成する自駒と一対一になるように、敵駒が一寸の狂いなく動いているのだ。機会の様な正確さである。

そんなものを見せられて驚くなと言う方が無理な話である。

「必殺布陣タクティカルフォーメーションが使えるのはあんた達だけじゃ無いってね。外側からの攻めなら、内側からの守り！必殺布陣！守護者の住まう城！」
タクティカルフォーメーション

緋狩の大号令と共に、全方位をカバーする防御型の布陣が完成した。そういえば、緋狩は攻撃よりも防御が好きだって前に聞いた気がする。

理由は至ってシンプル。誰かを傷付けないから、だそうだ。それでは甘い。守るという事は、自分が一方的に傷付けられるだけではないか。しかし、俺も“守る”という意見には心のどこかで

賛成していた。何故なら、俺もそういう人間だからだ。

（守り……か。確かに守りは、優しさは人間最大の強さだな）

「そう。それなら分かるわよね？この布陣の“強さ”が」

ガーディアン・パレス
守護者の住まう城の干渉により、不完全な状態の脱出不能牢に合
わせて科世の四式大水牢が発動する。

大水牢の効果範囲は広い方だとは思う。事実、脱出不能牢が完成
してしまえば、大水牢からは逃げられない。触れただけで大水牢の
中へと引きずり込まれてしまう。だが、肝心の脱出不能牢が完成し
ていない状態での大水牢の威力など、たかが知れていた。科世には
悪いが、詠唱から発動までに要する時間が他の魔法と比べて長いか
らだ。

さらには予備動作として、目標とする地点に水の小球が出現し、
それが徐々に広がっていく。というのが大水牢の作動傾向。
フロセス

つまり、かわせるだけの場所さえ確保出来れば簡単に回避可能と
いうことになる。

「みんな、散らばって！」

緋狩の合図で、守護者の住まう城を形成し、脱出不能牢を押し戻
していた敵駒が散り散りになり、大水牢は難無くかわされてしまっ
た。しかも、その敵駒の動きには焦りなど全く見えず、恐ろしい程
冷静で、見ているこっちが焦らせられるくらいだった。

緋狩を信じているからこそその冷静な判断。迅速な行動。それだけ、
緋狩はクラスメイトから信用されているのだろくな。まあ、緋狩は
ダイレクト・リーダー
『声を聴く者』の能力を持っているのだから、信用するに足りる人
材である事は間違い無い。

相手の心が読めない一般人にとって緋狩の能力は敵の手の内を知

る手段として、最たる能力だ。

流石は緋狩……といったところか

って感心している場合では無い！

どうにかして守護者の住まう城を破らなければ。『ダイレクト・リーダー声を聴く者』は緋狩自身が持つ能力であるからどうしようも無い。

“能力を無効化する”能力でも無ければ防ぐのはほぼ不可能。となると、この戦いの鍵は守護者の住まう城をどう破るにかかっているようだ。

俺は無意識の内に指を顎に付けていた。

（あれは全方位をカバーする防御布陣……全方位……そうか！）

俺がある考えに至った瞬間、後ろから殺気めいたものを感じた。咄嗟に振り返るが時すでに遅し。

いつの間に回り込んだのか、緋狩の駒、>騎士ナイトくの二人と>歩兵ポーン<三人が俺に向かって剣を振り下ろしているところだった。

剣で防ごうにも鞘に収めているため、抜刀が間に合わない。もし抜けたとしても一本の剣で同時に五本もの剣を防ぐのは無理だ。

耐久力は残り960。恐らく耐えられるだろう。しかし、その後の戦闘が続けられるのかというと、『うん』とは言えない。

（周りが見えてなかったのかな……バカだ……俺は）

俺は目を瞑った。来たるべき衝撃に備えて。

バキィィン！

だがその衝撃は、変わりに音として俺の耳に届く結果となる。目を開けたその先には、地に伏している敵駒五人と、ボロボロになった>騎士^{ナイト}くが。

その>騎士^{ナイト}くは俺の親友、城ヶ崎悠聖だった。

第十一局　守護者の住まう城（ガーディアン・パレス）（後書き）

説明や話ばかりですみません。

次は本格的な戦闘シーン入れていきますんでよろしくお願いします。

第十二局　崩れ去る城（パレス・ブレイク）

「ゆ、悠……せ、い………悠聖！」

漸く状況を理解する事が出来た俺は悠聖の元へと駆け寄り、抱き起こした。俺を庇って受けたダメージは思いのほか大きかったらしく、耐久力は0と表示されている。敵駒五人分の攻撃をその身一つで全て受けたのだ。

基本値630の耐久力が無くなるのは当然と言ってしまえばそれまでである。俺は自分の無能さを恨んだ。今まで無い程に。砕かれ、地に転がった>騎士^{ナイト}くの鎧が俺の指揮官としての無能さを物語っているように思えたからだ。

試合において、自分のせいで負けたら自分を咎めるだけで済む。しかし仲間を傷付けるまでに至ってしまうと、咎めるだけでは済まされない。

緋狩から面白い様に心を読まれ、王手を掛けるべき相手に王手^{チェック}を掛け返されてしまうだけでなく、そのせいで仲間をも傷付けてしまった。

『愚かな>王^{キング}く』

今の俺を表すのに最も相応しい単語だろう。いや、>王^{キング}と呼べるかどうか危うい。部下の負傷は大将の落ち度でもある。

（大将失格だこりゃ……次からはトーマにでも>王^{キング}くをやってもらうかな……）

俺が>王^{キング}く引退の意志を固めていると、不意に悠聖が口を開いた。

「神……夜……後は……任せた」

「！」

絞り出すように言葉を吐き出した悠聖は、そのまま演習場外へと強制転送されていく。後には、俺が残るばかり。

何をしていたんだ俺は……>王^{キング}を辞める、だと？ふざけるんじゃない！仲間の信頼を裏切ってまで>王^{キング}を辞める理由など俺には無い筈だ。ああ……バカな自分に虫酸が走る。

「つたく、悠聖の奴………“後は任せた”か……」

まるで英雄^{ヒーロー}にかける様な言葉だ。俺はそんな柄ではない。期待されたところで、その期待に応えるだけの働きが出来るとも限らないのだから、悠聖の言葉は少なからずも重圧^{プレッシャー}となって俺にのしかかって来るわけだ。

しかし、そこまで言われておきながら引き下がる事など出来るわけが無い。

俺は立ち上がると通信をオープンにした。俺の心の声は緋狩に聴かれている。ならば、指揮系統を別の人間に移せば良い。

自分が>王^{キング}である事に変わりはないが、緋狩の能力が及ばない人物に指揮系統を託すことで事態を収集した俺。その人物とは……

「というわけでトーマ。指揮は任せる」

「分かった」

トーマの短い返事を確認した俺は前線の部隊に加わる。部隊とい

つても、八人程度が集まっただけであるから、部隊と呼べるか否か難しいところだ。それに俺は一人で動くつもりであるからして、部隊なぞ何の意味も持たない。

俺の役目は悠聖の抜けた穴を埋める事。責任はキッチリととらせてもらうさ。後ろを振り返ると、トーマの笑顔。指揮は任せたぜ親友第一号さんよ。悠聖のためにもこの演習^{たたかい}、負けられない！

「みんな、俺を守る事はしなくて良い……此处で待ってる。さあて……暴れて来るか！」

俺は部隊を残し、単独で敵陣へと切り込んで行く。

頬を撫でる風が心地良い、が……何故だろう。景色の流れる速度が異常に速い。走ればそれなりの速度で景色が流れていく。だが、今の速度は人間の走りが生み出すそれとはかけ離れて速かった。気付けば既に敵陣の真っ正面。

「神夜……そのまま前進……」

「へっ……了解！」

「えっ……トーマ君の心の声が聞こえない！？何故！？」

緋狩はトーマとの面識がある。二人共俺の幼なじみなのだから、小学四年になるまでの間に一度も顔を合わせなかった筈がない。トーマがフランスに帰った後は、感情を抑えきれなくて緋狩に抱き付いて大泣きしたっけ。

うう……今更だが思い返すと恥ずかしくなってきたぞ？

「一体……どうなってるの？」

「緋狩さん……俺は氷使い……心を凍らせて閉ざすなんて造作も無い事ですよ」

「は……そんな事って……」

やはりそうだった。トーマは氷の魔法使いだから、自分に氷魔法をかける事が出来たとしても不思議ではあるまい。しかし、自身の心にまでかける事が出来るとは驚きだ。てっきり俺は、自分の体温を低下させて心を落ち着けるくらいだと思っていたのに、“心を凍らせて閉ざす”なんてどんな発想だよ。

「これで心の声を聴く者は俺には効かない……神夜、後は任せる」
「」

「お前までその台詞を言うか」

数名で斬りかかってきた>歩兵<の斬撃をかわして、すれ違いさまに剣の柄で全ての>歩兵<の腹部に突きを見舞う。いちいち斬つてたら時間の浪費になるからな。>歩兵<の悶絶した声が後ろから聞こえてきたが、そんなの知らん。

目指すは緋狩。

『心の声を聴く者』で“俺の心の声は”聴かれているが、直感で動く俺の動作には付いてこれまい。考えて動かないのだから、心の声など聞こえようが無いわけだ。

「行くぞ！緋狩！」

「それを許すと思ってるの？必殺布陣！守護者の住まう城！」

ここだ！守護者の住まう城が形成されるこの瞬間を待っていた。

確かに、守護者の住まう城は鉄壁を誇る防御布陣。但し、それは“
防御が及ぶ範囲”での事。だったら、その防御範囲外から攻撃を加えてやれば良いだけの話だ。そう、例えば……

「科世……神夜の足元に十二式を。速詠唱で構わない」

「はあーい！……十二式蒼流壁！」

速詠唱とは、術式を発動する際に必要な言霊を無視して詠唱することにより、詠唱時の隙を少なくする詠唱法だ。しかしその場合、術の威力は半減する。

魔法使いなら誰にでも使えるというわけではなく、上級魔法使いにのみ許された特別な詠唱法である。

俺の足元に水で形成された壁がせり出し、その壁が俺を宙に押し上げた。この際防御力が必要無い。俺の踏み台として使うのだから。
ガーディアン・パレス
守護者の住まう城の防御が及ばない場所、つまり上からの攻撃なら防がれない、というわけだ。どんなに優れた城壁が在ったとしても、死角からの攻撃に対応出来はしない。一般的に防御型布陣は前方後方の攻撃を防ぐためのもの。故に上、この場合では空からの攻撃に対する対策は何もとつてはいないはず。

オペレーション・パレス・ブレイク
名付けるなら、作戦名『崩れ去る城』だ。

ブルー・ストライク
「これでも喰らえええ！降下彗星！」

俺は剣を抜き、地上5メートルから守護者の住まう城の中央に鎮座している緋狩に向かって一気に降下した。
ブルー・ストライク
降下彗星なんて言うてはいるが、実際は空中から相手に向かって落ちるだけのシンプルな攻撃である。

ブルー・ストライク
だが、シンプルだからこそ、この降下彗星は……強い！

「か、カッコいい……じゃなかった！」

緋狩も自身の剣を抜き放つと、正面から降下彗星を受け止めた。
ブルー・ストライク
鉄と鉄がぶつかり、無機質な音を立てる。その瞬間、緋狩の整った綺麗な顔が苦痛で僅かに歪んだ。女性の筋力では、俺の全体重を乗せた落下攻撃を防ぐのに少々無理があつたのかもしれない。

「くう！……うああ！」

流石に耐えられなくなつたらしく、緋狩は剣を横一閃に振り抜き、衝撃を地へと受け流した。俺は地面に両足を着くと同時に左手を軸にして体を180度回転させ、そのままの低い姿勢から緋狩に追撃を加える。自分でもビックリするような速さで。昔から運動は得意な方だとは思っていたがそれでもビックリした。新幹線にでも乗っている様なスピードで景色が流れていくのだから。

そして懐へ踏み込んだ俺は目前の緋狩に向けて胴払いを放つ。その時の動きは最早人間のそれでは無い事に、俺は気付いていた。白刃が>王^{キング}の装甲へと吸い込まれていき、直撃する。

「がつ……！」

反応出来なかつた緋狩は俺の胴払いを喰らって土煙を上げながら地を転がり、やがて停止した。普通人間は自分の限界を知るとそれに絶望するものだが、俺の力は今、その限界を打ち破ってしまったのではないかと思うほど強かった。たかが胴払いで人が、それも>王^{キング}く装備を装着しているにもかかわらず吹き飛ばす程の力なんて、暗鬼さんくらいしか持ち合わせていないと思っただけに、この状況には俺自身が一番驚きではあるが。

見渡すと、守護者の住まう城を形成していた敵駒とそれを打ち破ろうと頑張っていた自駒の表情が比喻では無く固まり、驚愕の二文

字を視線に乗せて俺へ注がせているのがわかる。まあ、俺も自駒側そちらだったら同じような視線を送ったことだろう。しかし、戦いの最中は別の奴に目移りしてちゃ駄目だ。目の前の敵を倒す事だけを考えていれば良い。

「ぐう……」

やっとこさ立ち上がったらしい緋狩は、たった今胴払いを受けた横腹を押さえながら目を細くして、

「神夜……あんた、何の能力者なの？」

と俺に意味不明な質問を投げかけてきた。

はあ？能力者？わけ分からん。

俺が何の変哲も無く、怠惰な毎日を過ごしている一般人である事は幼少時代から一緒に緋狩が一番良く分かってはいるはずだ。それを分かって言っているのだから、緋狩の質問には何かしらの意味が存在していると思って間違いない。確かにさっきの180度ターンや胴払いの威力といい、人間の力や動きの範囲では到底説明出来ないものばかりではあるが。

（……その質問の意図は何だ？俺は能力に一番無縁な一般人なんだが）

「本当に知らないの？……なら、何故あんな動きが……」

「口動かす暇が有るんなら俺を倒す方法でも考えな！」

弾かれたように地面を蹴った俺は再び猛スピードで緋狩に接近する。

（今度は下を攻めてみるか）

今度は胴払いではなく、左手を軸にした足払いをかけるが、緋狩は反応したらしくジャンプでかわしていた。そして空中で俺の眼前へ白刃を振り下ろしてくる。よく空中でそんな動きが出来たものだ。だがこの時点での緋狩は忘れていた。人間には

“限界が有るということ”

今“限界を打ち破った”とかぬかして俺が言うのも可笑しい気がする。しかし限界が有る事は事実。

空中で剣を振るう事は出来ても飛んでくる飛来物を避ける事など出来ない。もし出来るのなら、そいつは能力者。それもかなり特殊な能力ということになる。俺は白刃を受け止め、その瞬間叫んだ。

「終冴！」

「はいよつと！」

終冴が投げ出した城^{ルッ}くの武器、盾はブーメランの様な軌道を空に描き、緋狩を捕らえた。緋狩の五体からメシメシと骨の軋む音がする。

「……………！」

声も出せず、緋狩はまたしても地を転がる羽目になった様だ。ぐったりと地に伏せ、動かない緋狩。幼馴染みからすれば少々心が痛む光景ではあるが、今の俺は緋狩の幼馴染みでは無い。歩兵^{ボン}組の王^{キング}くだ。仲間の、悠聖の、みんなの為に、ここは非情になら

せてもらつた。

俺は緋狩の背後へゆつくりと歩み寄る。緋狩は俺の存在に気付いていないようだ。そして剣を振り上げた。一切の感情を押し殺して無様に膝をつく幼馴染みを見下ろして。剣を振り上げた。

「緋狩……」

「……参つたなあ……勝てると思ったのに」

「悪いな……詰みだ」
チェック・メイト

『演習終了！>王^{キング}く撃破により、>歩兵^{ボーン}く一組の勝利です！』

「へえ……神夜にも出て来だしたじゃねえか……^{オンリーワン}専用装甲の兆しがあ
あのスピード、普通じゃねえな。速さ（スピード）^{オンリーワン}特化の専用装甲
になるだろうな、ありや」

沈黙のアナウンスが響き渡る演習場のフロアで一人呟くのは、『
突破り（アンチルール）』こと疑心暗鬼。『^{ルール・カスタマイザー}設定変更者』という、
一人で世界を支配出来る能力を持つ二年生だ。口の端を僅かに吊り
上げ、期待感を込めた笑みを浮かべている。

「あなたの持つ最強装備『^{ラスト・オルタネイティヴ}王嵐』に匹敵する専用装甲に成ると良い
わね」

「おや？俺はいつも一人で誰からも声をかけられない孤独な最強戦
士、疑心暗鬼様なんだが……その俺に何の用だ？二年>女王^{クイーン}く、時
きのうじくれ
皇子時雨さんよ」

時雨は暗鬼の隣に並ぶと、自分の身長を軽く凌駕する暗鬼を見上げて暗鬼と同じ様に笑みを浮かべる。しかし、その笑みは暗鬼が先程まで浮かべていたそれとは若干違っていた。まるで、暗鬼の心の内を探る様な透かした笑顔だ。

「そう思ってるのはあなただ〜けっ！実際一人じゃないでしょ？あんなにたくさんの繋がりなかまが、この学園には居るじゃない。羨ましい限りよねえ〜」

暗鬼は一瞬顔をしかめたが、文字通り一瞬のことで、直ぐに元の表情に戻る。時雨から理解されている事が暗鬼にとってはこの上なく不快に思えたのだ。時雨は二年クイーン女王くを束ねる実力者。全てを一人でこなしてきた暗鬼とは根本的な違いがあった。それは“クラスメイト”の存在。肩を持つてくれるクラスメイトが居るからこそ、他者からの信頼を勝ち取ることが出来る。

「そんな事を言うためにこんな演習場とくまで来たわけじゃねえんだろ？さっさと用件だけ言って失せやがれこのチビ女」

「いやいや、それは君がデカ過ぎるだけだつて。身長が232cmもある人間なんて見たこと無いよ？何をどうすればそんなにデカくなるの？いつも思ってるんだけどね」

「ああ、それは俺が人間じゃねえからだ。俺は化け物なんだよ。得心いったか？」

暗鬼は自分が化け物であることを疎ましく思うのではなく、むしろその事に誇りを持つているかのような口調で時雨の質問に答えた。自分でも言うほどなのだから、“化け物”。余程この単語が好きな

のだらう。

「成る程ねえ……納得納得。納得したところで……本題に入るよ？」

今までの屈託の無い笑顔はどこへ行ったのやら、急に真剣な表情になる時雨。その表情に暗鬼の拳に自然と力が籠もる。

「この学園に^{スーパースライダー}“滑り人”が転入して来るって話、知ってる？」

「何だと！？誰が許可した！？時期はいつだ！」

暗鬼は柄にもなく大声を上げた。暗鬼には、これからやってくる^{スーパースライダー}“滑り人”がどんな人物であるかが分かっていた。そしてその脅威も、強さも、ヤバさも、自分に匹敵する程の強大な能力^{ちから}を持つていることも。

「許可したのは捨て駒学園統括理事会。学校を潰す気かしら……転入時期は一ヶ月後。私達主神^{オーディン・ストライク}の一撃も彼奴^{あいつ}をこの学園にのさばらせる気は無いよ。だから此処は共闘戦線と行かない？一緒に奴を黙らせるの」

「はぁ……不本意なんだが仕方ねえ……分かったよ」

こうして主神^{オーディン・ストライク}の一撃と疑心暗鬼との共闘戦線が静かに成立した。

第十二局〈それぞれの信念〉（前書き）

場面がころころ変わります。ご了承ください。

第十三局　それぞれの信念

「ハア、ハア……」

俺、明星神夜は演習が終わると同時に保健室へ直行していた。演習場にはまだ緋狩が残っていたが、声をかけるのも忘れ、ただひたすら保健室へと続く廊下を走っているところ。後ろからは科世と終冴が付いてきている。

俺が保健室に向かう理由は一つ、悠聖に謝罪がしたい。別に誰に催促されたというわけでも無く、これは俺が謝罪したいからする。ただそれだけだ。やがて保健室のドアが見えてきた。息を吞んでドアノブに手をかけ、捻る。夕方の保健室しか見ていない分、昼の保健室は何だか新鮮だが、懐かしくもあった。この間保健室の世話になった記憶がそうさせるのだろう。

「神夜……」

声のした方向を振り返ると、そこには俺の仲間の姿が、城ヶ崎悠聖の姿があった。ベッドから立ち上がり、真っ直ぐ俺を見据えているが、少々息が荒い。俺も悠聖を正面に見据えて頭を下げようとするが、

「悠聖………本当にごめ」

「ふざけるな！このバカ野郎！」

そこまで言いかけた時だった。俺が「ごめん」と言い終わる前に悠聖が怒鳴ったのは。

ゴッ、という鈍く短い音がして、俺の体は宙を舞った。悠聖が俺

の頬を殴り飛ばしたのだ。殴られた頬が痛む、が仕方の無いことだと思わざるを得ない。悠聖が俺を殴り飛ばしたのは、俺のせいで自分がやられたことを恨んでいると思ったからだ。

「何で謝ろうとするんだよ！？謝るなよ！」

……謝るな？どついう意味だろうか。

「どうせお前の事だから“俺のせいで悠聖を傷付けてしまった”とか思ってるんだろ」

ああ、全くその通りだ。何も言い返せない程に的を射ているよ。

「俺が謝罪したいから謝罪するんだ」とか思ってたこまで来たんだろ？なら俺からも言わせてもらうがなあ……俺も、お前を助けたいから助けたんだよ。誰に催促されたわけでも無い。大切な仲間を、王^{キング}を助けたいと、そう思ったから体を張って庇ったんだ。それなのに……何を勘違いしてやがる！王^{キング}が簡単に頭下げんじゃねえ！俺が謝って欲しいなんて言うと思ったかよ！ハッ！片腹痛いぜ！」

「悠聖……」

「お前が頭を下げたら……俺の気持ちはどうなるんだよ……行き場が……無くなるじゃねえか。頼む……謝らないでくれ」

急に声に勢いが無くなった悠聖の頬には無色透明な線が出来ていた。目尻に滴をため、歯を食い縛り、拳を握り締め、体を小刻みに震わせている。

「……………悠聖、良くやった」

保健室の中央で佇む悠聖に、俺はやつと言葉を絞り出す。それが今の悠聖に向けるに一番相応しい言葉に思えたからだ。決して謝罪を連想させる類の言葉は言わない。悠聖に言われて分かった。他者の上に立つ立場の人間は下の者の意志はくまなければならないが、顔色を伺ってはならないという事が。

「神夜……………ありがとう」

悠聖の返答はその一言だけだったが、今の俺には充分過ぎる一言だった。礼を言うのはこっちの方だ。悠聖、ありがとう。

大きな空間。それが一番適した表現であろう会議室に、時皇子時雨と疑心暗鬼は居た。人が一体何人入るのかと思う程の広大さで、会議室にしておくには勿体無いくらいだ。暗鬼と時雨の周りには、乾いた空間が延々と広がっているだけ。別に二人の興をそそる物は置いていない。

「で、何だよ話って」

「スーパースライダー “滑り人”の事なのは間違い無いよ。先ず、あいつの目的について新しく分かった事があるの」

「目的って……………学校を潰すことじゃねえのか？」

暗鬼はずっとそれが目的でこの学園にやって来るとばかり思っていたが、実際は違うらしい。まあ、学校の運営を第一に考えている

のなら、学校を潰しに来させるなどそれこそ正気の沙汰ではないが。

「それなら統括理事会が許可するわけない。運営する側が自分の学校をみすみす潰されるようなマネをすると思う？あいつの目的は……明星神夜君」

「！……何で神夜を」

これには流石の暗鬼も目を見開かずにはいらなかった。あの“^{スライダー}滑り人”が何の変哲も無いただの一般人を狙う理由がどこにあるのか検討もつかなかったからだ。“^{スライダー}滑り人”は一般人の相手をしていく程暇では無いらしい。

「そついや、炎斗の野郎も同じ様な事を……まさか、テメエらの仕業じゃねえだろうな？“明星神夜は危険だ、排除しなければならぬ”とか言ってまた神夜を殺そうって腹か？もしそうなら今すぐにも……」

暗鬼が座っていた椅子から立ち上がる。その瞬間、二人の居る会議室は一触即発の空気に見まわれた。しかし、時雨の顔は冷静そのものだった。

「違うよ。あれは炎斗の独断だから私達他の^{メンバー}構成員はむ・か・ん・け・い。お分かり？滑り人の意図は私には“まだ”分からない。それに神夜君を殺^けすのが目的なら、他の^{メンバー}構成員がとくにやっていると
思っけど？」

「邪魔が入っていないければ、ね」と付け足し、いつも通りの無屈託スマイルを浮かべて暗鬼を諭す。が、

(冗談じゃないよお！……暗鬼君が会議室で暴れたら私も死んじやうって……それもこれも全部炎斗のせいだ。何とか鎮ま^つって暗鬼君！)

心の中では相当に焦っていた様だ。無理もない。世界最強が暴れたら歯止めが効かなくなることくらいどんなバカにでも分かる。それが二年>女王^{クイーン}を束ねる猛者ともなれば尚更。事の重大さを時雨は嫌という程に察していた。何せ暗鬼が本気になれば世界を支配出来てしまうのだから。みすみす暗鬼を世界の支配者にする理由はない。

そして当の暗鬼はというと、時雨の言葉に納得したのか「それもそうだな」と呟きながら再び椅子に腰を落ち着けた。時雨は胸の中で胸を撫で下ろす。

(はあ)。心臓に悪いわこれ……)

「ふう……で、暗鬼君。あなたこれからどうするの？ “滑り人”^{スーパースライダー}の転入日までまだ時間はたくさん有るけど。迎撃準備でもする？」

「ん？ああ……神夜達ん^{あいつ}とこに行ってくる」

「ちよっ……」

その言葉を聞いて何か言おうとした時雨を、暗鬼は片手を上げて制した。

「心配すんな。その時が来るまで何も言う気はねえからよ。でも、守る奴は必要だろ？ 滑り人^{あいつ}が狙^{あいつ}つてんだ。他の奴からも狙^{あいつ}われないとも限らねえ……見守らなきゃなんねえだろうよ？ 大切な仲間だしな。何時かは俺をも越えてくれると信じてる。それに、あいつ等と

居ると楽しいんだ」

「あなた……やけにあの子の事気に入ってるのね」

暗鬼は一度だけこちらを振り向き、口の端を吊り上げて笑うと、時雨に背を向けて会議室を後にした。残ったのは時雨ただ一人。何やら楽しそうな顔をして両手で頬杖を突き、暗鬼が退室していった扉を見つめている。その笑みは何時もの屈託の無い笑顔だ。別名営業スマイルとも言つ。

「誰とも関わろうとしなかった暗鬼君にあそこまで言わせるなんて……流石は私の弟よねえ。さあてと……叶恵先生が感づく前に炎斗をこちら側に入れなくちゃ。いつ会う機会があつたのかは知らないけど、私の勘が正しければ滑り人^{あいつ}に何かを吹き込んだのは多分炎斗……また私の弟が殺されかけちゃたまないもん。殺しに混ぜてつて言つてた私が言えた義理じゃ無いけど……自分の弟くらい守つてみせるよ。父さん、母さん」

時雨も静かに立ち上がると、暗鬼の辿つた退路を使って会議室を後にする。だだっ広い空間だけが、次の入室者を静かに待ち続けた。

「炎斗……あなた、滑り人（あの子）に何を吹き込んだのかしら……」

放課後、生徒が帰って無人となつた教室。その無人教室の一つに居たのは、鉄城炎斗と霜月叶恵の両名だった。叶恵の手には小さな氷球が無数に浮かんでいる。無表情ではあるが、その手に浮かべた

無数の氷球が敵対意識の表れなのだろう。一方の炎斗はというと、こちらも空中に幾つかの魔方阵サークルを出現させて臨戦態勢だ。

「別に、ただ『面白い奴が居るから潰してみるか？』と言ってみただけです。霜月先生」

「誰が彼を潰せなんて指示したの？主神の一撃の頂上オーディン・ストライク リーダーである私の許可が無い以上は認められないわ」

「俺の独断です。主神の一撃には悪いですが、こればかりは譲れない。先生や時雨は明星神夜の危険性がまるで分かっていないのですから！奏でられし紅き旋律……第七演奏曲セヴン・トラック！乱打リボルエンプレムされる炎球！」

炎斗の詠唱により、魔方阵サークルから炎球が留まり無く発射され、叶恵を襲う。それに対し、叶恵は手を正面に翳かざして先程まで掌に浮いていた氷球を打ち出した。銃に用いられる弾丸の形に変えて。

「そうやって魔力で黙らせようとする悪い癖、どうにかならないの？……丁度良いわ。上級氷使い、冷氣の支配者フリーズ・ソーサラーの力、見せてあげる。飛び交う雪原の使者、彼の者を穿て……五版氷結ファイブ・コールド……回転氷弾スクリュースロー」

叶恵によって撃ち出された氷弾は炎球とぶつかり合い、その大きさの関係で炎球に飲み込まれて消え失せたかに見えたが、次の瞬間には氷弾が炎球を突き抜け、炎斗の頬を掠めて教室の壁に数個の風穴を穿った。

「なっ！？」

炎斗の驚愕に対して、叶恵は妖艶な微笑を浮かべている。炎斗の驚愕には意外性など全くと言って良いほど無い。自然界の法則で考

えるなら本来、氷が炎に敵う筈が無いのだから。

「フフ……何を驚いているの？簡単よ、こんなもの。氷弾の形を“弾丸型”にしてしまえば良いのよ。高速で撃ち出された弾丸はその回転力で対象物を貫き、穿つ。あなたの撃ち出した炎球は文字通りの球体。私の氷弾は“溶けきってしまう前に”あなたの炎球を突き破ったにすぎないの。伊達に物理の教師やつてる訳じゃないのよ？三年＜王^{キング}、鉄城炎斗君？」

長くのばした銀髪を手で掻き上げ、叶恵はもう一度、妖艶な笑みをその顔に浮かべた。炎斗にとっては、叶恵の言葉や笑みより叶恵が物理の教師だった事の方が驚きだっただろう。炎斗には叶恵が物理などという、世界の現象を理屈で説明する教科を担当していたとは、とてもでは無いが思えなかったからだ。

（この人、物理の担当だったのか）

そんな事を思いつつも、炎斗は次の攻撃をするため、呼び出した炎を別物の形へと形成していた。魔法使いに扱える武器はその属性によって違ってくる。炎なら剣、氷なら弓といった具合で、決められた武器を使用する事が可能であると同時に自分の属性外の武器は使用不可という欠点がある。当然ながらある。だが、武器召喚は言霊を必要としない利点も持っているのだ。

スラッシュ・トラック アロンドイト
「刃演奏曲！燃え盛る斧剣！」

斧の様な剣の様なよく分からない形をした、円卓の騎士が一人、ランスロットが使用したとされる名剣の名を冠した物が炎斗の手に握られた。

そして叶恵はというと、

「アイス・ウェポン 氷の武器…… トリスタン・アロー 必中の氷弓」

これまた円卓の騎士、トリスタンが使用したとされる弓を氷で作り、さまざま炎斗に向けて矢を射た。必中の弓から放たれた必中の矢は一直線に炎斗へと走る。接近戦に持ち込まれたら、叶恵の勝率は絶望的になってしまう。故に、一定の距離を保ちつつ中々遠距離で矢を射続けて体力を消耗させるのがこの戦いにおいての定石であることを、叶恵は見抜いていた。そして、炎斗も。

炎斗は炎で形成したアロンドイトを回転させ、氷の矢を弾きながら叶恵へ徐々に接近して行った。勿論叶恵がそれを許す筈も無く、矢の連射弾数を増やし、更に多くの矢を一度に射る。そんなやり取りがどれだけ続いただろう。炎斗と叶恵の魔力が底をつきかけているのは明らかだった。

「霜月先生…… もう魔力、残って無いんでしょう？」

「あら、お互い様だと思うけど？」

笑顔を作っではいるものの、叶恵と炎斗の両名に余裕は無かった。

「次で…… 決める！」

第十三局〈それぞれの信念〉（後書き）

どうでしたでしょうか。感想あればお待ちします。

第十四局ゝ勉強daysゝ（前書き）

何か趣旨が分からなくなってきました（汗）
ではどうぞ

第十四局 勉強 days

「ちょっと待ったあー！」

突如として二人の間に割って入ったのは他でもない、二年>女王クイーンく、時皇子時雨だ。しまった、といった表情で頭を抱えている。当初の目的である“霜月先生に感づかれる前に”が、既に崩れ去ってしまった後となつては、頭を抱えずにはいらなかったのだ。

（あっちゃあ。間に合わなかったみたい。霜月先生は“こういう”にやたらと鋭いんだよね。まあ、“そっち方面”に鋭すぎるせいで、春が来ないのは致し方ないで済ませられる事じゃないんだけど）

「時雨、あなた今失礼な事考えてたんじゃなくって？」

「霜月先生……凶星の様ですね」

“何の事かしら？”と全てを凍てつかせかねない極寒の笑みを浮かべた叶恵とはうって変わり、こちらは透かした笑みを顔表に作る炎斗。どうやら春が来ないというのは時雨がでっ上げた冗談でも何でも無く、純粋な真実ということになるのだろう。

しかし、先程まで叶恵と炎斗の間にあつた敵対意識は何処へ消え失せたのやら、教室は何事も無かつたような平和的な空気に戻されていた。二人の手にしていたアロンドイトとトリスタン・アローはいつの間にか消え失せている。時雨の手によって事態は收拾されたが、後始末は必要だ。二人の繰り広げた戦闘によって、机がひっくり返るわ壁が碎けるわで教室は半壊滅状態にある。

他の先生が気付かなかつたのが奇跡と言える程のぶっ壊れっぷり。

「早く片付けて下さいよ？そろそろ始まりますからね……“アレ”が。教室が使えなかったら受けようがありませんよ」

「確かに……私も早く作らなくちゃいけないし。炎斗、今日はごめんなさいね。少々焦ってたみたい。私が悪かったわ」

雪の様に白い手をヒラヒラと振りながら自慢の銀髪を揺らし、叶恵は職員室へと続く廊下をゆっくりとした足取りで歩いて行く。自分の否を認めながらも、それをもって話を終わりにしてしまう、何というか、大人な対応だった。無人の教室に残ったのは炎斗……のみ。

「ん？霜月先生……あの教師め……上手い具合に片付け回避したな？時雨も……居ない。ハメられた、か……仕方無い、一人でやるう」

炎斗はいそいそと教室の掃除用具入れから帚とちりとりを取り出していつ終わるとも知れない片付けを始めた。この光景だけを見れば炎斗には手伝ってくれる友達が居ないと思われがちだが、そういう訳では無いのであしからず。

「中間テスト？」

「そう！この学園において、実践演習、文化祭と並ぶ重要行事……それがテストなのよ！」

と、決して大きいとは言えないが小さくもない胸を張り、その胸の前で拳を握り締めた科世の力説を、俺こと明星神夜を含めた悠聖、

終冴、トーマの四人は登校して朝一番に聞かされていた。いや、どこの学校もそうだと思つのだが……。流石に実践演習は無いにせよ、テストを軽視、つまり蔑ろにする学校など聞いた事が有りませんので。科世さん、テストは確かに重要行事でありますよ？

だがしかあし！テストなんて人生に差したる意味を持ちはしないのだ！俺は中学の時にそれを学んでいる。とりあえず勉強して、満足のいく点数をとれば誰も文句は言わない、言われぬ、言わせない！

「で、科世……俺達にどうしろと？」

「勉強全然分かんない！神夜あ、悠聖え、終冴あ、トーマア！誰でも良いから教えてえ！」

……………は？

この俺に勉強を教えて、だと？バカ言っちゃいけない。明星神夜が勉強出来る奴だと思つていたのか？そうだとしたら科世、お前の目は節穴だぞ。見た目からして勉強嫌いそうな顔してるだろ？つて顔で其処まで判断出来る奴なんて居ないか。

「聞くな俺じゃなくて悠聖かトーマだな」

「ちょっと待て神夜くうん、何故俺が入っていないのだい？」

「じゃあ終冴君、問題です。水を電気分解したら何と何が出来るでしょうか」

「夢と希望」

ほらバカだ。生粋のバカだ。天性のバカだ。クラスのみんなコケ

てるぞ。トーマ以外な。電気分解つー科学的な要因で夢や希望なんてそんな非科学的な物が出来るわけ無いだろバカ。このバカ。お前に教わってたら勉強しないよりも悪い結果に成るのは誰の目から見ても明らかなんだよ。

「終冴よ……真面目に成られよ。さすれば、学力も自然に付いてくるだろうて」

口調が江戸時代風になってしまう俺。バカなこの友達を哀れんでいるのだろうな。哀れんでも何も進展しない事など分かっている。だが、哀れまずには居られなかった。水の電気分解が夢と希望なんて、『自分の名前も漢字で書けない』クラスのアホさだ。バカ丸出しの友達を嘲りたいわけでは無いが、誰だって苦笑くらいは沸いてくるだろう。小学生並みの解答例しか頭にインプットされていない様子の終冴君。あのおバカ解答を冗談拔きの真面目顔で言うのだから更にたちが悪い。確かに真面目に成れとは言ったが、有らぬ方向に向かって行っでは意味が無いではないか。

「終冴、ふざけてるのか？こんなの俺にだって分かるぞ」

まあ中学生レベルの簡単な問題を悠聖が間違うとはとても思えないからな。悠聖、終冴に正しい答えを教えてやってくれ。

「じゃあ何だよ悠聖。言ってみろ、水を電気分解すると出来る物」

「愛と勇氣！」

悠聖もバカだったあああああああ！今度はトーマまでコケてる！

何だよ語尾の『！』マークは！そんなに自信があったのか！？あ

あ！？

お前はアンパ○マンですか！？何だよ愛と勇気って！終冴の解答とレベルが寸分違すんぶんだがってねえじゃねえか！もついい加減にしろ！

「ぐっ……まさか……これ程とは……」

膝をつき、強敵と戦った後みたいな台詞を言ってしまったっている俺の目の前で、涼しそうな顔をしている悠聖。

何というか、もう溜め息しか出ないのだが、それも無理ない。

終冴は分かるとして、まさかもまさか、あの城ヶ崎悠聖にまでバ力解答を喰らわされる事になるうとは、俺を含めトーマや科世だつて予想だにしなかった筈だからだ。トーマ、同情の目で俺を見るくらいなら、この場所を変わってくれ。

「水素と酸素。この二つだ。分かったか？バ力野郎共」

不意の声はトーマのものではない。声の主を捜して後ろを振り返る。其処に居たのは、

「あ、暗鬼さん！」

「よう、お前ら」

218の長身、いや超身を誇る二年<王<キング、疑心暗鬼さんだった。相変わらずデカいなあ……。見上げなきゃ顔が目視出来ない。

「神夜、この人は？」

「そついえば、トーマにはまだ紹介してなかったな。こちら二年<王<キングの疑心暗鬼さん。最近知り合っただんだ」

「よろしくな」

「え……疑心暗鬼って、『掟破り（アンチルール）』の……？」

お、トーマも暗鬼さんを知っているのか。『掟破り（アンチルール）』、疑心暗鬼の名はこの日本だけでなく、世界にも知れ渡っている様だ。フランスに居たトーマが暗鬼さんを知っている事からもそれは分かる。しかし、学園最強という称号が世界にまで轟くものなのだろうか。とてもそうは思えないが、今は触れないでおこう。『直に答えは出てくる』、そんな気がしたからだ。

「まあ、世間一般じゃそう呼ばれてる。それよりも、その金髪に翡翠の瞳……オーフェンリル家の人間だな？」

オーフェンリル家……：そういう聞いた事がある。代々氷使いの家系がフランスに居を構えてるって。それがトーマの家だったのか。オーフェンリルと聞いて気付かなかった俺は何なんだ。親友なのに。

「トーマ・オーフェンリルです。俺はこの名前、あまり好きじゃないんですけど」

「ねえー！テスト勉強の話は？」

見事な横入りを決めたのは、空気の読めなさなら世界最高峰の我らが女王^{クイーン}く白状科世だ。ああ、そんな話してたっけな。

「勉強なら俺が教えてやるよ」

「え？暗鬼さんが？」

「これでも二年>王^{キング}<トップの成績だからな。少しくらい役に立てるだろ？」

うわあ……この人、本物の完璧人間だ。顔も良くて学園最強。それに加えてこの学園において最高のクラスである>王^{キング}<のトップと来た。もし同じクラスだったなら、張り合つのもバカバカしく思えてくる。それ程の別次元を、この男は生きているらしい。

しかし別次元とはいえ、同じ人間。教えてもらえるならば素直に受け取るのが礼儀というものだ。

「ではお願いします。暗鬼さん」

「分かった。なら放課後、寮の神夜の部屋に全員集合だ」

と言うと、暗鬼さんはさっさと教室を出て行った。って暗鬼さん、俺の部屋知ってるのか？知ってるから俺の部屋に場所指定をしたのだろうが、俺には暗鬼さんに場所を教えた記憶が無かった。

放課後。

それは、学校という呪縛から解き放たれた生徒達が思い思いの行動をとることの出来る時間だ。大抵は遊びに行くか部活だろう。

しかし、今日の学園は違っていた。皆さん寮の自室に籠もってテストに向けての勉強をしている。かくゆう俺も……

「おーい神夜あー、何か食い物」

「はいただいまー……ってちがあああうー！」

勉強出来ている、とは言い難い状況だった。何故勉強を教えるという名目で俺の部屋へとやってきた暗鬼さんに食い物を出さにやらんのですか！

俺は持っていたポテチを床に叩きつけて叫んでいた。

ん？ああ！俺のポテチがああ！せつかくとしておいた限定のコーラ味なのに。まったく、人間というものはどうしてこうも他の品と品を合わせようとするのだろうか。ポテチのコーラ味なんて誰が見ても旨そうとは思わない。分かっているがそれを買ってしまった俺は何なのだろう。どうも『コーラ』、この文字には適わない。それだけ、俺はコーラに心酔しているのだろうな。

「何だよ？今のお前に必要な教科の問題は全て此処に揃ってるっつーの」

と、いつの間にそんな事を調べたのやら、机に積み上げられた問題集を指し示す暗鬼さん。俺はコーラ味のポテチを口に運びながら問題集に目をやった。お、結構イケるなこれ。人の味覚もまだまだ捨てたものでは無いということが。

「おら神夜、食ってる場合じゃねえぞ？」

あんたが持つて来いって言ったんでしょ。俺に否は無い。

「はあ……仕方無い、やります、か」

いやいやながらも問題集を開こうとした矢先、

「神夜あー！みんな来ったよあー！」

科世が悠聖、終冴、トーマを連れ、慌ただしく参上した。

むう……これは少々部屋が狭くなりはいしないだろうか？一部屋に六人は流石に厳しいと思われる。ここが集団滞在に適した温泉旅館か何かだったら六人くらい余裕で入り、場所を持て余すだろう。しかし、ここは国立捨て駒学園の学生寮。さらには明星神夜という一生徒が使っている自室にすぎない。六人を入れるスペースなぞ無いに等しいと思っていた。が、

「まだスペース空いてるな？よし、勉強すつぞぉー！」

終冴が意気揚々と教科書を広げ、ノートにペンを走らせ始めた。六人が入っているというのに、流石は国立学校の寮と言うべきか、後三人は入っても問題無い広さを残している。よくよく考えてみたら、元々二人部屋、広くて当然だ。ルームメイトは居ないのだろうか。来た時も、俺一人だったし。

「神夜、どうした？」

「いえ、ルームメイトって、居ないのかな……と」

「大丈夫さ。ルームメイトなんか居なくなつて、仲間おれたちが居るだろ？同じ場所に存在してなくても、心は繋がってるんだよ」

笑顔で言う暗鬼さんの後ろで、騒ぎながらも互いに教え合って勉強をしている悠聖、終冴、トーマ、科世の四人。

きっと俺は辛気臭い顔に戻っていたんだろうな。寂しくて、悲しくて、誰か隣に居て欲しかった、繋がりを欲していた中学校時代の孤独だった俺の顔に。だが、もうその心配は無い。暗鬼さんが気付かせてくれた。教えてくれた。

友情は不滅であると同時に不変である、と。

当たり前の事。一度築き上げられた友情は簡単には壊れない。そこには信用を越えた信頼が生まれていて、気付けば必然的に周りは友情という一感情の下に集まった奴らで埋め尽くされていくのだ。

「俺は…… 案外幸せ者かもしれない」

「あ？何だつて？」

「何でもありませんよ。さて、先ずは数学からやりますか……………」
暗鬼さん、ここの問題なんですけど」

「ああ、そこはこの公式を使うんだ」

「暗鬼さ〜ん。今度は私〜！」

「科世もか………… 一体、どこが分からねえんだ？」

………… テスト勉強も、たまには、悪く………… 無いな。

第十五局　前夜祭

全ての教育機関には、勉強の成果を、つまり勤勉さを測定するためのテストが存在している。

この捨て駒学園も例外ではなく、四教科、つまり国語、数学、英語、理科の基礎教科に加えて魔法学なるものが実施されるらしい。
魔法陣作成や術式、詠唱、言霊などの、魔法使用において必要な専門的知識を学ぶのが魔法学。まあ、一般人や能力者には無縁の教科だ。

しかも、この魔法学は捨て駒学園と他の2校でしか実施されていない特別な教科だと聞いたことがある。これは沈黙先生からの受け折り。

この魔法学を加え、合計五教科のテストとなるわけだが、何しろここは日本屈指の難度を誇る捨て駒学園。この学園のレベルが桁違いに高いために“五教科だけ”ではなく“五教科も”という表現に移行してしまう。

俺にとっては、一教科だけでも困難だというのに、五教科なぞもう地獄の領域に踏み込むこと間違いないだ。

中学までは魔法学ではなく、社会という易しい名前の教科があったものだが、いつの間にか絶滅したらしく社会の教科は消え失せていた。この学園に社会は必要無いという事だろうか。まあ尤も、社会なんて小学生が使うような呼称だ。中学になると算数から数学へレベルアップする様に、理科も化学、物理、生物学と分けられる。しかし、レベルアップするどころか抹消されたとあっては、勉強のしようが無いのだ。

悔しい。非常に悔しい。俺の得意な教科は社会、特に歴史だった。中学時代、常に社会の成績はトップだったのだが、社会が消え失せた今、俺の得意教科は無いに等しかった。まあ、その為に暗鬼さん

から勉強を教えて貰ったわけだし、何とかなるだろう。
もしこれで“すみません。赤点だらけでした”では暗鬼さんに殺されはしないだろうか。

「後どれくらいだ？」

「ん、今半分くらいだな」

俺は今、自分の勉強時間を返上して、終冴のノート写しに付き合っている。勿論、終冴が写しているのは俺のノートだ。

というのも、沈黙先生の授業の時に終冴が居眠りをしていてノートをとり損ねた事が原因なのだが。俺か？それは愚問というやつだ。俺が沈黙先生の授業で居眠りなどするはずが無からう！

付き合っているとは言ったものの、実際のところは『監視役』だ。本当は嫌で嫌で仕方無かったのだが、沈黙先生に頼まれては断れない。

「終冴、テストって何時からだ？」

「明日だ。明日の一、二時限目にテストがあつて、そこから放課後。次の日の三時限目まででテストは終了。こんな感じだ」

「ふうん……」

水床終冴。こいつはバカなのだが、そんな事だけはしっかりと覚えていいる。それだけ記憶力がよろしくて何故点数が採れないんだ？

「そんな事より神夜、今からこっそり脱け出して、ゲー……あだっ！」

終冴の頭に正義の審判という名の出席簿が振り落とされた。しかも角。あれって地味に痛いんだよねえ。投下したのは我らが担任、さきむらしずか咲群沈黙先生だ。

終冴が良からぬ事を言う前に止めに戻って来たらしい。可笑しいな。さつきまで居なかったのに。何処から現れたのだろう。

その表情はいつも通り、引くほど綺麗な笑顔なのだが、

「終冴くうん？ゲー、何かな？その続きを言ってみてえ？」

目が笑ってない。背後に魔王が見えます。幻覚でありますように。

「ゲ、ゲーセン」

「はあい、ゲームオーバー」

終冴にまた出席簿の角が飛んできた。今度は正義の審判等という生易しいものではなく、裁きの鉄槌。終冴の体が冷たい床上で横倒しになり、めり込んでしまっている。出席簿の角で頭を一日二回、しかも殆ど間を入れずに殴られた終冴は流石に懲りたのか、もう何も言おうとしないし、起き上がるうともしない。

心が折れたのか、はたまた骨が折れたのか、それは終冴に聞かないと分からない事である。

「終冴……大丈夫か？」

「全……然……」

床にめり込んだまま発声する終冴。

まあそうだろうな。100%お前が悪い。自業自得ってやつだ。早く終冴を起こしてノート写しを続行させよう。先生にも何か教え

て貰えるかもしれない。

「先生、ここを……ってあれ？沈黙先生？」

教室には俺と終冴の二人しか残っておらず、先程まで居たはずの沈黙先生の姿は何処にもなかった。突然現れたと思ったら、忽然と消え失せた沈黙先生。

これは……いや、まさかな。

「なあ終冴……続き、どうする？」

「へっ……勿論、やる……さ……」

終冴は床から顔を引つ剥がすと、机に向かい、俺のノートとにらめっこを再開した。

（もう少し付き合ってやるとするか。どうせ終冴が終わるまで帰れないわけだしな）

俺は椅子に座り直し、携帯電話を取り出す。時刻は……午後4時44分を差していた。

- 昔、誰かに「お前にとって力とは何だ」って質問されたことがあったっけな。誰から質問されたかなんて覚えちゃいねえ。殺した奴の顔をいちいち覚えてられる程、俺の頭の容量はデカくねえからな。

ただ、俺に言わせるなら、力は『酷なもの』だ。
力を持たねえ奴は力を持つ奴を疎み、力を持つてる奴は力を持た

ねえ奴の気持ちが分からなくなる。最初は力が無かった奴が何らかの切欠で力を手に入れても同じことになるのは明らか。強者には弱者の心が分からねえらしい。それがスパイラルと成り永遠に続いて、今に至ったんだと聞いた。俺には力が有る。

けど、力のねえ奴の気持ちが何故だか痛いほど良く分かっちゃう。だから俺は力を持たねえ奴は殺さねえし、傷付けたりもしねえ。その理由は俺にも分かんねえんだ。ただ、力のある事に優越感を覚えて弱者を見下す強者が許せねえのは確かなんだよな。可笑しな話だろ？力を持つ奴が力を持つ奴を許せねえなんて -

東京の夜の姿。それは、一晚を通して消えることのない光と、行き交う人々によって創られる光り輝く街。そんな中、人通りが全くといって良い程無い深暗の路地裏。

「おい五木^{いづき}！何なんだあいつは！」

「分からん……銃が効かないなんて、そんな奴は疑心暗鬼だけだとは思っていたが……まだまだ知らない事の方が多い、ということかな？」

その路地裏を何かから逃げるようにして走り続ける二人の男。表情はどちらも焦っていることに関しては大差ないが、片方はこの世の終わりのごとく取り乱し、もう片方、五木は冷静に状況を分析中だ。

「ちょっと待てつつうんだよ。捨て駒学園は何処だつて聞いたただけだろうが。何も銃ぶつ放して逃げ出すたあねえだろう？なあ？」

二人の後ろから聞こえてきた声。荒くれ口調で、聞くだけで近付き難くなる声質。声の正体は一人の青年。

暗くて良くは見えないが、二人の目は確かに一人の青年と呼ぶに相応しい人物の姿を捉えていた。路地裏のアスファルトを滑る様にして移動している青年。まるでスケートだ。しかも、体はぶれずにしっかりと足が地を掴んでいる。

「あいつ、滑ってるのか？」

「と、とにかく、このままじゃ追い付かれる！」

二人は懷に忍ばせてある銃を再び抜き放つと、お構いなしに発砲する。しかし、弾丸は青年に届く直前で威力を失い、無様に落下する。

青年は口の端を吊り上げ、嘲笑した。例えるならそう、全てを見下す悪魔の様な笑みだ。

「クツクツクツクツ、アッハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！　なあ、お前等つて学習能力無いわけ？一回やつてダメならもう無駄な発砲ことはすんじゃないやねえよ。それとも何か？大の大人が『最後まで諦めない』とか勇者様気取りの台詞でも吐いてみるつもりですかあ？止めてくれ、反吐が出るぜ」

青年は一旦止まると、掌で地面を触る。その瞬間、二人は転倒して起き上がれなくなった。地面が自分達を拒絶している様な感覚に襲われる。

「起き……上がれない、だど？氷室、お前もか……」

「どうなってんだよ！？こりゃあ！」

必死に立ち上がろうともがく無様な五木と氷室に、青年は無表情でゆっくりと距離を詰めてゆく。

「ひいつ！」

「何者だ……お前は」

「あ？俺か？悪いが名乗る程良い名前は持ち合わせちゃいねえもんでな。もう一度聞く。捨て駒学園は、何処に在るんだ？」

青年は小型ナイフを取り出すと、氷室の頬にヒタリと冷たい刃を押し当てた。

「俺は弱え奴の命奪うのが大嫌いなんだ。なあ、殺さなくても良いように教えてくれねえかな？氷室さん？」

そして今度は、ナイフを心臓の在る辺りの前へと持っていていき、徐々に切っ先を胸へ押し当てていく。

「ひつ……や、止めてくれえ！」

「ほらほらあ、急がないと死んじまうぜえ？さあ、捨て駒学園は何処にあるんだあ？」

「その手を退ける！刀魂！炎の尖剣！」
ソード・スピリットクレール

五木が、しなやかで美しい刀身を持つ、オリヴィエ卿の刀剣を炎で創り出し、うつ伏せの状態で青年の背後から足を水平に斬りつける。しかし、その刃はまたも青年に届く寸前でピタリと止められた。

「くっ！何故当たらない！」

「へえ、炎精霊か……でも、中級魔法使いじゃ俺には勝てねえよ。
じゃあな」

青年はオートクレールの柄を蹴って弾き飛ばすと、片膝を地面に突き、ナイフを五木の心臓に突き立て、刃先を捻り心臓に空気を入れながら抜き去る。そして抜き去ると同時に立ち上がった。

「……！」

五木は硬直して動かなくなり、うつ伏せの状態で絶命した。ナイフが抜かれた胸からは生暖かな鮮血が漏れだし、アスファルトを濡らす。

痛みを感じる暇さえ与えないショック死。一体何処でそんな殺人法を覚えたのか、はたまた偶然か。

肉塊となった五木を見下ろす青年の眼差しは冷たくも見え、悲しくも見えた。

「五木、だっけか？あんたは強えよ。俺なんかよりもよっぽどな。おい、ピーピー五月蠅い兄ちゃん、この人、ちゃんと弔つてくれよ」

「……ああ……分かった」

先程まで騒いでいた氷室は、それが嘘のよう。

相棒の意志を継いだ様に恐ろしく冷静になり、既に物体と化している五木を抱き抱えると闇へ消えていった。氷室が青年に攻撃を仕掛けなかったのは、自分では適わないと分かっていたからこそその行動だろう。

「なあ、お前が俺にしょっちゅう言ってただろ？冷静に成れって。

ほら、俺は冷静に成れたぞ。その姿も見ないで逝きやがって……待
つてろ。必ず“生き返らせて”やるからな」

氷室の最後の一言を聞いている者は、居なかった。

「転入するのは良いが、場所も教えて貰えねえんじやどうしようも
ねえな。全く、何で殺しちまったんだろうな。放っておけば良かつ
たんじゃねえのか？……いや、違うな。あの五木って野郎は力
を持ってた。能力者には劣っていても、中級魔法を使いこなす炎精
霊^{リッター}。殺しても問題無かった筈だ……」

- あいつにも家族は居たはずだ。俺が自分に言い聞かせる様に言
葉を並べているのは、その家族からあいつを奪ってしまった現実か
ら逃げてえだけなのかもしれねえ。だが、もう遅い。やっちまった
事をリセットすることなんざ出来はしねえんだ。人生にはリセット
ボタンがある。しかし、それはあくまで過去の自分を見つめ直し、
今後の人生を新たにスタートさせるための切欠に過ぎねえ……時間
は戻らない。本当の意味で“やり直す”、“RESTART”なん
ざ不可能。『俺が人を殺した』これは一生俺について回る。それな
ら俺は一生、その罪を背負って生きるだけだ。そう……一生、な-

「後、三週間……さあて、楽しみだぜ……明星神夜か。どんな奴な
んだろうなあ」

第十五局 前夜祭 (後書き)

次回こそはテストに入れるように頑張ります。

第十六局　〱混沌の放課後（カオス・アフター）〱（前書き）

またまた神夜君の過去の話です
ではどうぞ

第十六局　混沌の放課後（カオス・アフター）

勉強とは、ただ単に書いて覚えるものではない。それだけで成績が上がるなら誰も苦労はしないし、必死に勉強する必要も無くなる。一度やった事を何度も反復して頭に叩き込む。これが必勝法らしい。少なくとも、俺はそう教わった。しかしながら、俺はその必勝法とやらを一度としてやり切った事は無く、中盤止まりの半端な成績で中学校生活を終えたのである。

俺は今、そんな過去を引きずって勉強に励めない今の状態を打破すべく暗鬼さんから勉強を習っているところだ。

暗鬼さんの勉強時間を奪いはしないだろうかと心配だったが、その心配は杞憂に終わった。暗鬼さんは二年^{キング}王^のトップ。これだけでも他の説明は要らないだろう。その暗鬼さんと二人で勉強会の真^まっ最中。勿論、場所は俺の部屋。悠聖達は後から来るそうだが、差し入れを持ってくると言っていたことから、真面目にやるつもりかどうか判断しかねる。

「そついえば暗鬼さん……聞きそびれてたんですけど」

「ん？」

「以前俺を襲った奴って、誰だったんですか？」

「ああ……そのことか」

何だか神妙な空気になってしまった。マズい事聞いたかな？ いや、俺が襲われたんだから俺にこそ関係があるはずだ。それに、聞かないと胸のモヤモヤが晴れない。

「神夜、お前……学園自治団は知ってるよな」

「まあ、多少は」

学園自治団と言えば、学園の治安を守るために結成されたチームだ。優秀な魔法使いや能力者を募って築き上げられてきた、正に精鋭部隊。この学園に在籍する生徒で、その存在を知らぬ者は居ない。それくらい有名な組織である。

それにしても、何故学園自治団の名前が出て来るんだ？

「その学園自治団、オーディン・ストライク主神の一撃の一人がお前を危険な存在だと言つてやがったんだ。何か心当たり、無いか？」

「いえ、全然……」

危険な存在？

俺には全く心当たりの無い事だった。そもそも、自分が危険視される様な事を進んでやる筈がない。もしやる奴が居るとすれば、それは暇を持て余した目立ちたがり屋か、学園中を敵に回しても高笑いを決め込んでいそうな無謀バカくらいだ。少なくとも頭のネジはしっかりととはまっているし、そんなぶっ飛んだ騒動を起こす程壊れていない。

そして、最近忙しい。入学してからというもの、暇など有る時の方が珍しい状況だった。

入学式、鐘騎や暗鬼さん、緋狩との実践演習、科世の買い物（ある意味一番きつかった）にテストと、追い討ちをかける様に行事が積み重なっては、暇を見つける暇さえ無いのだ。

「お前がそう言うなら、そうなんだろうな。さてと、話は終わり。勉強の続きだ」

「そうですね」

俺と暗鬼さんは再び机に向かった。ノートにペンを走らせようとした正にその時、何処かでガラスの割れるような音が寮中に響く。耳障りな程の割音。思わず耳を塞ぎたくなつたのは俺だけではないはずだ。そんな中、暗鬼さんだけは楽しそうに口の端を吊り上げていた。

「そおら、早速おいでなすつたみたいだぜ？」

「まさか、さっき言つてた主神の一撃の！？」
オーディン・ストライク

「多分な」

（炎斗の野郎じゃねえだろうな……先輩だからって忠告を聞かねえならまた追い返してやる）

真つ先に俺の部屋のドアを蹴破つて廊下へ飛び出した暗鬼さん。お願いだから普通に開けてほしかった。ああ、ドアが粉々だよ。これからは自動ドアにしてもらおうか。

暗鬼さんに続いて飛び出した寮の廊下には案の定、割れて飛び散つた窓ガラスの破片が散乱しており、足の踏み場も無いくらいだった。外から侵入したのだろうが、廊下に人影は見えない。ついでに暗鬼さんも居なくなっていた。

俺はその破片の一つを拾い上げてみる。

「この破片……濡れてる……ってことは、水使いか」

そこまで言つて俺は妙な事に気がついた。

廊下には誰も居ない。この場合なら、誰かが音に驚いて様子を確認するために自室から出て来ていたとしても、何の違和感も無かつただろう。寧ろそれが普通だ。まだ時間は午後九時。テストを明日に控えたこの状況で寝る奴など居ない筈。意図的に寝ていないとすれば、

「眠らされた……？」

誰が？

何のために？

どうやって？

俺だけが出て来る様に仕向けた理由は？

何故俺だけ？

試行錯誤してみたものの、一向に答えは出て来ない。ただ時間だけが過ぎていく。

「惜しいね。眠らせたわけじゃないんだ」

唐突に響く無邪気な声。人懐っこいその声質は、聞く者を魅了する清廉さを内包していた。聞き覚えのある、とても綺麗な声だった。俺は恐る恐る顔を上げるが、

「なっ！」

目があった途端、その人物を直視出来なくなつた。直ぐに視線を逸らし、そいつの顔を見ない様にする。出来れば見間違いであつて欲しい、とても信じ難い光景。本来ならこんな所に居るはずの無いその人。

俺は嫌な考えを意識の外へ閉め出そうと試みたが、無駄だった。

一度見てしまつたら、認識してしまつたら、現実を突き付けられるからだ。忘れようにも忘れられない、忘れられる筈がない、誰よりも見慣れた顔を。しかし先程も言つたように、目の前の光景を未だに信じられない。

「久し振りね。あの日以来かしら」

「誰だ……お前は」

「誰つて……あなたの姉、時皇子時雨でしょ？神夜、頭の方、大丈夫？」

「……何で、此処に居る……？」

「そりゃあ、私もこの学園の生徒だからよ」

「そんな事はどうでも良い！俺が言いたいのは、何で“この世に”居るのかつて事だ！あんたは……」

数日前、科世にこんな質問をされた。

「ねえ、神夜つて中学校では相当の不良だつたつて聞いたんだけど」

「ああ、まあな」

「そこまで不良^{ワル}かつたのに、今じゃすっかり丸くなって学校に通つてるわけだ。何があつたの？」

「……約束、したんだよ」

「へえ……誰と？」

「俺の……姉と、な」

中学二年生までの俺は誰も近寄らない程の不良だった。学校には遅刻が当たり前。授業に出た回数は数えるほど。そんな生活を送る血統書付きの悪ガキ。言ってしまったえば、ろくでもない学生だったのだ。高校入学なんぞ、考えられなかった。

度々問題を起こしては停学処分を喰らい、家に居たくなくて抜け出す。その繰り返し。別に学校が嫌いという訳では無かった。

ただ、全てにおいて無気力だったのだ。それが原因で両親とも余り仲良くはないし、友達も居なかった。繋がりを求めているのに、それに気付かないで自分から離れていく様な愚者で、話し相手といえば、幼馴染みの咲群緋狩くらのもの。そんな中、俺の義理の姉、時皇子時雨だけは俺を愛してくれた。義理という表現を使うのは、本当の姉では無いからだ。

話は、幼くして両親を亡くした時雨を俺の両親が引き取って育てた事から始まる。

歳は俺より一つ上で血はつながっていないものの、俺と義姉^{ねえ}さんはとても仲が良かったらしい。中学校に入ってもその関係は変わらず、俺が家に居ないと何処までだろうと、いくら時間が掛かろうと探しに来てくれた。そして、優しく抱き締めてくれた。目尻に一杯の涙を溜めて。

「神夜……無事で良かった……もう、帰ろう？ね？」

俺はそんな義姉^{ねえ}さんが好きだった。全てを失っても構わないから、義姉^{ねえ}さんだけは隣に居て欲しいと、本気で思える程に。

そんな義姉ねえさんのおかげで学校も好きでいられた。そう……世間では災厄の一日として語り継がれている、

『カオス・アフター
混沌の放課後』

あの日が来るまでは……。

俺は授業に出るのが面倒でその日は学校へ遅刻して行くことにした。当時の俺にとっては日常茶飯事であるから別にどうとも思わなかったが、その日は義姉ねえさんと一緒に遅刻したのだ。時間的には二時限目の真っ最中といったところか。

「珍しいな……義姉ねえさんが遅刻なんて」

「常習犯に言われたくないわよ」

笑顔でそう言われ、目を指で突かれた。

「おわああああ！」

「ごめん、痛かった？」

「当たり前だ！失明させる気かあんだ！」

「だからごめんって」

こうやって話が出るのは嬉しかったが、いつもなら遅刻など絶対にしない義姉ねえさんが遅刻している。俺は言い知れない不安を胸に抱き、その不安に呼応する様に暗雲が空を覆っていた。突かれてまだ若干の痛みが残る目を押さえながら教室を目指したのを覚えてい

る。

結局その不安が晴れないまま、放課後に。

俺は校門で義姉^{ねえ}さんを待っていた。一緒に帰るためだ。いつもなら一人か、不良になっても気軽に声をかけてくれる幼馴染みの緋狩と帰っている。

不安を紛らわすために一刻も早く学校から離れたかったのかもしれないが、義姉^{ねえ}さんを学校に置いておきたくない。これが一番の理由だった。授業は午前中だけ出て後はサボリといういつものパターンを決め込んだ。

あらかじめ約束はしてあったから、後は義姉^{ねえ}さんが来るのを待つだけ。

「学校…… かったりい。いずれ滅ぼしてやろうか……… まあ、間違ひなく全力で止められるよな」

などと危険な思想を巡らせていると、此方に駆けて来る女生徒が一人。義姉^{ねえ}さんだ。格好や衣服類に違和感があるわけではない。一つ気になるとするならば、この世の終わりみたいな、焦りまくりの表情をしているという事。

“ 血相を変えて ” が一番しつくりくる表現だろう。今までそんな表情の義姉^{ねえ}さんを見たことが無かった俺は呆氣にとられて立ち尽くした。

立ち尽くしたことを後悔することに成るとも知らずに。

「神夜！逃げて早く！この学校から離れるの！」

俺は義姉^{ねえ}さんの言葉を理解するのに、少しばかりの時間を要した。

義姉^{ねえ}さんが何故そんな事を言うのか検討もつかない。

義姉^{ねえ}さんがあんな表情で冗談を吐くとはとても考えにくい。クラスの優等生で常に上位に君臨し、俺なんかとは比べものにならない位の秀才である。不良の俺が言うのもなんだが、少なからず懂れていた。

「えっ……逃げろって、何故だ？」

「今、この学校は……！」

言いかけた義姉^{ねえ}さんの背後からキラツと鈍い光を放って飛んでくる無数の物体。かなり広範囲に展開されて飛来するその物体は俺と義姉^{ねえ}さんだけを仕留めるには十分過ぎるものだった。数は目測出来る限りでは百とちよつと。恐らく刃物の類だろう。

逃げなければいけないのに、足が動かない。まるで金縛りにでもあつたかの様に、足が地面に縫い付けられたかの様に、足が地面から離れなかった。

「神夜あー！」

義姉^{ねえ}さんが叫ぶと同時に目の前の景色が急速なスピードで流れていき、空が目に残まると同時に景色の流れが停止する。

そして、俺の上には義姉^{ねえ}さんが覆いかぶさる様に横たわっていた。その背中には数本の……槍。何故か澄んだ水色で透き通っていて、冷たかった。

「義姉^{ねえ}……さん？」

俺は義姉^{ねえ}さんの背中に回した手を見つめた。真紅の血で染められた、血生臭い真つ赤な手。指と指を合わせて放す度に感じる、ねち

やつとした嫌な感触。

「神……夜……無事で、良かった」

血に濡れた指で、俺の頬を優しく撫でながら、今にも消え入りそうな声で義姉^{ねえ}さんが言う。俺はこの時、生まれて初めて思い知らされた。自分の姉一人も守れない無力さを。

「義姉^{ねえ}さん！義姉^{ねえ}さん！しっかりしてくれ！そうだ、誰かに助けを！」

必死で義姉^{ねえ}さんの背中に刺さっている槍を抜き、仰向けに抱き起こす。

俺は分かっていた。今誰かに助けを求めたところで、この状況を打破出来るわけが無いと。けれど、どうにかして義姉^{ねえ}さんを助けたかったのだ。

義姉^{ねえ}さんは自分の命さえ投げ打って俺を守ってくれた。

それに対して俺は……俺は！何も出来ていないじゃないか！

毎日問題を起こしてばかりで、義姉^{ねえ}さんにろくな恩返しもしてやれない。助けられてばかりでいざという時に何も出来ない、そんなちっぽけで無力な存在でしか無かった。

「無駄……だよ。今この学校に居る人間の半数以上は……生きてない……から。……教師も殆ど……殺^やられてたしね」

「そんなバカな！」

「だから、逃げて……きたんじゃない」

死にかけているのにも関わらず、笑顔を保ち続ける義姉^{ねえ}さん。も

う、見ているのが辛かった。出来ることなら、このまま楽にしてやるのがせめてもの情けなのだろうか。だが、俺には出来ない。こんなにも……こんなにも大切な姉を葬ることは出来ない。出来るはずがない。俺は目を瞑る。すると、義姉^{ねえ}さんが不意に口を開いた。

「ねえ神夜……知ってた？ 私達……高校を卒業したら、結婚するの……」
「……」

突然の告白に、俺は言葉を失う。そんな事、今まで知らなかった。知らされもしなかった。こんな時に知りたくなかった。それを聞くのが高校卒業後だったらどんなに嬉しかったことだろうか。

「私は……最高に嬉しかったよ？……だって、あなたと何時までも一緒に居られると………思ったから」

俺だって同じだ。本当の姉弟では無い。それ故に、結婚したって何の問題も無い。俺も義姉^{ねえ}さんとずっと一緒に居たいのだから。周りの目など、どうだって良い。どれだけバカにされようと構わないから、義姉^{ねえ}さんの傍に居てやりたい。

それが、全てに興味を無くした俺の唯一の願い。自分が愛した女性を幸せに出来る、唯一の方法だと思っていた。

「でも、神様って……残酷だよ。こんなところで邪魔………するんだから。運命に……抗う暇さえ………くれない」

「それは違う！」

「……え？」

「まだ終わってない！義姉ねえさんの人生はまだ始まったばかりじゃないか！諦めちゃ駄目だ！抗う暇も与えない、そんな卑劣な神なら、俺いつしよが排除してやる！だから義姉ねえさん……諦めないで。神に勝って、夫婦いっしょになろう」

俺ねえはそう言いながら義姉ねえさんの手を取り、ぎゅっと握り締めた。義姉ねえさんも弱々しい力で握り返してくる。しかし、その手には体温と呼べるものが無い様に感じた。冷たい。とても冷たかった。

「ね、義姉ねえさん！？」

「ごめん……なさい。私はやっぱり……神には逆らえない……みたい……。神夜、最期に……一つだけ約束して？」

「嫌だ……約束なら何時でも出来る。また二人で居れば……」

「お願い……だから」

訴えかける様なその眼差しに、俺はまたしても言葉を失った。

「学校を……嫌わないで」

「！」

それは、俺が今一番言われたくなかった事。大切な人を奪われた最悪の場所をどうやって嫌わずに居ると言っのだろうか。好きでいると言わなかったのには義姉ねえさんなりの配慮が有ったことだろうが、俺には到底無理な話だ。しかし、

「無理なお願いなのは……分かってる……でも、私との思い出が……少しでも在るなら……」

此処まで言われては、もう何も言えない。

「……分かった……努力してみる」

動転している気を必死で制御すると、俺は静かにもう一度、義姉ねえさんの手を握りなおした。触っただけでもう手遅れだと分かる低温担いで病院まで無理矢理連れて行きでもすれば義姉ねえさんは助かったのかもしれない。

でも、義姉ねえさんはそれを望まなかった。

「神夜……」

不意に聞こえた、義姉ねえさんのものでは無い声に振り返ると、そこに立っていたのは緋狩だった。青ざめた表情で、義姉ねえさんを見つめている。

「緋狩……」

「これ……一体どうなってるの？」

どうやら緋狩は学校内で起こっていることを知らないと見える。それもそのはず、緋狩も俺ほどでは無いが学校にあまり好意を持てず、授業が終わると同時にホームルームそっこのけで帰宅する様な奴だったからだ。

俺の数少ない話し相手になり得ていたのはそういうところがあったからなのかもしれない。

「緋狩……ちゃん……神夜を連れて……此処から離れ……て」

「でも、時雨さんは……その傷……早く、病院に行った方が」

「もう、手遅れなんだ。俺が……不甲斐ないばかりに……義姉さん
んは……」

「あなたの……せいじゃない」

そう言つて、義姉さんは弱々しく上体を少しだけ起こすと、俺の唇に自分の唇を重ねる。身体は冷たいはずなのに、義姉さんの温もり全てを感じた様な気がした。

「……義姉さん……ずっと前から、一つだけ言いたい事があったんだ」

「奇遇ね……私もよ」

しばしの静寂。そして、

「「愛してる」」

声が重なり、もう一度唇を合わせる。それきり、義姉さんがその瞳を開くことは無く、それが俺、明星神夜と義姉さんの交わした最後にして最高の言葉であり、別れの挨拶だった。

事件から数日が経つても、中学生大量虐殺事件、災厄の一日『混沌の放課後』を引き起こした犯人が出てくる筈は無く、その詳細はテロリストによる無差別殺人として処理され、俺や緋狩を含む生き残り組は別の学校へと移された。義姉さんの居ない学校など行きた

くも無かったが、俺は学校へ行き続け、無事、と言えるか分からないが、とにかく卒業した。ただでさえ嫌いな学校にあの日から一日も休まず、サボりもせずに通ったのだ。誰か褒めてくれ。

そして、それを支えたのが唯一つの約束だったことは、俺と緋狩しか知らない秘密である……。

そうだ……あの人は、義姉^{ねえ}さんは、あの時に死んだ筈だ。それが何故、今この瞬間、この場所に居るのか。可能性はいくつかあるが、消去法でいくならば

「もしかして、生き返ったのか？」

突拍子も無い事を言っているのは分かっている。しかし、『死んだはずの人間が目の前に居る』

この状況を整理した時に残る選択肢がこれしか無いのもまた事実なのだ。あの時、確かに義姉^{ねえ}さんは死んだ。

それは、間近で……その……キ、キスをした俺が一番良く分かっている。

……ヤベエ、急に恥ずかしくなってきた。

「良く分かったわねえ。その通り、私は生き返ったの。ある能力者の能力によってね」

第十六局↳混沌の放課後（カオス・アフター）↳（後書き）

書いていて矛盾しているところが無いかたまに不安になります

第十七局〱二年という壁〱（前書き）

お気に入り登録してくださってる皆様、
お待たせしました。
遅くなつてすみません。

今後ともよろしく願います。

第十七局　二年という壁

「マジかよ……生き返らせるって、どんなトンデモ能力だ」

どんな能力者が出て来ても驚かない自信があつたのに、“死者を生き返らせる”なんて人の概念を超越した能力を目の当たりにしたら、その自信が崩れ去るのは時間の問題である。しかし、能力者にとってみれば、それは珍しくも何とも無いのだろうな。

「その能力から、別名『ライフ・プレイヤー生をねじ曲げる者』とも言われてるの。聞いた事無い？」

「……いや、全く」

聞くもなにも、俺は今の今までその『ライフ・プレイヤー生をねじ曲げる者』とやらを全く知らなかった。これは俺の憶測だが、その通り名の方が本名よりも知名度は高くなる。もし知っていたとしても、あだ名すら知らなかった俺が、本名を聞いたって思い出せるわけがない。それなら残るは、『顔を見る』これしかない。

だが、今は無理の様だ。

「どうしたの？神夜、顔が赤いよ？」

うつ……やけに鋭いな。

キスの事思い出して照れてる、なんて言えないよなあ。

俺は照れを誤魔化していたつもりなのだが、この人はやはり俺の姉の様で、直ぐに見抜かれてしまった。

「な、何でも無いよ……それよりも、本当に……義姉さんなんだね」

「ええ……間違いない、あなたの姉、時皇子時雨よ」

俺は自分の身体から力が抜けていくのを直に感じた。緊張の糸が切れたのだろう。膝に力が入らず、廊下にへたり込んでしまった。床に突いた手に、割れたガラスの破片がいくつか刺さったが、気にもならない。

……嘘です。ちょっと痛いです。

「神夜！どうしたの！？」

義姉さんが駆け寄ってくる。そして、二年前に俺の頬を撫でたその指で、もう一度、俺の頬を撫でてくれた。懐かしい。とても懐かしい感覚だ。

「ああ……何だか俺の体、勝手に安心したみたいでさ……力が入らないんだ」

「安心？」

「まあね……俺は今まで、義姉さんが居なくても一人でやっていこうと思ってた。実際一人でやれてたんだ。学校に通って、友達作って、勉強して、自分で飯作って……そんな当たり前がとても楽しかった。でも、やっぱり義姉さんが居ないと思うようになった。今まで俺を支えてくれたのは、義姉さんなんだ。どんな形であれ、俺の前に帰ってきてくれた。

義姉さん……おかえり」

「！」

義姉さんの目が見開かれ、その端には雫が溜まっているように見えた。それを手で覆って隠すあたり、どうも本当に泣いているらしい。

俺からそんな事を言われるとは思っていなかったらしい。常人なら気味悪がつて拒絶すること間違い無しだろうが、此処は日本の中でもブツチギリの超人達が集まる学園だ。

魔法使いや能力者を各種取り揃えてある。そんな中で生活してきた俺の常識は、少なくとも常人が『常識』と呼称出来る代物では無くなっていた。もう自信がどうかは関係ない。

「感動の再会つてやつか？まさか時雨が神夜の姉だったなんてな。どうりで気にかけるわけだ」

いつの間に戻ってきたのか、俺の後ろに居たのは、さつき部屋のドアを蹴破つて飛び出した暗鬼さんだった。
何処に行つてたんだこの人は。

「暗鬼君……」

「なあ時雨……単刀直入に聞け。この窓ガラス壊したの……お前だな？」

「え？」

俺は暗鬼さんの言ったことが理解できなかった。確かに、可能性からすると、この窓ガラスを割つたのは義姉さんしか考えられない。だが、寮に有る窓の数は決して少なくないし、それこんなにもたくさん、ましてや一瞬で破壊することなぞ不可能だ。まあ、それも『常識的』に考えればの話。

「暗鬼さん、そう思う理由は何ですか？」

俺は大して驚く風もなく、暗鬼さんに訊いた。

「お前が最初に言っただけ神夜。破片が濡れてるって。水使いがやったんだ」

聞いてたんかい。なら何故出て来なかったのだろう。

「じゃあ義姉^{ねえ}さんは」

「そう、時雨は水の魔法使いだ。それも……」

「待つて暗鬼君。その先は言わないで頂戴」

一瞬目を鋭くした義姉^{ねえ}さんは、暗鬼さんにそう告げる。暗鬼さんも仕方無さそうに「分かったよ」と肩をすくめてみせた。

確かに魔法使いなら何らかの術式で窓ガラスの一斉破壊をやつてのけることが可能だろう。俺も追求する気は起きない。人には誰しも知られたくない事が一つや二つ有る。この俺が体験した『^{カオス・}混沌の放課後^{アフター}』のように。

「本題に戻るわね。確かに私がこの窓ガラスを壊してこの僚に侵入した。女子寮から遙々やつて来たの。神夜、あなたに会うためにね。正攻法じゃ入れてくれなかったから」

義姉さんは寮生だったのか。どうりで会わないわけだ。まあ寮生じゃなかったら、俺の家と一緒に生活してたろうけどな。

ただ、男子寮と女子寮はこの学園の敷地内に建てられているから、歩きでも十分とかならない。遙々という表現はどうかと思う。

「でも義姉さん、わざわざ窓ガラスをこんなにぶっ壊して入って来ること無いでしょ？別室の人達に………っ！」

待てよ……他人？

この場には暗鬼さんと俺、そして義姉さんの三人しかない。俺は最初の疑問に再度ぶち当たった。義姉さんとの再会という感動的な場面の介入によって、意識の外へと追いやられていた疑問である。

「そうだ……義姉さんは眠らせた訳じゃないって言っていた。ではどうなってるのか説明してくれますか？この無人状態のからくりを」

「どこから説明すれば良いのやら……とりあえず、部屋に人は居るのだけれどこの騒ぎには気付いていない、と言うべきね」

気付かないわけがあるものか。あれだけ耳障りな騒音。気付かない方がどうかしてるよ。

と思ったが、状況が状況だけにそうも言ってもらえない。実際、この場には暗鬼さんと俺、そして義姉さんしか居ないのだから。

「私の友達に“そういう”能力者がいてね、ガラスの割れる音を遮断してもらったの。“あなただけに音が届く様に”」

それなら一枚だけ壊して入って来れば良い話であろうに、義姉さんはわざわざ俺の住む学生寮二階の窓ガラスを全てぶっ壊した。

「ならば一枚壊せば良い話でしょ？何故全て壊して入ってきたの？」

「腹いせ」

めちやくちやタチの悪い腹いせだった！

正攻法で入れてくれなかったからってここまでやるか普通？俺も暗鬼さんも寮生活だからあまり気にしないが、寮には門限があるらしい。

確か『第三百八十四条、寮生は午後十一時をもって外出を禁止する』だったはず。そして『第三百八十五条、寮生以外の生徒は午後八時をもって訪問を禁止する』というのが、この寮に関する校則の一部。これは男子寮と女子寮に共通した決まりだ。午後九時を回ってしまった今、義姉さんはこの男子寮には入って来れない、ということになる。決まりに従うタイプではない俺も、“これを守らなければ寮生活の許可は出来ない”なんて言われちゃ従うしか他に道など無かった。

「こりゃあ、後で寮長が大爆発しそうだな」

絶対しません。

大激怒はするかもしれないけど。

「ああ、そうだ。暗鬼さん、オーディン・ストライク主神の一撃の方はどうなりました？」

「そこに居るじゃん」

「そこって？」

「ほら」

と、暗鬼さんは義姉さんを顎で指す。

「冗談でしょ？」という眼差しを暗鬼さんに向けてみるが、暗鬼さんは首を横に振った。オーディン・ストライク暗鬼さんの反応から察するに、どうもどうやら、義姉さんは主神の一撃の一員らしい。

「……マジ？」

義姉さんは照れ笑いしながら小さく頷いた。その笑顔がとても愛おしい。俺は無意識に義姉さんの正面に立つと、その体を抱き締めていた。

オーディン・ストライク
今は主神の一撃がどうかはどうでも良い。ただ義姉さんの存在を認識したかったのだ。

「え……あ……」

とても細くて華奢な義姉さんの体は、少し力を加えただけで簡単に壊れてしまいそうだ。義姉さんは少々驚いてはいたものの、抵抗しなかった。

俺に体を預けてくれる。ふわりと、義姉さんの良い匂いがした。義姉さんにとって、二年間という時間はかなりの障害になったことだろう。二年前に死んだ筈の人がいきなり目の前に現れれば、誰でも肝を冷やすこと請け合いだ。いや、肝を冷やすならまだ良い。多くの人は、近付くのも躊躇うだろう。

俺がもしその立場なら、拒絶されるのが怖くて顔も見せられないと思う。だが、そんな事を省みず、義姉さんは俺に自分の存在を知らせに来てくれた。

「義姉さんは、いつも唐突過ぎる。今日だって腹いせに窓ガラス大量に破壊してさ。でも、それが義姉さんなんだよね？」

義姉さんを抱き締めたまま、呟く様に言葉を紡いでゆく。
ねえさん
壊れてしまいそうな程華奢な存在を確認する様に。

「昔から何一つ変わらない。それが時雨^{わたし}よ……そうでしょ？、神夜」

俺の背中へと回した義姉さんの腕に力がこもり、抱きしめ返してくれた。義姉さんの温もりが伝わってくる。

しかし、それと同時に何か別のものも伝わってきた。何と云えば良いのやら……まるで義姉さんという器いれものの中に“別の人の命”が存在している……それも、俺のよく知っている人の命、の様な気がしたのだ。

俺は気分の悪さに思わず義姉さんを突き放す。

その義姉さんは“やっぱりそうか”とでも言いたげな顔をしていた。

「あなただけは誤魔化せないみたいね」

「ハア……ハア……誤魔化す？何を」

「あなたが気付いたとおり、この体は……私は……」

止める。言うな。義姉さん、その先を言わないでくれ。知ってしまつたら……俺は……。

「他人の命で生きてるの……『ライフ・プレイヤー生をねじ曲げる者』の能力、ソウルシ生命転移フトによってね」

俺は義姉さんを見据えたまま黙っていた。いいや、「言葉が出て来ない」だけだろう、きつと。

他人の命で生きている……つまりはこういう事だ。

“義姉さんは他人の命を犠牲にして生きている”

……人の嫌な予感というものは、どうしてこうもよく当たる

のだろうか。その的中率を宝くじに持っていきたくらいだ。

生き返ったのは事実。だが、他人の命を使った蘇生。対象となる人の命を死体に移し替えることでその死者をもう一度この世に呼び戻す、といったところか。そして、命を移し替えられた人は当然のことながら死んでしまう。

他人の命、それも俺のよく知る人物となると、

「……父さん、か」

義姉さんは黙って頷いた。

俺は驚くこともなく、寧ろ納得していた。俺の父親、明星響夜^{みょうせいひびき}は他人の為に命を張る様な、そういう人間である。それが自分の娘ならば尚更。

しかし、義姉さんがそれを望むわけが無い。

父さんが『ライフ・ブレイカー^{ライフ・ブレイカー}』に自ら申し出たと考えるべきだろう。

「本当はこんな命、要らなかった。でも、父さんは私をこの世に呼び戻した。これからは父さんの分まで生きなきゃって思ったから……だから！」

「もう、良いよ……義姉さん。父さんはそういう人だから」

母さんもそれを承知で止めはしなかったのだろうし、何より義姉さんとまた共に居られる。今はそれだけで十分だ。

「おいお二人さん。取り込み中のとこ悪いんだが、そろそろ寮長が来ちまうぞ？時雨、今日のところは引き上げてくれや」

「そうね。今日は神夜の顔を見に來ただけだから、もう男子寮^{こし}に用

は無いわ。じゃあね神夜。テストがんばんさいよ」

「言われずとも」

笑顔を残し、義姉さんは窓から飛び降りた。ここ二階ですけど…
…まあ大丈夫だろう。あの義姉さんだし。

俺と暗鬼さんはその場から撤退し、俺の部屋に戻って何食わぬ顔で勉強を再開した。それから暫くして、今にも怒りで大爆発しそうな寮長が部屋を訪問し、「犯人を知らないか」と訊いてきたが、知らん振りを決め込んだことは、言うまでもない。

第十七局〜二年という壁〜（後書き）

やっと次話でテストに入れそうです。ではまたお会いしましょう。

第十八局　試練（前書き）

やっとテストの話に入れました。何だかわけの分からない話になりましたが、許せる方はお付き合いください。

第十八局　試練

「一時限目が国語、二時限目が数学、か……なんとも普通の順番だな。いきなり魔法学、なんて奇想天外な順番を期待してたんだが。なあ神夜」

「そんな意味不明かつ理解不能な順番があつてたまるかつての。魔法学が一番の難関だぞ？普通は最後にもってくるものだ。大体終冴、お前バカなのいきなり魔法学やつたってどうせ撃沈するに決まってるだろう？最初は基本からってな。まずは国語と数学から消化しろってことさ」

「神夜、バカはちよつとばかり失礼だ。せめて“物覚えが悪い”と言つてやれよ」

いや、悠聖、お前は知らんだろうが終冴は記憶力だけは良いからそうは言えない。だが、横槍を入れるのも面倒だから、放っておこう。

「もうこの際アホで良いんじゃないの？」

それも悪くないな。

「お前ら！俺を苛めてそんなに楽しいか！？」

ああ、最高だ！と言いそうになったが何とか堪えた。実際のところ、本当に終冴はバカであるからして、魔法学で赤点は免れないであろう。そんな終冴が何故、この学園に入ることが出来たのか。それは、人並みはずれた運動神経を持っていたからだ。体育の時だけ

はバケモノみたいな運動能力を見せつけられ、クラス中が啞然となるばかりだった。しかし、運動神経が良過ぎてその反動なのかは知らんが、おつむはからつきしなのである。

連みだしてから日は浅いものの、終冴のバカさ加減は俺だけではなく、この場に居る残りの三人も十分承知のはずだ。

俺達五人は教室の前方、授業用ディスプレイに映し出された今日のテスト予定を見ながら、そんな取り留めも無い日常会話を続けていた。

昨晚に起こった、窓ガラス大量破壊事件の事など知る由も無く。理事会側としても、余計な混乱を避けたかったのだろう、寮長が皆に口止めして回っていたのを暗鬼さんが発見していた。

事件の話はこれくらいにして終冴の話題に戻るとしよう。

この教室において終冴がいじられるのは早くもマンネリ化しているらしく、何故か笑いの中心にはいつも終冴が居る。可哀想なんて塵ほども思ったことは無い。むしろ楽しんでる。

他の連中も終冴がいじられるのを楽しみにしている風もあるわけだ。ただ、トーマだけはそのやり取りに参加せず、一人で読書タイムに移行していた。

えーと、題名は……『サイキック魔回路によるエネルギーフィールド魔法力場の展開と応用』？…

…ダメだ。ぜんっぜん分からない。俺が読んだところで一行も分からないだろう。

俺達一般人には縁の無い科目、つまり魔法学の分野であるから理解不能……で済ませられれば良いのだが、この学園には魔法使いも多く、無碍にする事は出来ないらしい。魔法学は魔法使いだけがやってれば良いと、昔そう言った人が居たそうだが、統括理事会の年寄り共は聞く耳持たずの状態だったとか。

（あゝ、こんな難解な教科、どうすれば良いんだか）

俺が頭を抱え唸っていると、不意に教室のドアが開いた。

「みんなあ、席についてえ？」

このマイペースな声は沈黙先生。何故語尾が疑問系になっているのかは分らないが、口調的にそうなってしまうのだろう。声は相変わらず透き通る様で、聞く者を魅了する美しさを内包した美声である。簡単に言うなら、“色気のある声”だ。

「テスト前に、先生から連絡がありました。今回のテストで一番悪い点数だった人は……」

だった人は？どうなるんだ？

「フフフ……」

さつさと言え！

「罰ゲームを受けてもらいます。その内容はあって私が連絡するから、それまでのお楽しみ！」

……。

……。

………は？

罰ゲーム？一体そりゃ何の冗談ですか？沈黙先生。大事なテストなのにそんなゲーム感覚でやられても困ります。

だが一方で、『罰ゲームを付けば皆が罰ゲームを逃れようと必死になってやる』というメリットが有るわけだが、後者であることを祈るうではないか。

まあ、一番点数が悪い奴なんてもう決まっているも当然なのだから、今更である。先生もそれを分かって言ってるはず……

（面白くなりそうだ）

そんな事を考えていると、教室の視線が一斉に終冴へと向けられていることに気付く。

「なっ！？何故みんな俺を見てる！俺がビリとは限らないだろ？」

抗議すべく終冴が立ち上がるも、全員がこれまた一斉に首を振って否定した。

「ち……ちくしょおおおおお！」

目に涙を溜め、絶叫しながら教室から走り去っていく終冴。
いや、もうテスト始まるんですが……。

皆が席につき、問題用紙が配られる。先程教室から走り去っていた終冴はというと、俺の前の席で

「フッフ……フハハハ……アッハッハッハアアアア！」

壊れていた。

だが、そんな事にいちいち構ってはられない。

一限目は国語。俺が現国と呼んでいる教科だ。先ずは歴史の問題……は？歴史？国語じゃない！？

そつえば国語は沈黙先生の担当だった。あの人、やたらと歴史

が好きだつて聞いたことがある。だからといって国語のテストに織り交ぜる程の歴史好きとは、恐れ入るよ。主旨を完璧に間違えている。その問題とは『アーサー王伝説』についての説明文だった。説明文ならば国語として認められるのだろうか？

アーサーはブリテン王国に君臨した絶対的な王。後に騎士王と称される程の名君である。前に話したかもしれないが、俺は学校こそ嫌いなものの、歴史だけは学年トップの成績をキープし続けた。ろくに授業も受けなかったにも関わらず、何故そんな成績でいられたのか、今でも不思議で仕方がない。

『問一、アーサー王が最初に手にした剣の名を答えよ』

“最初に”という言葉でピンと来た。

アーサーが手にした剣は聖剣エクスカリバー。これは誰もが知っていることだが、最初に手にしたのはエクスカリバーではない。

これはあまり知られていないが、エクスカリバーはカリバーンという、“王を選定する岩に刺さった剣”が元になっている。アーサーはそれを岩から抜き、ブリテンの王と成った。しかし戦いの最中、カリバーンは折れてしまう。

その日の夜、アーサーは湖の女神からお告げを聴き、明くる朝、折れたカリバーンを湖に投げ入れると、カリバーンはエクスカリバーと成ってアーサーに授けられる。後にアーサーがモードレッドと相打ちになり、アーサーの死後、エクスカリバーは湖の女神に返却され、二度と人の手に渡ることなかった。というのがエクスカリバーの歴史。

故に答えは

『カリバーン』

沈黙先生も中々マニアックな問題を出してくる。……というかこれはテストではなくクイズだと思っただが。説明文に全く書かれていない事を訊かれても困る。さて、次の問題は……

『問二、太陽神ルー（光の神ルー）が創ったとされる魔槍、ブリューナク。その特徴を答えよ』

今度は神話かよ！しかも脈絡が一切無い。

アーサー王伝説の途中から、何の繋がりも無い神話が飛び出して来ていたのである。

だが……まあ良い。神話も俺の得意分野だ。

魔槍ブリューナクの特徴、それは

『槍自体が意思を持つ』

と、言われている。

確かめるすべは無いが、神を崇拝していた大昔の人の考える事だ。神ならそんな槍を創れても不思議ではないと思っただろう。

よく知っていた、と自分を褒めて撫で回したいくらいだが、まだテストは終了していない。自分を褒めるのはそれからでも遅くはないはずだ。この後も、

『問七、グングニルを武器とするオーディン。その別名を答えよ』

だとか

『問十四、円卓の騎士において最強とされている人物の名を答えよ』

やら歴史や神話寄りの問題が登場したが、俺は何故か全てを答えってしまった。因みに、問七の答えは『主神』。学園自治団の名にも

使われている、いわずとした最高神、オーディンの通り名。
そして、問十四の答えは『ランスロット』。名剣アロンダイトを
操り、馬上の戦いにおいて右に出る者は居なかった程の名騎士であ
る。

二時限目・数学

『3以上の自然数 n に対して $x + y \parallel z$ （全ての文字に n 乗）を満
たすような自然数 x 、 y 、 z は存在しない。これを……』

分かるか！

これ『フェルマーの最終定理』だろ絶対！天才学者ワイルズが証
明するまで365年間誰にも解けなかった数学最大の超難問を高校
のテストで出す奴がどこに居る！……この学園に居た。

いくらレベルが高いからってなあ……こんなもん解けるかつての。

『証明しなくても良いです』

フエイントかよ！

そう思った瞬間、ゴツツ、という鈍い音がして、皆が座ったまま
机に頭をぶつけていた。テスト中だから後ろにひっくり返るわけに
もいかなかったらしい。

ああ……このテスト、先が思いやられるな。この学園の先生は変
わり者が多すぎる（という俺の勝手な推測）。こんなんでよく日本
五大学校の一つが務まるものだ。因みに日本五大学校とは、この日
本で五本の指に入る名門校のことである。

捨て駒学園、冥王学園めいおう、聖翔学園せいしょう、郡ヶ丘学園こおりがおか、そして煌麟学園こうりん。
いずれも名だたる学園ばかり。

しかし、捨て駒学園がその枠に入っていることが俺からしてみれ
ばもう既に勲章物であり、在校生としては驚きの一言な訳だ。

さて、話を戻したいのだが、え〜と……何の話だったかな……あ、そうか。テストについてだったな。

数学のテストは最初のフェイント以外、割とマトモな内容だった。レベルこそ高校二年生クラスだが、暗鬼さんに教わった内容がそのまま出題されたんで、九死に一生を得たわけだ。

ああ、暗鬼さんが居なかったら今頃俺は九死どころか破滅していたという意味だからな？

一日目は無事に、と言って良いか分からないが、まあ終了した。

「輝土先生、あのフェイント、笑えませんでしたよ？」

そう言ったのは、神夜達 歩兵^{ポーン} 一組の担任、咲群沈黙その人だった。笑えないと言いつつも、笑顔である。

沈黙は今、職員室でテスト答案採点の真っ最中。歴史ではなく国語のテストだ。

「笑えたのは問題自体では無く、生徒のリアクションでしょう？分かっていますよ。そうなる様にあの問題を作ったんですからね」

沈黙の発言に答えたのは、沈黙から見て右隣の机に座る数学担当教師、輝土紅一朗^{きんいちろう}。眼鏡が似合うハンサム先生だ。こちらも数学の採点中である。

確かに一クラスの生徒が一斉に頭を机にぶつけている光景は、想像しただけで爆笑ものなのだろうが、それを楽しむ為に『フェルマーの最終定理』を高校テストに用いるところなどは、“変わり者”

というには十分な要素だろう。しかし、“変わり者”とはいうものの、紅一朗はその自覚が無いらしい。何せ、この学園には変わり者しか居ないと言っても過言ではないからだ。

変わり者の中に居れば、自分が変わり者だという自覚など現れる筈も無い。

「ああでも、神夜君だけは机に頭ぶつけてませんでしたよ？流石、私のお気に入り！」

何故か上機嫌になっている沈黙を余所に、突然席を立ち上がる紅一朗。そして、職員室のドアを開け放った。

「どこに行かれるんです？」

「採点が終わったので、約束を果たしに行つて来ます」

「約束……ですか？」

沈黙は首を傾げた。

「ええ。ある生徒から、私と魔法で勝負したいと申し出がありましたね。ちよつと演習場に」

「輝土先生に魔法で勝てる人なんて居るのかしら？」

「居ると思いますが、闘やつてみないことにはどうとも言えませんよ。では」

紅一朗は職員室を後にする。職員室には、ペンの、紙を滑る音が暫く響いていた。

第十八局　試練（後書き）

何がしたかったんでしょね、私。何かしょうもない話になりました。申し訳ありません。

これからよろしくお願いします。

第十九局　聖焰VS火炎（前書き）

かなり遅れましたすみません。

新キャラ登場します。

書いてて炎斗君が可哀想になってきました。

これから頑張りますので宜しくお願いします。

第十九局　聖焰VS火炎

「輝土先生、今日は俺の申し出を受けていただき、ありがとうございます」

「いえいえ。三年　王^{キング}のあなたに頼まれるとは、嬉しい限りですよ。それに私は生徒からの頼み事を断れない性分らしいんです」

演習場で向かい合う二人の人物。一人は、数学担当教師で、眼鏡の似合うハンサム先生こと輝土紅一朗^{きんじこういちろう}。対するは、三年　王^{キング}にして学園自治団主神の一撃の一人、鉄城炎斗^{くろがねしょうえんと}。両者とも、優れた魔法使いである。

今日二人がここに来たのは言うまでもなく、炎斗が紅一朗に挑戦するためだ。一個人の願いであるから、見物人は居ない。いや、居ないと言うよりも、炎斗が演習場を立ち入り禁止にしてほしいと頼んだ、という方が正しいか。

炎斗は上級の炎使い、火炎奏者^{ファイロ・クルーナー}。学園の中でもトップクラスの魔法使い。だが、それはトップクラスというだけで、トップではないのだ。しかしそれでも、本気を出した時の被害は計り知れない。それが達人同士の戦いというものだ。

「先生に俺の魔法が通用するかどうか、試させてもらいます」

「何なら踏み台にするくらいの気持ちでどうぞ。私は構いませんよ？」

「分かりました。では……」

辺りが静寂に包まれ、まるで時が止まったように物音一つしなく

なった。

そして、

「奏でられし紅き旋律……セヴン・トラック第七演奏曲！リボルエンプレム乱打される炎球！」

炎斗の詠唱により出現した魔法陣から無数の炎弾がサークル発射され、紅
一朗へと向かう。

「遠距離魔法ですか……それも」

ビュオッ！

「かなり」

ブオン！

「高威力」

バヒュ！

「ですね」

炎弾を掠るギリギリ、しかも最低限の動きで完璧に避けながら紅
一朗は話し続ける。

その華麗なまでの動きは、さながらダンスをみている様だ。加え
て紅一朗は、炎弾をかわしているにも関わらずその威力を見極めて
いた。

そして炎弾が途切れた僅かな隙に、片手を前方に翳かざして標準を炎
斗に定める。

「では、私もいきましようか。ちゃんと防いで下さいね？」

“その名は焰、その真髄は無。眼前に存在せし万物を消し去れ”
『エクスブロード
滅却神焰波』」

紅一朗の掌に出現した魔法陣サークルから焰が怒涛の勢いで射出され、相對した炎斗の魔法陣から放たれ続ける炎弾を飲み込みながら、炎斗に襲いかかった。

これに対し炎斗は、

『スラッシュ・トラック アロン
刃演奏曲……燃え盛る、斧剣才オオオオ！』

掌に出現させた炎渦の中からアロنداイトを掴み取り、焰に振り下ろす。

焰は轟音と共に両断され、空中へ拡散した。

紅一朗はアロنداイトの、焰をも切断する攻撃力に多少なりとも興味を持ったらしく、「ほお」と感嘆の声を漏らす。

『エクスブロード
私の滅却神焰波を斬り裂きますか……』バイロ・クルーナー
『ヴォルケイト火炎奏者』の魔装、名剣
『エクスカリバーアロنداイト』。ならば私もお見せしましょう。剣焰製……灼熱の聖剣』

アーサー王の伝説で広く知られている聖剣、エクスカリバーを、紅一朗も同じ様に焰渦を出現させ、その中から掴み取った。

それは言うまでもなく、世界最高峰の剣である。

「伝説の騎士王、アーサー・ペンドラゴンVS円卓の騎士第一位の実力者、ランスロット、ですか……面白い」

紅一朗はニヤリとしてエクスカリバーを構えた。

炎斗も何やら不吉なものを感じ取ってか、アロンドイトを構え、迎撃体勢をとる。嫌な汗が炎斗の頬を伝った。

「聖剣エクスカリバーを作り出せる程の魔力、そしてあの滅却神焰^{エクスプロード}波^{ード}という魔法……………輝土先生。あなたは一体何者なんです？」

「私の階級は『聖焰神王^{アグニ}』。火としては最高の魔力使いの様ですね。鉄城君、あなたの階級『火炎奏者^{バイロ・クルーナー}』よりも上になります」

「『火炎奏者^{バイロ・クルーナー}』の上なんて聞いたことが無い……………」

魔法使いの階級は低級、中級、上級が基本。だが、稀にその三つのどれにも当てはまらない階級が存在していた。今の紅一朗がその例だ。上級『火炎奏者^{バイロ・クルーナー}』の更^{バイロ・クルーナー}に上、神級『聖焰神王^{アグニ}』とでも言うっておこう。異常な魔力を有する魔回路を体に宿して産まれた者は、神級へと上り詰めていく。元からの素質がケタ違いなのだ。

上級者が秀才ならば、神級者は奇才といったところか。もう一度言うが、天才では無く、奇才である。

「神級……………『聖焰神王^{アグニ}』……………」

「おやおやあ？どうしました？怖じ気付きましたか？」

「ハッ……………まさか」

炎斗は口の端を吊り上げて笑みを浮かべる。

「先生を倒したら俺がこの学園最強の炎使い。そう思うと、嬉しくてたまらない！」

炎斗が地面を蹴った。距離を詰め、紅一朗の正面に向けてアロンドイトを振り下ろす。

紅一朗は右足を軸にして体を90°左に回転。胸に当たるスレスレでかわし、エクスカリバーで炎斗の横つ面をなぎ払った。

炎斗はそれをしゃがんでかわす。

そして手首を捻り、地面にめり込んでいたアロンドイトの刃で演習場の土をすくい上げ、土煙を発生させた。その土煙は、紅一朗の視界を覆い隠す結果に。

「くっ……」

紅一朗は後退して距離を空ける。眼鏡のおかげもあってか、砂が目に入ることは無かった。

もし眼鏡をしていなかったら、紅一朗は本当の意味で視界を奪われ、速攻で敗北していただろう。ここは眼鏡に感謝である。

「やりますねえ……」

「円卓の騎士最強と呼び声の高いランスロット。その剣技はアーサーをも凌駕していたらしいですからね。油断していると、瞬く間に肉塊になりますよ?」

「ふうむ……ではこちらも、魔回路を少しばかり開きましようか」
サーキット

そう言った途端に紅一朗の体から異常な程の魔力が溢れ出し、演習場全体を揺らした。その途方もない魔力に、炎斗は身じろぎしてしまう。

「なっ!?!? 　少し開くだけでこの魔力だと……底が見えな……いっ
っ!?!?」

いつの間にやら、一瞬で炎斗との距離をエクスカリバーの射程範囲内まで詰めた紅一朗は、手にしたその聖剣で炎斗の顔を横一閃に薙いだ。

炎斗はたまらずアロンドイトで受け止める。鈍い音と共に剣と剣がぶつかり合い、大気を震わせた。

「くうっ……！」

間一髪、顔への直撃は逃れたが、腕の方はそうはいかなかったらしく、痺れて力が入り辛くなっていた。

「これでアロンドイトも握れない、いえ、振れないでしょう……この絶対的不利な状況下であなたは私にどのような逆転劇を見せてくれるのですか？」

紅一朗は余裕の笑みをその顔に張り付けると、エクスカリバーを構えて地を蹴る。

炎斗は飛び退いて距離を獲ろうとするが、紅一朗の加速が尋常では無く、炎斗の眼前まで迫っていた。

そして紅一朗は、炎斗の脳天に向けてエクスカリバーを……

「これで……」

「まだ『^{チェック}王手』には早いですよ」

「っ!？」

振り下ろすこと叶わず。

紅一朗は躓いた。その足元には小さな溝。つま先が引っかかるか

引つかからないかという小さな溝につま先を捕られて躓き、よろけた。

エクスカリバーを振るえなかったのだ。

いつの間にか紅一郎は始めの位置に立っている事に気付いた。炎斗は紅一郎と戦闘を繰り広げながら紅一郎をこの場所に誘導していたのである。

「っ！これは……」

「俺が、ただ目潰しのためだけにアロンドイトで地面を抉^{えぐ}ったと思いましたが？」

「まさか……あの初撃はこの溝を作るための？」

「……どうやら私は、あなたを甘く見ていた様ですね」

そう。炎斗が紅一郎の眼鏡に気付かないわけが無かった。

目潰しというのはダミーであり、実際は一瞬の隙を作り出すための溝を作る、というのが炎斗の真の目的だったのだ。伊達に王^{キング}という最高のクラスに所属しているわけでは無い。

「だから言ったでしょう？……油断したら、瞬く間に肉塊に成ると！」

炎斗は紅一郎に向けてアロンドイトによる突きを放つ。振れないなら振らなければいい。やり方はいくらでも有るのだ。紅一郎は避けきれず、防御も出来ず、突きを腹に喰らって吹っ飛ばされた。

紅一郎の転がった地面から土煙が上がり、視界が若干悪くなる。

紅一郎を目視することは出来なくなった。

「少しは効いたでしょう？」

炎斗がアロンドイトの切っ先に付着した鮮血を拭いながら不敵に笑う。しかし、その笑いは次の瞬間には炎斗の顔から消え去った。ドスツ、という音と衝撃と……そして、痛みによって。

「な……に……？」

視線を下に落としてみる。自分の腹から伸びている美しくしなやかな刀身。見間違う筈の無い、聖剣エクスカリバーのものだ。そして背後には、エクスカリバーの柄をしっかりと掴む紅一朗の姿もある。

同時に炎斗は口の中が生暖かい液体で満たされるのを感じた。

「突きは……完全に先生を……捉えた筈。なのに……何故………」

「簡単な事ですよ」

土煙の中から紅一朗が、服に付いた砂や埃を払いながら立ち上がる。腹部からは出血し、純白のシャツを血が赤く染めていた。

「確かにあなたの突きは私に命中しました。しかし、エクスカリバーを手放すところを見ていなかった様ですね。あなたの後ろに居る私は、私が焰で造り出した分身です」

紅一朗が指を鳴らす。炎斗の背後でエクスカリバーを握る紅一朗は、炎斗の体からエクスカリバーを引き抜いた。

そして、エクスカリバーを紅一朗本体に投げ渡す。すると、分身は元の焰となり、空中に散布した。

あの時、炎斗の突きが決まる一瞬の事。紅一朗はエクスカリバーを炎斗の後方に投げ、それと同時に術式を展開して焰による分身を

造った。その分身はエクスカリバーをキャッチし、背後から炎斗の体にその刀身を突き立てたらしい。分身は紅一朗の思い通りに動かせるとみて間違いは無いだろう。

「これが特殊魔法術式『レッド・ゲンガー焰の生き写し』です。何も魔法は攻撃の為にだけに存在しているわけではありませんから」

紅一朗は柔らかに笑った。

『魔法式の応用で分身を造り出す』

炎斗にも出来ないことは無いが、その為には膨大な魔力が必要となる。上級者でも、魔回路を全開にして尚且つ魔力の半分を注ぎ込まなければ、自身と同じ姿勢を持つ分身を造り出すことは不可能。サーキット魔回路を僅かに開くだけでやってのける紅一朗は、やはり魔法使いの中でも群を抜いている。

「成る程……勉強に……なりました」

「それは何よりです。あの奇策は中々でしたが……これで終わります」

「今度は勝ちますよ」

「楽しみですねえ」

紅一朗は今度こそ、エクスカリバーを炎斗に向けて振り下ろした。その斬撃は命中する筈だったが、エクスカリバーは空を斬り、刀身はそのまま地面へと吸い込まれていた。

炎斗は消えた。先程まで立っていた場所から跡形も無く。

「おや？消えてしまいましたね。まさか……いつか威塚君、あなた貴方ですか？」

紅一朗は大して驚いた様子も見せず、とある生徒の名前を呟いた。

「余計なことをするな。鷹^{たかゆき}祐」

「助けた恩人に対してその言い方は無いと思うけど？」

炎斗は演習場の外にいた。気付けば鷹祐と呼ばれた青年が側に居て、演習場の外に居たのだ。連れ出されたと考えるのが普通だが、気付かない内に連れ出されたとあつては状況も理解しかねる。だが、炎斗の反応は違っていた。

「チツ……このお節介が。同じクラスだからって『五人の規格外』の一人が簡単に出て来るなよ。放課後は立ち入り禁止だって聞かなかったのか？警備の先生も居た筈なのに」

「僕の前ではそんなもの無意味だって分かつてるだろ？親友」

鷹祐は笑った。無邪気な子どもの様に屈託無く。それは時雨等が時たま見せる営業スマイルではなく、鷹祐の素顔であつた。

威塚^{いつかたかゆき}鷹祐。炎斗と同じ三年^{キング}王に所属すると同時に、『五人の規格外』の一人。^{ファイフス・アウトロー}

『五人の規格外』とは、能力者の中でも特に強力で反則的な能力を持つ能力者五人を総称した呼び名である。^{アンチルール}『掟破り』の二つ名を持つ最強の二年生、疑心暗鬼も『五人の規格外』の一人だ。^{ファイフス・アウトロー}

暗鬼は規格外どころでは済まされない能力の持ち主ではあるが、鷹祐もその一角を担う存在。しかし、滅多にその能力を使う事は無い。あるとすれば、

「僕は友達を助ける時と、自分の身を守るときにしか能力は使わない主義だからね。」

僕の能力『オーバーフロー流動停止』はむやみやたらに使うと大惨事のオンパレード！」

「まあ、確かに……“あれ”は、勘弁願いたいな」

「暗鬼君の鬼畜能力ルール・カスタマイザーには負けるけどね」

「っ！」

暗鬼という名を聞いた瞬間、炎斗は眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに踵を返して校舎へと歩みを進めた。

「え、炎斗？」

鷹桁の呼び掛けにも振り返らず。傷口を押さえることも無く。

「あらら、NGワードだったか……」

鷹桁は後頭部を掻きながら炎斗の後を追いかけた。炎斗の通った後には一本の紅い道が出来ていたという。

第十九局　聖焰VS火炎（後書き）

さあ次話はテスト最終日です。二日しか実施されませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0920t/>

チェック・メイト

2011年11月24日22時53分発行